

## 反キリストとその王国

<https://ichthys.com/Tribulation-Part3B.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

### 内容

I. 反キリストの定義、名前の出所、預言における予型.....	2
1. 定義 .....	2
2. 反キリストの名前.....	5
3. 預言における予型.....	6
II. 反キリストの起源、性格、台頭.....	12
1. 反キリストの起源.....	12
2. 反キリストの性格.....	40
3. 反キリストの台頭.....	47
III. 獣の王国.....	58
IV. 反キリストのイスラエルとの同盟.....	68
V. 第一次南部戦争.....	74
VI. 第二次対南部戦争.....	79
VII. 反キリストの暗殺と蘇生の様子.....	83
VIII. 「荒らす憎むべきもの」と反キリストの「着座」.....	87

はじめに： 前回は、艱難期の前半を特徴づける神と悪魔の動向として、次のような組み合わせを指摘しました。

<艱難期の動向>

悪魔による                      神による

霊的領域： \*大いなる背教 <> \*世界的福音伝道

この世の領域： 反キリストの台頭<> \*世界的な警告の裁き

私たちは、この四つの傾向のうち三つ(上に星印をつけたもの、すなわち、大背教と、それと対照的なモーセとエリヤの指導による 14 万 4 千人の世界伝道、およびキリストの到来が近づいていることを世界に警告するための一連のラッパの裁き)を取り上げました。これから、神の恵み深い警告に反対し拒絶する悪魔的動向の中心人物、すなわち反キリストについて詳しく述べることにします。

第一の封印による反キリストの出現の短い暗示の箇所(黙示録6章2節)を除けば、黙示録が「獣」を正式に紹介するのは13章になってからです。その時、以前から預言されていた艱難期中盤の劇的な出来事がついに起こり、獣はその正体、すなわちサタンの反キリストであることがはっきりと明らかになります。この時点で、黙示録の読者は、反キリストの艱難期の経歴を、回想的にも展望的に(非常に象徴的に)も説明されることとなります(黙示録13-17章)。艱難期前半の他の主要な出来事が論じられるまで反キリストの紹介を遅らせることで、読者は「獣」とその甚だしい経歴を全体としてよりよく考察することができ、また、真にキリストに従う者を迫害する、代替キリストとしての主たる役割に注意を向けやすくなります。疑いなく、神の靈感を受けたこのアプローチは、読者(または教師)が反キリストの全景を補完できるように、反キリストについての聖書の多くの箇所に精通するようになることを前提としています。なぜなら、サタンの偽メシアの明確な全体像が分からないと、(この大激甚の時代における悪魔の反神戦略の核心を見誤ることになり)、大艱難期(黙示録13-17章)、その後のバビロンへの裁き(黙示録17-18章)、再臨(黙示録19-20章)の具体的な内容が、ある人々には支離滅裂に見えるかもしれないからです。このシリーズでは、これらの教えを黙示録の包括的な「歴史」のように展開していくことを目的としているため、大艱難期に入っていく前に、獣の最初の出現から、艱難期前半における獣の活動について聖書が述べているすべてのことを取り上げていく必要があります。

## 1. 反キリストの定義、名前の出所、預言における予型

### 1. 定義

まず第一に、反キリストは単なる象徴ではなく、実在の人物であることを理解する必要があります。具体的に反キリストは、サタンの代替キリストで、実際にキリストであると主張し、艱難期前半に権力を持ち、後半の大艱難期に世界を支配するものです。ですから、私たちは複数の偽キリストに注意する必要があります(マタイ24章23-28節; マルコ13章21-23節; 第一ヨハネ2章18-22節; 第二ヨハネ1章7節参照)。そして「反キリストの霊」はすでに世の中に存在していますが(反キリストの治世を特徴づける無法状態: 第一ヨハネ4章3節)、聖書は、この特別な究極の反(アンチ-)キリストの到来という事実について、明確に述べています(第一ヨハネ2章18節, 4章3節; ダニエル8章11節参照)。彼はイスラエルと教会をかつてないほど迫害し(ダニエル11章31-35節)、神の神殿に座って自らを神と宣言し(第二テサロニケ2章1-12節; ダニエル11章36-37節参照)、ハルマゲドンの戦いで帰ってこられる主イエス・キリストに敵対する者です(黙示録19章19-21節; ダニエル8章25節参照)。

ギリシャ語の前置詞アンチ(α ν τ ι)は、このような複合語で使われる場合、二つの意味を持つことが多く、この言葉を聞いたり、読んだりした当時のギリシャ語のネイティブ・スピーカーは、どちらも思い当たる節があるはずです。まず、「アンチ」という単語は、接頭辞として付けられたものに対して「反対の」という意味を持ちますが、第二に、そのものの「代用」という意味もあります。この獣は、サタンの「油を注がれた者」、すなわち偽の「メシア」(キリストス, Χ ρ ι σ τ ό ς, ヘブル語のメシヤハ、מָשִׁיחַに相当)であり、同時に私たちの主とその聖なる民、イスラエルと教会に対して直接かつ激しく対立する偽物のキリストとなるのであり、その両方なのです。悪魔の最も一般的な名前である「サタン」は、父と子、そして地上の代表者であるイスラ

エルと教会の大反対者であるため、同様に「敵」を意味します([黙示録 12 章 10 節](#)を参照)。

あらゆるにせ物の場合と同様に、反対と代替えという二つの性質は必然的に手を取り合って働きます(例えば、ニセ通貨はその存在そのものが真の通貨を攻撃する模造品です)。ですから、真理に代わる偽りのものを提供しなければ、真理に効果的に対抗できないのと同じように、キリストの偽りの代替えなしに、キリストに効果的に対立することはできません([ダニエル 11 章 36-37 節](#); [第二テサロニケ 2 章 4 節](#)参照)。このことは、真のキリストの特徴を意図的に模倣した反キリストの多くの特徴を説明します。これらの出来事が始まる何年も前、つまり現代の信者にとっては、反キリストとイエス・キリストについてのこれらの意図的で極悪非道な方法で仕立て上げられた類似性は、表面的で明らかに詐欺的なものに見え、嫌悪感に加えて、物笑いの種となっているかもしれません。しかし、<今から見て将来の>その時代の不信仰な世界にとって、艱難期の激しい圧力の下で、聖霊の抑制が取り去られた中で、偽りの、しかし現存の反キリストに服従する代わりに、信仰によって、真正の、しかし目に見えないキリストに忠誠を誓い続ける者は、嘲笑と嫌悪の対象となることを心に留めておく必要があります<sup>1</sup>。そして、私たち個人がサタン<sup>2</sup>の代替え「キリスト」に騙されるはずがないと自負する前に、私たちは主の言葉を覚えておくべきでしょう。

そのとき、多くの人がつまずき、また互に裏切り、憎み合うであろう。また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。また不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。(マタイ 24 章 10-13 節)

そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、また、『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。見よ、あなたがたに前もって言うておく。(マタイ 24 章 23-25 節)

冒頭のチャートで示したように、反キリストの台頭は、「大背教」<sup>2</sup>の世界的な霊的衰退と重なり、それに呼応します。このような真の信仰からの大離脱は、反キリストの正当性に対する(誤った)感覚の高まりと密接なつながりをもって働きます。また、獣が意図的に主を模倣する数多くの点は、世界が獣を受け入れるようになることに少なからず貢献すると考えてよいでしょう。このような模倣のリストは長く、多岐にわたるので、個々の点については後述しますが、ここでは、悪魔が真のキリストを直接かつ意図的に模倣して反キリストを出現させる、より顕著な事例のいくつかを挙げるのは有益でしょう。

・反キリストの偽りの「処女懐胎」：サタンが反キリストを生み出すことは、ユニークというよりも異常ですが、「再臨」として宣伝されるでしょう([創世記 3 章 15 節](#), [6 章 4 節](#); [第二テサロニケ 2 章 9-10 節](#); [黙示録 13 章 1-2 節](#) を参照のこと)。

---

<sup>1</sup> 「来たる艱難期」第二部 B: 艱難期への天の前奏曲、セクション III 「聖霊の抑制の働き」参照

<sup>2</sup> 「来たる艱難期」第三部 A: 「艱難期の始まり」II 「大いなる背教」参照。

- ・前代未聞のカリスマ的人格: ([第二テサロニケ 2 章 9-10 節](#); [黙示録 13 章 3 節](#); [13 章 8 節](#))。
- ・超自然的な力 ([第二テサロニケ 2 章 9-10 節](#); [黙示録 13 章 2 節](#))
- ・メシアの称号 ([第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [黙示録 13 章 16-18 節](#); [ダニエル 11 章 36-37 節](#)を参照)
- ・新しく強力な宗教運動の指導者: ([第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [黙示録 13 章 16-18 節](#); [ダニエル 11 章 36-37 節](#)参照)。
- ・偽りのしるしと「奇跡」: ([第二テサロニケ 2 章 9 節](#); [マタイ 24 章 24 節](#); [出エジプト 7 章 11 節](#), [7 章 22 節](#); [黙示録 13 章 13-15 節](#) 参照)
- ・偽預言者: 獣も「伝道者」を持つ: ([黙示録 13 章 11-17 節](#); [出エジプト 7 章 11 節](#), [7 章 22 節](#); [第二テモテ 3 章 6-9 節](#) 参照)。
- ・政治的な急成長: ([ダニエル 8 章 23-24 節](#), [11 章 21-24 節](#))
- ・前代未聞の軍事的成功: ([ダニエル 8 章 23-24 節](#), [11 章 25-45 節](#); [黙示録 13 章 4 節](#))。
- ・偽りの「復活」: ([黙示録 13 章 3 節](#), [13 章 8 節](#), [13 章 12 節](#), [13 章 14 節](#)参照)
- ・再建された地上の神殿での「着座」: ([第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [ダニエル 9 章 27 節](#), [11 章 31 節](#), [11 章 36-37 節](#)も参照)
- ・見せかけの千年王国: ([黙示録 6 章 2-8 節](#))
- ・いわゆる「悪」の勢力に対する彼の最後の十字軍遠征: ([エゼキエル 38-39 章](#); [黙示録 16 章 12-16 節](#), [19 章 19-21 節](#))

このように、反キリストは明らかに「悪魔の人」であり、サタンはこの獣を偽りの「キリスト」として世に示すために、あらゆる手段を講じるでしょう。その結果、反キリストは、世界の大多数の人々（「神を知らない」人々）に、本物として受け入れられることになるのです。聖書が獣をパルーシア（すなわち「来臨」: [第二テサロニケ 2 章 9 節](#)）とアポカリプシス（すなわち「啓示/出現」: [第二テサロニケ 2 章 6-8 節](#)）の言葉の両方に関連させて表現していることは、サタンによる反キリストのキリストへの直接的な反対は、悪魔が父なる神に意図的かつ完全に反対するのと同様であると考えべきです。さらに、これらの場合、悪魔の意図は明らかにキリストに反対するだけでなく、キリストに見せかけ、代替えし、置き換えることです（「反キリスト」という言葉の意味の核心がそうであるように）-それは、悪魔が反乱を起こした当初から、悪魔の心にある最優先の目的でした。

要するに、神を知らない（あるいは、神に十分に忠実でない）者にとっては、反キリストの人生と経歴は、

多くの重要な点で、「再臨」にふさわしく適合しているように見えるのです。しかし、反キリストを「信じたい」人々はそうするでしょうし、その数は、大背教に巻き込まれた多くの元信者を含む、その時の世界の人口の大多数になることでしょう([マタイ 24 章 5 節](#); [マルコ 13 章 6 節](#); [ルカ 21 章 8 節](#))。

## 2. 反キリストの名前

聖書には、反キリストのさまざまな呼び名があり、それぞれがその特殊性を明らかにしています。

a. [蛇の子孫](#) ([創世記 3 章 14-15 節](#); [創世記 49 章 16-18 節](#) 参照)。反キリストは比喩的にも文字通りの意味でも悪魔の「種」です(下記 II.1 節参照)。

b. [バビロンの王](#) ([イザヤ 14 章 4-23 節](#)) バビロンとは、地上におけるサタンの王国の霊的名称であり、この称号は、反キリストが悪魔の大計画と密接に関係していることを知らせています。

c. [マゴグの地のゴグ、メセクとトバルの君](#) ([エゼキエル 38-39 章](#))。「ゴグとは個人のことで、具体的には反キリストのことです。この預言は、反キリストがハルマゲドンで世界の軍隊を集め、キリストの再臨に反対することを扱っています。

d. [小さい角](#) ([ダニエル 7 章 8-26 節](#), [8 章 9-25 節](#); [黙示録 17 章 1 節](#) ~も参照)。旧約聖書でよく使われた権力の象徴である「角」は、ここでは国や帝国ではなく、個人(つまり反キリスト)を指しているので、「小さい」のです。

e. [なぞを解く、猛悪な顔の王](#) ([ダニエル 8 章 23 節](#))。反キリストの性格を語っています。

f. [\[ローマの\]来たるべき君](#) ([ダニエル 9 章 26 節](#))。反キリストは、領土的な意味でローマ帝国を再建する者であると特定されています。

g. [卑しむべき者](#) ([ダニエル 11 章 21 節](#)) 反キリストは、あらゆる意味で「卑しい者」であり、善良なものを「軽蔑する者」です(ヘブル語の分詞は両方の意味を認めています)。

h. [契約の君](#) ([ダニエル 11 章 22 節](#))。反キリストは、イスラエルと重要な同盟または「契約」を結びますが、「週の半ばに」それを破棄する王です([ダニエル 9 章 27 節](#) 参照)。

i. [北の王](#) ([ダニエル 11 章 21-45 節](#))。この名前は、反キリストの権力の中心が本質的にヨーロッパであることを示し、また、偽のメシア的な意味合いも含まれています。([イザヤ 9 章 1-7 節](#) 参照)。

j. [不法の者](#) ([第二テサロニケ 2 章 3-12 節](#))。このシリーズの前の回で見たように、これは重要な呼称で、反キリストの政権は、基本的な合法性と道徳性を損なうという点で、それ以前のどのような政権とも異なることを表しています。



k. 白い馬に乗った騎士 ([黙示録 6 章 2 節](#))。この記述は、反キリストが意図的に自分自身を(偽)メシアとして表現し、世界を征服することを明確に示しています。

l. 獣 ([黙示録 11 章 7 節](#), [13 章 1-4 節](#), [13 章 12-18 節](#), [14 章 9-11 節](#), [15 章 2 節](#), [16 章 2 節](#), [16 章 10 節](#), [16 章 13 節](#), [17 章 8-17 節](#), [19 章 19-20 節](#), [20 章 4 節](#), [20 章 10 節](#); [ダニエル 7 章 1-11 節](#), [7 章 19-25 節](#); [黙示録 6 章 8 節](#) [ギリシヤ])。この最後の称号は黙示録の中で最も重要なもので、二重の意味があり、反キリストの獣のような人格、性格、行動と、彼が支配するであろう来たるべき悪魔の王国との本質的な一体性を表しています。

### 3. 預言における予型

具体的な名前と呼称に加えて、聖書は反キリストのより広範な「予型」、つまり、反キリストの行動やその他の特徴と密接に類似し、それゆえにその行動や特徴を示唆する歴史的な個人も示しています<sup>3</sup>。以下の各ケースにおいて、問題の個人も同様に悪魔の手先であり、同様に反神の王国の支配者でした。それゆえ、これらの事例のそれぞれにおいて、私たちは、神と神の民に対してサタンが取った行動のパターンと、私たちの主の最終的な勝利を原理的に見ることができるのです。反キリストとこれらの個人とその経歴との類似点と並行点は、ここですべて語るにはあまりにも多いので、読者は、この研究の本文で与えられた反キリストについての情報を習得した後で、それぞれの典型的な暴君を扱っている関連聖句を、もう一度読んだらよいでしょう。これらの予型と反キリストの一般的な比較点は以下の通りです：

- ・悪魔の手先であること。
- ・悪魔的な企みを推進する。
- ・反神的な宗教を助長する。
- ・神の権威への反抗を助長する。
- ・反神的な支配の実践(法律と正義の基本原則の違反)。
- ・神の意志にあからさまに反対すること。
- ・神の意志に対する頑固な反抗。
- ・通常の人間の限界を超えた傲慢さ(傲慢さ)。

---

<sup>3</sup> 聖書の予型と対型の理論と適用については、[「来たる艱難期」第 1 部:序論、IV.1.d 項「旧約聖書の預言における予型と連続性」](#)を参照(96-99 頁)。

・個人的または集団的な信者の迫害(例:イスラエル)。

・神による、その人またはその作品の劇的な破壊。

a. ニムロデ([創世記 10 章 8-12 節](#), [11 章 1-9 節](#), [創世記 6 章 4 節](#)と[歴代誌上 1 章 10 節](#)参照)。私たちは以前、サタンの反乱シリーズで、ニムロデの経歴とバベルの塔建設における彼の主導的役割を取り上げました(読者はそこで述べられた詳細な議論を読むことをお勧めします)<sup>4</sup>。ある面においてニムロデは、反キリストによって終止符が打たれることになる動向の始まりを象徴しています。ニムロデは邪悪な目的のために世界を政治的に統一しようとした最初の人物(そして、反キリスト以外で実際にそれを達成した唯一の人物)だからです。ニムロデと反キリストのいずれの場合も、国際的統一を達成するための政治的運動の背後にある力はサタンです。そして、いずれの場合も、統一の背後に隠された目的は、極悪非道なもので、信仰と信者を地上から根絶やしにすることです。二人とも、政治的、社会的改革の中心に、神への真の崇拝に関して排他的な宗教的核心を据えています。ニムロデのジグラットも、反キリストの「荒らす憎むべきもの」も、サタンへの普遍的な崇拝を強制すると同時に、唯一の真の神への信仰のあからさまな表現を阻止するという、本質的に同じ目的を果たすものです。真の信仰と実践へのこのような完全な攻撃に対する神よりの<保護の>防波堤を取り除くために、普遍化、均質化、そして国家的、法的、経済的、社会的障壁を低下させることが、この二人が行う企ての重要な手順なのです。

ニムロデについてはあまり知られていませんが、聖書から、彼は非常に効果的な組織者であり、前例のないカリスマ性を持った人物であったと言えます(実際、彼は「人を捕らえて(神に)背かせることのできる能力を持っていた」と言われています。[創世記 10 章 9 節](#))。そのため、バビロン(反キリストの王国を象徴する都市)とバベルの塔(反キリスト教の強力な例証としての獣の統一的宗教的シンボル)を建設するという悪魔的な事業に、当時の全ての人を参加させることができたのです。ニムロデというニックネームの意味(すなわち、「反乱しよう」;[詩篇 2 篇 1-3 節](#)参照)が明確に証明しているように、この計画が意図的にも実質的にも反神的なものであることは、彼の訴えの中で十分に明らかにされています。同じように、反キリストは自分自身を実際に神であるかのように主張して、明白であからさまな方法で神に反対します。( [第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [ダニエル 11 章 36-37 節](#))

ニムロデの時代には、実際に「バアルにひざをかかめない」人が少なからずいたはずですが、聖書の年代記は、そのような人はいても稀であったことを示唆しています。当時の社会的、政治的構造は、すべてニムロデと彼の邪悪なビジョンに忠誠を誓うものでした。艱難期の反キリストとその政治活動もそうです。ですから、ニムロデの預言的予型から得られる重要なことの一つは、私たち現代のクリスチャンは、反キリストの説得力、そのアピールの有効性、あるいは、到来するであろう彼の試みのほぼ全面的な成功を、過小評価しないように注意を払うべきです。なぜなら、反キリストの預言的予型として、ニムロデの行動は、反キリストのそれとほぼ類似していると理解すべきだからです。このことは、反キリストの将来の力の大きさだけでなく、その時代の世界が衝撃的な速さで反キリストに従うようになることを物語る、非常に重要な警告的事実なの

---

<sup>4</sup> [「サタンの反乱」第 5 部「裁き、回復、置き換え」III.2「人間の持つ自由に対するサタンの洪水後における攻撃\(バベルの塔\)」](#)参照(リンク上では 115-121 頁/「サタンの反乱」の印刷本では 455-461 頁)。

です。ですから、信者は二重に警戒し、全世界が反キリストに従うように押し流されるようになるその日に備えて、熱心に準備する必要があります。その時代の出来事や状況は、私たちが事前に容易に想像できる以上に電撃的で誘引的であり、反キリストとそのメシア主義運動が及ぼすとてつもない引力から逃れる望みを持てるのは、堅固で断固として自分の主に献身する者だけだからです(ニムロデの場合、そうできた者はほとんどいませんでした)。

ニムロデについての研究でも指摘したように、バビロンの建設(政治経済的事業)は悪魔の主要な目的であり、バベルの塔(社会宗教的シンボル)はその目的への支持を集めるための結集点でした。同様に、反キリストは政治経済的な目的(すなわち、世界の政治的・経済的支配)を持ち、その目的を推進するために独自の社会宗教的な戦略を多用することになります。ニムロデのアピールが塔を建てることで人類の名誉と統一を守ることであったように、反キリストの悪魔的宗教は、極端な「ヒューマニズム」の教義を説き、(あらかじめ決められた政治的・経済的平等性の強要に基づく)社会的・宗教的統一の理想を約束する、国際主義のメシア的聖戦にふさわしい道徳的基盤を提供すると予想されます。この種のすべての「純潔」運動において見られるように、運動によって設定された基準を超えるような逸脱は容認されません。この点に、このようなすべての国際主義の背後にある真の悪魔の目的が見えます。すなわち、「別の視点の提供」、すなわち真の信仰と真の信者を根絶することなのです。

ニムロデの計画は草の根の大衆運動として始まりましたが、反キリストの手法もそのようなものになると信じるに足る理由があります。問題を抱えた世界では、宗教的寛容、社会正義、経済改革、政治的権利の新時代を呼びかけるカリスマ的指導者が、それを提案する指導者の魅力と、提案される変革のユニークで過激で包括的な性質のために、再び成功する方式となることが証明されることでしょう。20世紀の用語で言えば、反キリストは、最も成功したファシスト指導者に見られるものを凌ぐカリスマ性とリーダーシップを発揮し、彼の政治的・宗教的定式は、懐疑的な知識人にとっても刺激的で驚くべきものとなることでしょう。そして、この魅力的な暗黒の教義の天才は、(彼が取って代わろうと望む)既成のエリートや、自然なあるいは聖書的な神の真理の原則に忠実であろうと決意している人々(つまり、彼の掲げる理想主義的な宣伝文句に惑わされない信者や未信者-反キリストが破壊しようと躍起になっているこの二つの集団)を除くすべての人々を取り込むことでしょう。反キリストの運動も、(少なくとも初期段階では)既存の権力構造をうまくかいくぐって、真実に忠実であろうとする少数派を寛容に受け入れ、草の根的な大衆運動として始まりますが、それが勢いを増すにつれて、(ニムロデが行ったように)組織や団体を一斉に掌握し始めます。

この運動の熱狂に巻き込まれる多くの人々にとって、反キリストの社会宗教的「聖戦」の崇高な目的は、彼らを引き込む餌となるでしょう。しかし、ニムロデがバベルの塔を利用して世界統一計画の支持者を引き入れたように、反キリストの犠牲者たちが夢中になった後に切り替えスイッチが入り、社会正義と宗教的啓蒙を強要する前に、まず政治と経済の支配を達成しなければならないと説得するのは容易なことでしょう。このようにして、反キリストは、以前のニムロデのように、地球上の人々の大部分を自分の悪魔的運動に参加させることになるのです。

b. パロ(出エジプト記2-14章): 多くの点で、イスラエルの民がエジプトとパロから脱出した体験は、将来、艱難期を通過する信者の体験ととても類似しています。反キリストはパロの役割を果たし、エジプトから「約束の地」への旅は、その最も困難な七年間に信者に降りかかるすべての試練と悩みに類似しています。



この意図的な聖句の類比については、本シリーズの第7部で、信者の視点から掘り下げてみたいと思います。しかし、ここで最も重要なのは、出エジプト記のパロが反キリストの預言的予型を表していることです。

第一に、パロは主や主の民を顧みていませんでした(彼の行動から明らかな事実であり、[出エジプト記 1章 8節](#)で彼の前任者について述べられている「ヨセフを知らなかった(すなわち、ヨセフを顧みなかった)」ことからもうかがえます)。その前のパロの(ヘブル民族を滅ぼそうとした計画に顕著に現れています：[出エジプト 1章 15-22節](#))その無法ぶりは、神の耳に届いたイスラエルの民の「うめき声」([出エジプト 2章 23-25節](#))からわかるように、出エジプトの時のパロにも引き継がれた明らかな傾向です。

人間的なものであれ、神的なものであれ、律法に対する完全な無関心が、反キリストである「不法の人」([第二テサロニケ 2章 3節](#))を特徴づけています<sup>5</sup>。この神と神の民に対する完全な無視は、パロのモーセとアロンに対するすべての対応において、とても明らかです。傲慢な人間の意志と、地上の代表者によって仲介される神の意志との間の対立は、二人の証人であるモーセとエリヤに対する反キリストの対立と密接に類似しています(パロの宮廷魔術師とその偽りの奇跡と、反キリストの偽預言者の欺くしるしとも比較してみてください：[黙示録 13章 11-17節](#))。

反キリストとその予型であるパロの最も顕著な類似点の一つは、神の民への迫害における類似性です。「わが民を行かせなさい！」と繰り返しなされる神の要求に対するパロの応答は、あの、わらなしでレンガを作れという有名な命令でした。神の子らの肩に負わされたこの抑圧的な経済的重荷は、艱難期の反キリストの「わたしく獣」の印を受けるのを拒む者には、売り買いを許さない」という命令([黙示録 13章 16-17節](#))と酷似しています。パロが後に紅海でイスラエルの民を虐殺しようとしたのも、迫害がエスカレートし、多くの信徒が主のために殉教する大迫害と類似しています<sup>6</sup>。そして最後に、神の子らへの迫害に対する神のエジプトへの厳しい災いは、世界、特に反キリストとその王国に対する艱難期の最後の裁き、すなわち「神の怒りの七つの鉢」([黙示録 16章 1-21節](#))と明らかに類似しています。

性格と人格の面でも、同様に、パロは反キリストの教訓的な予型を示しています。モーセとアロンに対する彼の二枚舌はよく知られていますが、これは獣の性格の特徴でもあります([ダニエル 8章 23節](#)参照)。反キリストとの類似性という点でさらに重要なのは、モーセとアロンの手による一連の驚くべき神の力の示威を前にして、彼が示した並外れた心の頑なさです。パロの神に対する頑なな抵抗は、事実、通常の人間の限界を超えていて、神がパロの心を硬くすることを許されたからこそ可能だったのです([出エジプト 4章 21節](#), [7章 3節](#), [9章 12節](#), [10章 1節](#), [10章 20節](#), [10章 27節](#), [11章 10節](#), [14章 4節](#), [14章 8節](#), [14章 17節](#))<sup>7</sup>。神がパロにこのような特別な盲目を与えられた目的は、当時地上で最も強力な権力を持った人間の、最も極端な抵抗に対して、ご自身の栄光を示すためでした([出エジプト 9章 16節](#), [出エジプト 14章 4節](#), [14章 17節](#), [詩篇 106篇 8節](#), [ローマ 9章 17節](#)参照)。反キリストもまた、神に対して傲慢な態度を持ち、並外れて神に逆らうことでしょう([ダニエル 7章 8節](#); [7章 20節](#); [7章 25節](#); [8章 25節](#); [11章 36-37節](#); [第二テサロニケ 2章 4節](#); [黙示録 13章 5-6節](#), [16章 14節](#), [17章 13-14節](#), [19章 19節](#))。そして神は、キリストの再臨の時に獣に完全に勝利することによって、さらに栄光を得るでしょう。最後に、パロの滅亡と

---

<sup>5</sup> 「来たる艱難期」第三部 A:「艱難の始まり：第七の封印から二人の証人まで」II.3.a「「不法の謎」が解き放たれる」参照。

<sup>6</sup> 大迫害は艱難期の後半に起こり、このシリーズの第4部で取り上げます。

<sup>7</sup> [出エジプト記 14章](#)シリーズ#2:「パロの心を堅くする」参照。

反キリストの滅亡には多くの共通点があります。両者とも、イスラエルの民を滅ぼそうとして追跡を指揮し、両者とも重大な局面に直面し、特別な暗闇によって阻まれます([出エジプト 15 章 9 節](#)と [ダニエル 11 章 44 節](#))。 [出エジプト 14 章 20 節](#)と [ゼカリヤ 14 章 6-7 節](#))。 [出エジプト 14 章 21-25 節](#)と [ゼカリヤ 14 章 4-5 節](#))。そして、パロと反キリストの両軍はその後、神によって捕らえられ、神を冒瀆する指揮官たちと共に完全に滅ぼされます([出エジプト 14 章 26-31 節](#); [詩篇 136 篇 15 節](#); [イザヤ 29 章 5-8 節](#); [黙示録 19 章 19-21 節](#))。

c. [アッシリアの王](#)([イザヤ 7-39 章](#); 特に [イザヤ 14 章 24-27 節](#) 参照)。アッシリアは、北イスラエル王国に対する終末の裁きを実行した「主の鞭」([イザヤ 10 章 5 節](#))であり、南ユダ王国に対する厳しい警告の裁きを実行した「首にまで及ぶ水」([イザヤ 8 章 6-8 節](#))でもありました。アッシリアのユダへの侵攻は、後の反キリストの侵攻と特に密接に対応しています。実際、このシリーズの第一部で見たように、イザヤ書の前半の大部分は「主の日パラダイム」に言及して意図的に構成されています<sup>8</sup>。つまり、イザヤはアッシリア軍の侵攻の予言をし、展開して後の反キリストの侵攻と比較して説明しているのです。アッシリアとその王は、獣、その王国、その軍隊の明確な予型であり、それらはイスラエルの地に侵入し、神の手によって同様に奇跡的な災害を受けます([イザヤ 37 章 36-38 節](#)と [黙示録 19 章 19-21 節](#))。その過程で、セナケリブ(大臣ラブシャケを通して: [イザヤ 36 章 4-10 節](#); [列王記下 18 章 19-25 節](#); [歴代誌下 32 章 9-16 節](#)) と獣([ダニエル 7 章 8 節](#), [7 章 20 節](#), [7 章 25 節](#), [8 章 25 節](#), [11 章 36 節](#))は、主に対して前代未聞のことを語っています。聖書の中でセナケリブの代理人の横柄な言葉が三度繰り返されているのは、主なる神に対するそのような傲慢な行為の軽率さを強調するためのものでしょう。実際、極端に傲慢であるだけでなく、それを極端な方法と言葉で表現するこの傾向は、アッシリアとその王の顕著な特徴であり([イザヤ 10 章 12-19 節](#) 参照)、反キリストとその政権の顕著な特徴でもあるでしょう([第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [黙示録 13 章 5-6 節](#), [16 章 14 節](#); [ダニエル 11 章 36-37 節](#) を参照)。さらに、[ナホム 1 章 11 節](#)の「あなた(ニネベ・アッシリア)から、主に対して悪をたくらむ者、悪の助言者が出てきた」という記述は、現代のアッシリアの王を来たるべき反キリストと意図的に比較する預言的なものです(ヘブル語テキストではいわゆる「予言的完了」時制が用いられています)。主の意図がユダを懲らしめることだけであったのに([イザヤ 10 章 7 節](#))、アッシリアがユダを完全に滅ぼそうとしたのは、反キリストが将来神の意志に反してユダヤ国家とユダヤ人を消滅させようとするのとまったく類似しています([イザヤ 29 章 1-8 節](#); [エゼキエル 38 章 10-11 節](#); [ダニエル 11 章 44 節](#); [ゼカリヤ 14 章 2 節](#); [黙示録 12 章 1-17 節](#); [ナホム 1 章 15 節](#) を参照のこと)。また、アッシリア帝国の発展には、獣の帝国との類似性を見ることができます。獣の帝国も同様に、南の勢力(どちらの場合もエジプトが主導)に対して軍事作戦を行い、同様に予想外の劇的な方法で反対勢力を打ち負かすのです。したがって、イザヤ書 19 章は近い将来と遠い将来を預言しています。4 節の預言、すなわち主がエジプトを「厳しい主人」と「荒々しい王」に渡されることは、アッシリアの支配を連想させ、反キリストの政権に関する他の預言(特に [ダニエル 11 章 25-45 節](#) 参照)とも類似しています。最後に、セナケリブの大軍を滅ぼされたように、メシアが再臨して反キリストとその軍勢を処分されるように([イザヤ 37 章 36-38 節](#); [黙示録 19 章 19-21 節](#); [イザヤ 30 章 27-33 節](#) 参照)、主がアッシリアの脅威を取り除くまで忍耐するようにとユダの民に与えられた励ましは、主の降臨を待ち望むユダヤ人信者にとって実に適切なものです([イザヤ 35 章 3-4 節](#); [イザヤ](#)

<sup>8</sup> 「来たる艱難期」第1部: 序論、[IV.1.b『主の日』のパラダイム](#)、および [IV.2.a「終末の時代に関する聖書の情報源: 旧約聖書: イザヤ書」](#) 参照。

[25 章 9 節](#); [歴代誌下 32 章 7-8 節](#)参照)。

d. [バビロンの王](#) ([イザヤ 14 章 4-23 節](#); [エレミヤ 25 章 9-32 節](#)):

イザヤ書と他の聖書の中で、バビロンは当時の権力と将来の極悪非道な権力、獣の本国を表しています。バビロンの王はサタンの予型であることはよく知られていますが、あまり知られていないのは、この王が反キリストの予型でもあることです。悪魔とその子孫である反キリストの間に著しい類似性があることを想起すれば、この二重の予型を受け入れることは難しくないはずです。サタンと獣は、天使と人間というそれぞれの種族における神への反抗の極致であり、天と地において、それぞれ神と神の普遍的秩序に対する反逆を導くものだからです。これに加えて、反キリストが文字通り悪魔の子孫であり([創世記 3 章 15 節](#)、後述の II.1 節参照)、地上でサタンの意志を遂行するという事実を考慮すれば、この二重の予型論の適切さは直ちに明らかとなるでしょう。反キリストは「サタンの子」であり、神の子の意図的なニセ者なのです。ですから、神の子と私たちの天の父との関係(例えば、[ヨハネ 12 章 39-41 節](#)と比較した[イザヤ 6 章 1-13 節](#))のように、預言の予型化が両者に等しく適用される例があることは驚くことではありませんし、まさに悪魔が表面的に模倣し利用しようとしている関係です([第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [黙示録 13 章 3-7 節](#); [ダニエル 11 章 36-37 節](#)も参照)。

e. [アンティオコス・エピファネス](#) ([ダニエル 8 章 23-26 節](#), [11 章 21-36 節](#))

おそらく最も重要で、最も詳細な反キリストの予型は、ダニエル書に記されていて、獣の予型として広範囲に用いられているセレウコス朝の王アンティオコス・エピファネスです<sup>9</sup>。この二つの章については後述しますが、アンティオコスに関する預言は間違いなく反キリストにも当てはまるので、この予型は 8 章と 11 章に見られ、その対型は(しばしば間違っただけで考えられているように)36 節まで保留されてはおらず、11 章の 21 節から始まることをここで強調する必要があります<sup>10</sup>。多くの点で、アンティオコスは将来の反キリストの完璧なモデルであり、彼の活動は、上に挙げた他のどの代表者よりも、来たる獣の活動に密接に対応しています。アンティオコスと反キリストは共に、予期せぬ、卑しい始まり方をします([ダニエル 11 章 21 節](#)と[黙示録 13 章 1 節](#)を参照)。両者とも良心に欠ける人物です([ダニエル 11 章 27 節](#)と [11 章 44 節](#)を参照)。両者とも成功した軍司令官です(アンティオコスの別称、ニケフォロス、「勝利した」の意; [ダニエル 11 章 37 節](#)参照)。両者とも北からイスラエルを支配する王国(それぞれシリア王国と反キリストの十王国)を支配し、それぞれの王国は一方ではバビロンと関連しており、他方ではローマと関連しています(アンティオコスの首都セレウキアはバビロンの近くにあり、反キリストの母国と本来の権力の中心は「バビロン」と呼ばれています: [黙示録 18 章](#)参照)。(アンティオコスはローマで教育を受け、ローマの社会的・政治的システムを多く模倣し、反キリストの十大帝国は、後述するように、ローマの復興と言えるでしょう)。両者とも、主に対する執念

---

<sup>9</sup> 解説については、特に Bevan, E.R., 「A Note on Antiochus Epiphanes」, JHS20 (1900) 26-30, and Morkholm, O. Antiochus IV of Syria (Copenhagen 1966) を参照。アンティオコスについては、ポリュビオスの『歴史』第 24 巻と(アポクリファの)マカベヤ書第 1・2 巻が古代の最も広範な資料。

<sup>10</sup> ジェロームもダニエル書注解の中で、[ダニエル 11 章 21 節](#)から始まるアンティオコスに関する議論を反キリストに当てはめたと述べています。



深い対抗心を表す名前を持っています(アンティオコスの名前のアンティという接頭辞は、アンチキリストのそれと同じであり、彼の名前は全体として「対抗する者」を意味します)。両者ともエルサレムの神殿の儀式を終わらせます([ダニエル 8 章 12-13 節](#), [9 章 26-27 節](#), [11 章 31 節前半](#), [12 章 11 節](#); 第一マカベヤ 1 章 20-64 節; 第二マカベヤ 5 章 15 節-6 章 11 節)、これらの儀式に代わって、自分自身を称える儀式を行います([ダニエル 11 章 31 節後半](#), [11 章 36-37 節](#); [第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [黙示録 13 章 12 節](#); 第一マカベヤ 1 章 47 節)そして、それは実際のところ悪魔崇拝です([ダニエル 11 章 31 節](#), [12 章 11 節](#); [マタイ 24 章 15 節](#); [マルコ 13 章 14 節](#); [黙示録 13 章 4 節](#); [第一コリント 10 章 18-21 節](#) 参照)。両者とも自らを神であると表現しています(アンティオコスの「エピファネス」という呼称、つまり神の出現、「顕現」を意味する言葉と、彼をゼウスとして描いた硬貨を、[ダニエル 11 章 36-37 節](#); [第二テサロニケ 2 章 4 節](#)と比較してください)<sup>11</sup>。どちらも聖なる神の民を異常に圧迫し([ダニエル 8 章 12-13 節](#), [8 章 24 節](#), [11 章 28-35 節](#) と [ダニエル 11 章 44 節](#), [12 章 1 節](#); [黙示録 12 章](#)を比較のこと)、著しい背教([ダニエル 8 章 12 節](#) と [第二テサロニケ 2 章 3 節](#)を比較)と殉教([ダニエル 11 章 33-35 節](#) と [黙示録 7 章 9-17 節](#), [12 章 11 節](#), [13 章 9-10 節](#), [14 章 1-16 節](#), [15 章 2-4 節](#)を比較)に至らせます。そして、両王の手法は、非常に急進的であり、その改革の反神的性質にかかわらず、あらゆる点で自分たちのイメージに合わせて、自分たちの目的に合うように社会を作り変えることを選択します(アンティオコスがユダヤ人をギリシャ化しようとしたことと反キリストの急進的改革を参照:例えば、[ダニエル 7 章 25 節](#);この点については、以下の第Ⅲを参照)。これらのことは、おそらく、ダニエルが、反キリストの予型としてのアンティオコスから、[ダニエル書 11 章の 36 節](#)にある獣自身の非予型的で直接的な予言に直接移行するのにそれほど問題がないことを説明するものです。しかし、この重要な預言の章を解釈するために大切なことは、アンティオコス・エピファネスの予型にある(すなわち、[21 節から 35 節](#)までの)反キリストについて提供されている情報を省かないことです。

## II. 反キリストの起源、性格、台頭

### 1. 反キリストの起源

反キリストについては多くの神話があり、終末が近づくにつれ、また彼がついに世界の舞台に登場するとき、これらの物語や噂はますます増えることでしょう。実際、「神の子」であるという彼の偽りの口実は自己満足に過ぎず、彼の個人的な神秘性を高めるすべての報道は、彼が世界を支配する上で有益であることは間違いないでしょう。「超人的な」、「奇跡的に生まれた」、あるいは「人間離れしている」存在であると思われることは、大衆的な政治運動や宗教運動のすべての指導者にとって明らかに有益であり、反キリストの台頭はこの両方の経路を経て進められることになるでしょう。しかし、反キリストは忌むべき者ではありませんが、異星人でもなく(「異星人」は存在しません)、新種の最初の者でもなく(「進化」しません)、過去の天才が復活した者でもなく(死者を復活させることができるのは神だけです)、言うまでもないことですが、彼はどんな意味においても神ではありません(そう主張するでしょうが)。しかし、その言葉から肯定的な意味合いを取り除くことができるのであれば、反キリストは唯一無二の存在であるとは言えるでしょう。

---

<sup>11</sup> The Interpreter's Dictionary of Bible(Nashville 1962)の sub voce「Antiochus」を参照。

a. 反キリストの「父系」の由来:

(13)神である主は女に言われた。「あなたは何ということをしたのか。」女は言った。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べました。」(14)神である主は蛇に言われた。「おまえは、このようなことをしたので、どんな家畜よりも、どんな野の生き物よりもろわれる。おまえは腹這いで動き回り、一生、ちりを食べることになる。(15)わたしは敵意を、おまえと女の間、**おまえの子孫と女の子孫の間**に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」(創世記 3 章 13-15 節 新改訳IV)

そもそも、女の子孫、つまり私たちの主に対して、蛇(すなわち、悪魔)が卑劣な「攻撃」をする一方で、女の子孫に敵対(=アンチ)するのは、蛇自身ではなく、蛇の子孫であることに注意しなければなりません。つまり、主の初降臨の時にサタンはキリストに敵対し(「かかとを打ち」、キリストは再臨の時に悪魔を完全に打ち負かす(「頭を打つ」)のですが、ここで言われている蛇と主の間の敵意の最も大きな現れは、悪魔の子孫、すなわち(自分をキリストとして主張する、イスラエルやキリスト教会への迫害などを行う)反キリストに現れると言われています<sup>12</sup>。

女の子孫である、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストは、真の人間であり、すべての人間と同様に自然な方法で生まれましたが、処女が、特別に神によって身ごもり、生まれたものです(イザヤ 7 章 14 節; マタイ 1 章 18 節; ルカ 1 章 34-35 節; ヨハネ 1 章 14 節; ピリピ 2 章 5-8 節)。したがって、どのような解釈の立場から見ても、女の子孫を文字通りの生物学的なものと解釈を施しておきながら、他方、蛇の子孫に対しては、それを単なる比喩や象徴と見なすことを正当化することは非常に難しいでしょう。どのように解釈しても、一方が文字どおりの人間であるなら、他方もそうであるべきなのです。もちろん、これは両者が完全に等しいという意味ではありません。キリストと反キリストの違いは、これ以上ないほど深く、大きいものです。しかし、ここで取り上げている類似性の点もまた、理解する上で重要なのです。私たちの主の純粋な人間としての肉体が、人間以外の父系に由来するものであったように、同じように(全く同一であるとは言い難いですが)、反キリストの父系と受胎は人間以外の由来となるのです。反キリストは、文字通りの意味で「蛇の子孫」であり、サタンの子孫だからです(創世記 3 章 15-16 節)<sup>13</sup>。

どうしてこのようなことが可能なかを理解するためには、創世記 6 章にあるネピリムの事件を見る必要があります。大洪水が起こる前の時代には、墮落した天使と人間の女性との同棲は比較的一般的なことで、洪水が襲った時には、ノアと彼の家族は地上に残された唯一の完全な人間の種であったと思われま<sup>14</sup>。

---

<sup>12</sup> 「サタンの子孫」とは、サタンに従う者すべてを指す場合もありますが(ヨハネ 8 章 44 節参照)、この箇所は、反キリストという特定の人物に究極的な成就がなされます。

<sup>13</sup> C.ラーキンの『霊界』: 組織神学 v.2 (Dallas 1947) 114-117 に関する L.S.シェイファーの論考参照

<sup>14</sup> 「サタンの反乱」 第 5 部:「裁き、回復、置き換え」、第 III.1 節、「人間の血統(ネフィリム)の純潔に対するサタンの洪水以前の攻撃」: 参照。



(1)人が地のおもてにふえ始めて、娘たちが彼らに生れた時、(2)神の子たち(すなわち、墮天使たち)は人の娘たちの美しいのを見て、自分の好む者を妻にめとった。(創世記6章1-2節)

そのころ、またその後にも、地にネピリムがいた。これは神の子たち(すなわち、墮天使たち)が人の娘たちのところにはいて、娘たちに産ませたものである。彼らは昔の勇士(すなわち、ネピリム)であり、有名な人々であった。(創世記 6章4節)

(8)しかし、ノアは主の前に恵みを得た。(9)ノアの系図は次のとおりである。ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人(すなわち、純粋な人間の子孫)であった。ノアは神とともに歩んだ。(10)ノアはセム、ハム、ヤペテの三人の子を生んだ。(創世記 6章8-10節)

真の人類を滅ぼそうとした悪霊どもは、その非道な行為の結果、神によって底知れぬ所に落とされました(第一ペテロ 3 章 19-20 節; 第二ペテロ 2 章 4-10 節; ユダ 1 章 5-7 節)。そのゾツとさせられる刑罰によって、以来そのような行動を抑制することになったようです(少なくとも聖書の記録に関する限りは: ルカ 8 章 31 節; ユダ 6 節; 黙示録 9 章 1-11 節, 9 章 13-16 節, 20 章 1-3 節, 20 章 7 節)。しかし、創世記 3 章 15 節の預言の成就として、サタンは獣を生み出すためにそのような活動を行い、反キリストを文字通りの意味で「蛇の子孫」とするのです。(人類がこの事実を見て受け入れることを選ぶかどうかは別として、)すべての反神的活動も含めて、神の意志を離れて歴史に起こることはなく、起こることはすべて最終的に、必然的に、完全に神の完全な御計画の成就に向かって働きます(出エジプト 9 章 16 節; 詩篇 33 章 11 節; 箴言 16 章 4 節, 21 章 1 節; イザヤ 25 章 1 節, 37 章 26 節, 46 章 8-11 節; ローマ 8 章 28-30 節)。この原則は、悪魔が反キリストの父親となり、獣が世界を支配するという驚くべき成功についても同様に当てはまるのが、聖書で具体的に述べられています。

そして見ていると、見よ、[そこに]白い馬が出てきた。そして、それに乗っている者(すなわち、反キリスト)は、弓を手に持っており、また(神の許しによって)冠を与えられて、勝利の上にもなお勝利を得ようとして出かけた。(黙示録 6章2節)

この獣には、また、(神の許しによって) 大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、四十二か月のあいだ(すなわち、大艱難期の間)活動する権威が(神の許しによって) 与えられた。(黙示録 13章5節)

そして彼は、(神の許しによって) 聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を(神の許しによって) 与えられた。(黙示録 13章7節)

神は、御言が成就する時まで、彼ら(すなわち、獣の配下の「王たち」)の心の中に、御旨を行い、思いをひとつにし、彼らの支配権を獣に与える思いを持つようにされたからである。(黙示録 17章17節)

(8) その時になると、不法の者(すなわち、反キリスト)が現れる。この者を、主イエスは口の実をもって殺し、来臨の輝きによって[不法の者を]滅ぼすであろう。(9) 不法の者が[現れて]来るのは、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、(10) また、あらゆる[種類の、計画された]不義の惑わしとを、滅ぶべき者どもに対して行うためである。彼らが滅びるのは、自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれなかった報いである。(11) そこで**神は**、彼らが偽りを信じるように、**迷わす力を送り**、(12) こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、さばくのである。(第二テサロニケ 2 章 8-12 節)

このように、ネピリムは反キリストに近い存在であるにとどまりません。彼らもまた悪魔の父を持ち、その結果「力ある者」「有名な者」([創世記 6 章 4 節](#))となり、天使の父性のゆえに普通の人間以上の能力と力を持っていたのです。聖書は、反キリストの例外的な性質が、彼の悪魔的な父性によってのみ完全に説明できることを示唆する他の多くの指標を提供しています。

・ちょうど、ネピリムを滅ぼした大洪水が始まる前に(すなわち、[創世記 6 章 3 節](#)の 120 年の終わりに)、御霊の抑制の働きがまず中断されなければならなかったように、反キリストの出現は、御霊の抑制の働きが同様に中断された後にのみ起こり得ます([第二テサロニケ 2 章 6-7 節](#))。艱難期の大異変(または「洪水」; 参照:[ダニエル 9 章 26 節](#); [11 章 22 節](#) [ヘブル語])が解放され、その終わりに反キリストも神の裁きによって火の池に沈められます([黙示録 19 章 20 節](#))。このように、ネピリムと反キリストは共に、聖霊の抑制が取り除かれることによってのみ可能となる厳しい裁きの時期を地上にもたらし、ネピリムと反キリストは共に、その裁きの終わりに例外的な神の措置によって取り除かれます([創世記 7 章 23 節](#); [黙示録 19 章 20 節](#))。しかし、反キリストの「出現」そのものが、ネピリムにはなかった神の抑制がなくなることを必要とすることは、その例外的で不自然な起源によって最もよく説明されます。

・神の地位と世界支配に対する反キリストの傲慢と見せかけは、前例がなく、他に説明し難い(例えば、[イザヤ 14 章 9-23 節](#); [ダニエル 11 章 36 節](#); [第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [黙示録 13 章 4 節](#))。

・反キリストのカリスマ性と政治的成功は前例がなく、他に説明し難い([ダニエル 8 章 24 節](#), [11 章 23-24 節](#), [11 章 36-39 節](#); [黙示録 13 章 3-4 節](#), [17 章 17 節](#))。

・反キリストの軍事的な技量と成功は、前例がなく、他に説明し難い([ダニエル 8 章 24 節](#), [11 章 36-39 節](#))。

・反キリストの神への冒瀆と反対は、前例がなく、他に説明し難い([ダニエル 7 章 8 節](#), [7 章 11 節](#), [7 章 20 節](#), [7 章 25 節](#), [9 章 27 節](#), [11 章 36 節](#); [黙示録 13 章 1-6 節](#))。

・獣が行う宗教的崇拝は、私たち人類の経験において、規模、種類ともに前例がなく、他に説明し難い([ダニエル 9 章 27 節](#), [11 章 36 節](#); [黙示録 13 章 4-10 節](#); [第二テサロニケ 2 章 4 節](#))。

・獣が世界中に引き起こす驚くべき破壊は、私たち人類が経験したことのない規模と種類であり、他に説明し難い([イザヤ 14 章 16-17 節](#); [黙示録 6 章 1-8 節](#), [17 章 15-18 節](#))。

・反キリストを支持するために神から離れて行われる奇跡的なしるしや不思議なことは、前例がなく、他に説明し難い([第二テサロニケ 2 章 9-10 節](#); [黙示録 13 章 13-14 節](#))。

・反キリストが神から離れて、明らかに蘇生をすることは前例がなく、他に説明し難い([黙示録 13 章 3 節](#), [13 章 12 節](#), [13 章 14 節](#), [17 章 11 節](#))。

このように、悪魔の父系を直接的に示唆する箇所(すなわち、[創世記 3 章 15 節](#)と[第二テサロニケ 2 章 8-10 節](#)、これについては下記参照)とは別に、反キリストが完全に人間ではないこと、そして、この違いが彼の悪魔との特別な関係と関連していることを示す著しいしるしが他にあります。

(8)その時になると、不法の者が現れる。この者を、主イエスは口の息をもって殺し、[栄光の]来臨の輝きによって滅ぼすであろう。(9)不法の者が来るのは、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、(10)また、あらゆる不義の惑わしとを、滅ぶべき者どもに対して行うためである。彼らが滅びるのは、自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれなかった報いである。(第二テサロニケ 2 章 8-10 節)

[創世記 3 章 15 節](#)の証言と、先ほど扱った異常な起源を指すしるしを考慮すると、すぐ上に引用したテサロニケ第二章の箇所も同じように理解すべきです。つまり、「不法の者が来るのは、サタンの働きによる」という表現は、反キリストの地上への「到来」が何よりもまず悪魔によって「力づけられる」ことを意味すると考えるべきなのです。ここで「来る」(KJV、NASB、NIV では「到来」)と訳されている言葉は、ギリシャ語のパールーシア(παρουσία)です。この言葉はラテン語の「来臨」に相当する言葉として多くのクリスチャンに知られており、主の地上への再臨にも使われます([マタイ 24 章 3-39 節](#); [第一コリント 15 章 23 節](#); [第二ペテロ 1 章 16 節](#); [第一ヨハネ 2 章 28 節](#))。第二テサロニケ 2 章 9 節が、艱難期の反キリストの偽りの神性主張を強固にするための、擬似奇跡に悪魔が協力することを意味しているということを否定する人はいないでしょうが、パールーシアという単語と kat' energeian tou Satanou「サタンの働きによる」という言葉がつながって用いられていることから、これらの単語は当初、おそらく[創世記 3 章 15 節](#)の預言:反キリストの起源または「到来」はサタンの力を受けている(すなわち、彼は悪魔の「子孫」です)ということを展開したものと解釈すべきであることを強く示唆するものです。さらに、パールーシアに加えて、この同じ箇所で反キリストが「明らかになる」または「啓示」あるいは「黙示」を持つと言われていることは重要です(「そのとき、不法の者が現れる」;[第二テサロニケ 2 章 3 節](#)および [2 章 6 節](#)にもある)。しかし、主には二つの「来臨」があり、一つは人類を罪の力から解放するため、もう一つは人類を悪魔の力から解放するためですが、反キリストが現れることと彼の唯一のパールーシア(来臨)は密接に関連しています。なぜなら、彼の来臨も現れることも人類には何の利益もなく、厳しい圧迫と迫害と、それがもたらす苦難と神の裁きがあるだけだからです。神に取って代わることに自分の将来を賭けた者として<sup>15</sup>、悪魔が地上に押し出そうと計画している自分自身の「偽りのメシア」のために「偽りの処女懐胎」を望むことは納得がいきます。もし悪魔が文字通りの子孫(あるいは「種」)

---

<sup>15</sup> 悪魔が神に取って代わろうとする根拠については、『悪魔の反乱』第 1 部「サタンの反乱と墮落」、特に IV.3 節「サタンの墮落」を参照。

を持つとすれば、反キリストがそれであることは理にかなっています。

さらに、黙示録で獣が歴史的な舞台に登場する際の象徴的な表現には、得体の知れない起源を示すものがあります。[13章1節](#)で、反キリストは海から昇る、と言われていますが、この象徴は重要です。聖書の予型論では、海は通常、悪とそれに対する神の裁きの象徴です。神は地球を海で覆って、地球を裁き([創世記1章1節](#)と[1章2節](#)を比較、[イザヤ45章18節](#); [第二ペテロ3章5-6節](#)参照)、ネピリムを世界規模の洪水で滅ぼし([創世記7章22-23節](#); [第一ペテロ3章19-20節](#); [第二ペテロ2章4-6節](#); [ユダ1章6-7節](#)参照)、パロと彼の軍隊に海を戻して消滅させ([出エジプト14章26-28節](#))たのです。この三つの例を見ると、元の地球のサタンの反逆(と反キリストの配偶子放出を連想させる反神の遺伝子実験)が水によって滅ぼされ、ネピリムの半天使的性質と真の人類にもたらす脅威が、水を通して破壊されました。そしてパロは、これまで見てきたように、悪魔の子孫である反キリストの予型であるので(神の民を滅ぼそうとしたことにはっきりと見られます)、黙示録が獣の歴史舞台への初登場を描写する際、獣が海から上って来るのは偶然ではないでしょう。上記のような象徴の組み合わせは、この「海から上って来る」ことが反キリストの非人間的な父方をさらに示すものであることを確かに指し示しています。海はまた、レビヤタン([ヨブ3章8節](#), [41章1-34節](#); [詩篇74篇12-14節](#); [イザヤ27章1節](#))、ラハブ([ヨブ9章13節](#), [26章12-13節](#); [詩篇87篇4節](#), [89篇9-10節](#); [イザヤ30章7節](#), [51章9-10節](#))や蛇([アモス9章3節](#); [イザヤ27章1節](#)参照)などの悪魔を象徴する生き物の寓話の故郷でもあることから、その印象を強烈なものにしています。ですから、この海から上って来ることは、反キリストを過去の不適切な天使の人間界への干渉と結びつけるだけでなく、反キリストがその父である悪魔のところから上がって来ることを象徴的に描いているのです。最後に、海は底知れぬ所(黄泉の国の一部)として、サタンの最も悪名高い囚人たち(実際、ネピリムを生み出した者たち:[第一ペテロ3章19-20節](#); [第二ペテロ2章4-6節](#); [ユダ1章6-7節](#); [黙示録9章1-11節](#)参照)の現在の住処でもあり、将来のサタンの一時的な監獄([黙示録20章1-3節](#))、また悪魔とすべての墮天使の究極の家(すなわち、それは理由があって火の池と呼ばれています: [マタイ25章41節](#); [黙示録20章10節](#))と類似しているのです。

その例外的な性質を説明することに加えて、反キリストの悪魔的な父系は、彼が聖書の中の他のどの個人よりも悪魔と密接に結びついているという事実も説明します。例えば、[黙示録13章1-2節](#)は、反キリストが海の中からサタンによって呼び出される様子を描いていますが、これは、反キリストの起源、復活、そして後の明白な復活が悪魔の力と意志に密接に関連し、完全に依存していることを明確に象徴的に表しています。( [第二テサロニケ2章9節](#); [ダニエル11章36-39節](#); [黙示録13章3-4節](#)参照)<sup>16</sup>。そして、火のように赤く、七つの頭と十本の角を持つ龍が、赤色で七つの頭と十本の角を持つ獣を呼び出すという象徴の重要性は、この二つを密接に結びつける要素として過小評価すべきではありません([黙示録12章3節](#)と[黙示録13章1節](#)と[17章3節](#))。第二に、獣はサタンの手から世界の支配権を得ますが([黙示録13章2節](#))、これは主が誘惑された際に拒否した申し出であり([マタイ4章8-10節](#); [ルカ4章5-8節](#))、聖書に関する限り、悪魔がこの申し出をするのは二度だけです(ここでも、女の子孫と蛇の子孫の直接対決が見られるのですが)。第三に、反キリストが人類史上前例のないほど世界から称賛され崇拝されるという事実も、聖書では、悪魔崇拝と密接に結びつけられています([ダニエル11章36-39節](#); [黙示録13章3-4節](#))。獣は

<sup>16</sup> 海の象徴については、上記および『悪魔の反乱』第2部「創世記のギャップ」II.3節「海」参照。



サタン崇拝を躊躇しないばかりか、全世界にそれを強制しようとするでしょう(偽預言者の仲介によって、そのようにさせるのです。[黙示録 13 章 16-17 節](#)と[黙示録 13 章 12 節](#)の比較)。第四に、悪魔と偽預言者と共に、反キリストは再臨の時に「特別に扱」われ、直接火の池に沈められます([黙示録 19 章 20 節](#), [20 章 1-3 節](#))。このようなサタンとの独特な結びつきは、獣が本当に「悪魔の子孫」([創世記 3 章 15 節](#))であるという仮説を支持するさらなる証拠となるのです。

さらに、(艱難期の開始時期に関する前回の計算に基づく)<sup>17</sup>反キリストは現在すでに生きている可能性が高いのです。この文章を書いている時点で、彼はおそらく生きているはずですが、彼の体はその例外的な能力にもかかわらず、ネピリムの体と同じように、まだ物質的なものです。彼の急速な権力獲得、驚異的で精力的な武勇伝、そして、一見どこからともなく有名になるという事実を考えると、艱難期が始まる時、反キリストはまだかなり若いと考えるのが妥当でしょう([ダニエル 7 章 8 節](#), [8 章 9-12 節](#), [11 章 21-24 節](#); [第二テサロニケ 2 章 5-12 節](#); [黙示録 13 章 1-4 節](#))。ネピリム(人間の母親から生まれた:[創世記 6 章 4 節](#))がそうであったように、反キリストも「自然に生まれた」のでしょう。聖書から特定の誕生日を知ることはできませんが、おおよその目標時期を千年期の変わり目とすると、反キリストが出現する時(約 2026 年)の「天才」のステータスと一致すると同時に、その誕生を世界が重要視する日(すなわち、約 2000 年)に関連づけることができます。というのも、これまで述べてきたように、獣は自分こそがメシアであると主張するからです。そのため、新しい千年紀の始まりと同時に、初降臨から二千年目に当たるといふ生年月日が、世界の人々に印象づけられることになるのです。実際にいつから千年期が始まったのかという質問(2000か2001か)が挙げられないのは、1) 主の誕生日は紀元前 2 年 12 月が最も有力であり、そして、2) メシアの再臨の年代を位置づける重要なポイントは、主の十字架刑と復活であって、誕生ではないのです<sup>18</sup>。

最後に、クリスチャンにとって、反キリストの異常な誕生に関するこれらの事実を把握し、受け入れることが実に重要であることは、いくら強調してもし過ぎることはないでしょう。獣は、カリスマ性があり、着手するすべてにおいて大成功し、キリストにあまりに似ることになるので、多くの弱い信者や元信者を含む世界の住民の大多数によって、実際にキリスト**である**とみなされるからです([マタイ 24 章 23-28 節](#); [マルコ 13 章 21-23 節](#)参照; [ダニエル 11 章 36-37 節](#); [第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [第一ヨハネ 2 章 22 節](#); [第二ヨハネ 1 章 7 節](#))。このことは、これらの出来事から十分に離れていて、一時的に隔離されている今の私たちには、意外で奇妙に聞こえるかもしれません。反キリストは、非常に多くの印象的な点で**非常に**並外れているので、普通の人間ではないと結論づけるのが道理でしょう。そして、実際にそうなるのです。しかし、反キリストの悪魔的な起源を理解せず、受け入れなかった人々は、その前例のない独自性を悪魔のせいではなく、神性のゆえだと誤認してしまう危険性があるのです。

#### b. 反キリストの母系の由来:

---

<sup>17</sup> 「悪魔の反乱」第 5 部「審判、回復、置き換え」II.9 節「人類史の 7 日間の具体的な年表」参照。

<sup>18</sup> この二点については、『悪魔の反乱』第 5 部「裁き、回復、置き換え」、II.9「人類史の 7 日間の具体的な年表」参照。



今まで獣の父系の起源について述べましたが、彼の母親については、その遺伝的系統をイスラエルに遡ること以外、何も言うことはできません。この事実は、それ自体、重要です。意外に思われるかもしれませんが、(パロやハマーンやヒトラーよりも)人類史上最も広範囲なイスラエル迫害を行うことになる人物は、ユダヤ人の血を引く者となるでしょう。反キリストの人間の半分の起源について言えることは、彼がユダヤ系の母から生まれるということです。この言葉には注意を払う必要があります。聖書的には、真に「イスラエルのもの」であるためには、アブラハムの血筋であるだけでなく、アブラハムの信仰を持っていることが必要だからです(ローマ 9 章 8 節; [ローマ 4 章 16 節](#)も参照)。ですから、イスラエルの最も暴力的で激しい敵は、このカテゴリー<真のイスラエル>に入ることはできません。この原則を教える聖句も、その聖句の説明も、反ユダヤ主義的意図を支持するための論理にも用いることはできないことを指摘することは、当たり前すぎるように思えます(同時におそらくそうである必要があります)。むしろ、反キリストこそが、歴史上最も極端な反ユダヤ主義者となるのです。彼は、かつてないほどイスラエルを迫害し、その父である悪魔の命令でイスラエルを完全に破壊しようとするでしょう。そして、真のユダヤ人の王、真の救世主である私たちの主であり救い主であるイエス・キリストを装い、その方にとって代わろうとし、主が再び戻って来られるその最後の時に全力で抵抗する反キリストこそが、偽りの救世主なのです。

そもそも、ユダヤ人の母から生まれたというメシアとしての本質的な資格(今日でも、イスラエル国家が用いる「ユダヤ人」の本質的なテストはこれです)を欠いた獣が、どうして反キリストとして分類されるのか(少なくとも信じられるのか)、理解に苦しむところです。霊的地位、宗教的所属、国籍に関係なく、メシアはイスラエル、特にユダの血統から来ることを誰もがよく知っています([創世記 49 章 8-12 節](#); [ミカ 5 章 2 節](#); 参照: [民数記 24 章 17 節](#); [マタイ 2 章 2 節](#)後半)。メシアの座を狙う者は、言い分を聞いてもらうだけのためにも、そのようなユダヤ人の出自を証明しなければなりません。獣の大成功と反キリストとしての記述から、獣がそれを成し遂げることは間違いありません。

第二に、獣が艱難期の前半にイスラエルと緊密な関係を築くのも、何らかの自然な結びつきがなければ理解しがたいことです。[ダニエル 9 章 27 節](#); [民数記 24 章 24 節](#); [ダニエル 11 章 22 節](#)後半)。ここに引用した最後の二つの節はしばしば全く誤解され、その結果、しばしば不適切な翻訳が施されてしまっています([ダニエル 11 章 22 節](#)後半の欽定訳は最も真実に近いです)。[ダニエル 9 章 27 節](#)と合わせて考えると、これらは反キリストのユダヤ人の先祖を示す説得力のある証拠です。ヘブル語の本文には、獣に対する預言的な言及が含まれています(最初の節では ve-gam hu`、二番目の節では ve-gam naghidh berith)。それぞれ、「そして、この者こそ(すなわち、反キリスト)」、「そして、この者こそ([ダニエル 9 章 27 節](#))の契約の君(すなわち、反キリスト)」という意味です。反キリストの「メシア」としての特別な地位は、イスラエルに関する彼のすべての行動において、当初はイスラエルの「救い主」と見なされるのに役立つこととなります。

(小さい角である、反キリストは)またみずから高ぶって、その衆群の主(すなわち、キリスト)に敵し…。([ダニエル 8 章 11 節](#)前半)

第三に、[ダニエル 11 章 37-38 節](#)には、反キリストについて、「その先祖の神」が二度言及されています。聖書の用語では、「父祖」はもっぱらイスラエルの家父長を表している(例えば、[歴代誌下 20 章 33 節](#)参照; [ローマ 9 章 5 節](#):「先祖たちも彼らのもの(すなわちイスラエル)であり」)、真の神を反キリストの先祖の神としていることは(もちろん、彼はこの神に対して「顧みず」とあるので、拒絶しているわけです)、反キリストがユダヤ人の家系であるという意味にちがひありません(その印象は、[ダニエル 11 章 35-36 節](#)で強め

られます)。39節では、反キリストが代わりに「異邦の(すなわちイスラエルの神ではない)神」を尊ぶと言われていますが、この究極の「北の王」がユダヤ人である場合にのみ、異例な事です)。

最後に、聖書は反キリストがダン族から生まれ、その結果、彼の母方の起源がユダヤ人であり、特にダン族に由来すると理解すべきことを示しています。第一に、ダンは、144,000 人のユダヤ人の証人として召される十二部族の一覧に入っていない部族です(黙示録7章5-8節)。この除外は驚くべきことです。この種のリストではしばしばレビが除外され代わりに、マナセとエフライム(8節では<エフライムが>ヨセフと呼ばれています)が、これはエフライムが実質的に優位であったためです:創世記48章12-20節)が含まれ、個々の部族として数えられます。そして、イスラエルをかつてないほど苦しめる者が、ダンの子孫であることは、反キリストにより殉教する証人の中にその部族が含まれていない原因になります。反キリストを滅ぼす来たるべきメシアの部族であるユダが、このリストの(珍しく)最初に挙げられていることは、この議論をさらに強固なものにしています。ダンを扱っている他の主要な預言的箇所も、同様にこの部族が獣と関連していることを裏付けています。

(16)ダン(反キリストである者)は、あたかもイスラエルの部族の一人であるかのように、おのれの民をさばくであろう。(17)[しかし]ダン(すなわち、反キリスト)は道のかたわらのへび、道のほとりの毒蛇。馬のかかとをかんで、乗る者をうしろに落すであろう。(18)主よ、わたしはあなたの救を待ち望む。(英文直訳—創世記49章16-18節)

ここでダンが(預言的には常に悪魔と関連付けられている)蛇と同一視されていることは、あまり説明する必要もないことですが、この部族の将来についての最初の重要な予言の中に出てくるので、過小評価されるべきではありません。ヘブル語の助詞 **ce** は常に比較の意味を持ちますが、ここでは「あたかも～のように」と訳すのが正しいでしょう。この単語は決して「～ほどの<能力を備えた>」という意味ではありません。この区別は非常に重要です。なぜなら、上記の自然なヘブル語の訳では、ダンと真のイスラエルが明確に区別されていますが、よく見られる間違った訳では、ダンの正統性についての疑問の提示を読み取らせる訳となっておらず、この箇所が実際に述べていることと正反対の意味となっているからです。ダンという部族は十二部族のうちの本当に正当な一部族ですから、この預言は特に**ダンの部族から出る傑出した一人の者**、すなわち反キリストである一人の人に焦点を合わせていると結論するのが正しいのです。ちょうどダン族が 144,000 人を構成する部族のリストから外されているように、この終末の預言では、ダン部族は、確実に不信者であり、よって、アブラハムの「約束の子孫」(ローマ4章)には絶対に含まれない反キリストと関連しているので、(その時には)ふさわしくないと見なされています。

ある集団がその集団の中の一人の著名な人物のために預言的に代表する(あるいはその逆)という原則は聖書でよく証明されています(ここで最も重要なことは、獣の姿が反キリストまたはその帝国のいずれをも表し得るという事実です。) さらに、この聖句はイスラエルの全体的な支配(最終的に一人の人間の手に落ちるはずのもの)について述べているので、読者はこのように受け止めると期待されているのです。この点で、49章では、部族が一人の有力者を表すという同じ用法がユダの場合にも見られ、(統治の)「笏(しゃく)」は明らかに最終的な善き支配者、私たちの主イエス・キリスト、メシア(創世記49章8-12節)を指し、待ち望んでいることが重要なのです。ヤコブは家族に「後の日に(終わりの時、特に艱難期を指すよく使われ

る表現)」起こることを告げると言って預言を始めました<sup>19</sup>。このように、ヤコブの預言には、**ユダ**の獅子、私たちの救い主([創世記 49 章 8 節](#)参照)というイスラエルの将来の支配者を、正反対の**ダン**族から出る蛇の子、毒蛇の反キリストとはっきりと意図的に並置されているのです。

蛇がサタン(つまり、父親のやり方を真似る反キリスト)を象徴することに簡単に戻ると、[創世記 49 章 16-18 節](#)で蛇が馬の「かかとを打つ」ことで不幸にも騎手を脱落させると言及していることは、同様に女の子孫であるメシアのかかとを打つ[創世記 3 章 15 節](#)の蛇を少なからず思い起こさせるものです。実際、ここで使われている毒蛇という珍しいヘブル語の単語シピフォン(שפיפון)は、[創世記 3 章 15 節](#)で「攻撃する<口語では「砕く」>」または「打つ」という意味で使われている珍しい単語と語源が非常によく似ています。そのため、この箇所も同様に、神の民に敵対する偽メシアの預言と見なされることがより確かなものとなっています<sup>20</sup>。サタンがキリストに反対したように、悪魔の反キリストは真の神の子らに反対します。蛇のように、反キリストは欺き、イスラエルとすべての真の信者をこっそり攻撃します。この預言の中で、乗り手が「後ろ向き」に落ちるといふ事実は、明らかに背教を象徴しています。実際、モーセとエリヤと 14 万 4 千人の働きに耳を傾けないイスラエルの人々が、「正しい道」から迷わせる反キリストの餌食になることはすでに見てきたとおりです。ここでも重要なことは、ヤコブが来たるべき苦渋の時を経験する運命にあるすべての子孫のために力強く祈った解放、すなわち「救い」は、前の節で蛇が行った行動を、神よりの大きな特別な解放を必要とするものであることを最も確実に示しています。ここで使われているヘブル語の「救い」יִשׁוּעַは、神の手による特別な救いによく使われる言葉で(例えば、獣とその王国の典型であるパロとエジプトからの救い)、また、イエスという名前に由来する言葉です(イエスによる私たちの究極の「救い」です)。この文脈での究極の解放は、解放者であるイエスご自身が獣とその王国を滅ぼし、反キリストの手から民を救うために戻って来られるときにもたらされます。

このようなダン部族と反キリストの本質的な関係は、十二部族に関するもう一つの主要な預言であるモーセの祝福の中にも見ることができます。

ダンについては言った、「ダンはししの子であって、バシヤンからおどりでる」。(申命記 33 章 22 節)

バシヤンはヨルダン川を挟んでイスラエルの北にある地方で、聖書的にはほとんど肯定的な意味合いはありません。レパイム([申命記 3 章 11 節](#); [創世記 14 章 5 節](#)参照)はネピリムを思い起こさせる超高身長の種類で、反キリストは悪魔の父を持つことから、本質的にこの種の一人なのです。「バシヤンの雄牛」は私たちの主イエス・キリストに対する悪魔の攻撃を象徴し([詩篇 22 篇 12 節](#))、「バシヤンの牛」はヤラベアムの治世の北王国の女性たちの物質主義的背教を象徴します([アモス 4 章 1 節](#))、これらのイメージは両方とも、悪魔的で霊的なものに反する関係に直接関連しているのです。バシヤンはまた、ツロ([エゼキエル 27 章 6 節](#))、海([詩篇 68 篇 22 節](#))、ハルマゲドンでの反キリストの軍隊の虐殺([エゼキエル 39 章 17-20 節](#))と関連

<sup>19</sup> 「来たる艱難期」:「第 1 部:序論」I.2.h「(患難に言及している)その他の箇所」参照。

<sup>20</sup> <「砕く/打つ」と訳されている> shiphophon の語源を確実に特定することは不可能ですが、文脈の類似性を考慮すれば、この言葉の音と感触が、注意深い読者に[創世記 3 章 15 節](#)の動詞を思い起こさせることは間違いありません。



しており、それぞれ反キリストの故郷(ツロ・バビロン)、その悪魔の起源(底知れぬ所)、(再臨におけるメシアの手による)その究極の終わりを思い起こさせます。このように、聖書が示すバシヤンの複合的な否定的イメージから、読者はこの預言の冒頭で、ダンがバシヤンの地から「出てくる」ことから、同じように否定的な展開を予測します。終末に復活するローマは、バシヤンのように(イザヤ 2 章 13 節参照)、イスラエルの北にあり、反キリストが艱難期の最中にイスラエルとの条約を破棄するとき、イスラエルに対して北から「おどろき出」ます(ダニエル 9 章 27 節)。ここで描かれているダンは、イスラエルの北から若い獅子のように敵意をもって、ある種の「獲物」に向かって「飛びかかる」のですが、他の対象が示されていない場合、イスラエル自身がその対象であると解釈するのが最も妥当でしょう。そして、ダン部族がイスラエルの他の部族を個別に攻撃したことは過去にはなく、この動詞は未来形なので、モーセによるダンへの「祝福」は、イサクがエサウに宣告した「祝福」のようなもの、つまり将来の子孫に関する歴史的に正しい預言であって、特別な祝福ではない(創世記 27 章 37-40 節)と結論せざるを得ません。この場合は、反キリストが将来自分の親族を襲うという預言です(創世記 49 章 16-18 節は、ヤコブによるもので前の預言を補強するものです)。

最後に、ここでダンについて使われているヘブル語の表現「獅子の子」は、創世記 49 章 9 節でユダについて使われている表現と同じです。このユダに関する預言的な箇所では、すでに指摘したように、獅子の子はユダ族の獅子である私たちの主であり救い主イエス・キリストを明確に象徴しています(黙示録 5 章 5 節を参照)。申命記 33 章 22 節でダンが獅子として描かれているのは、聖書の他の箇所では見られないことであり、偶然とは言い難いです。この獅子が自分の親族に敵意を抱いていることを考えると、この象徴の中に、自分の(母方の)起源をダン族とする反キリストの預言だけでなく、反キリストの手口の大部分を占めるであろうメシアの意図的模倣(すなわち、獣は「獅子のような口を持ち」、とりわけメシアを自称する)を明確に示しているものと考えることが正しいのです。黙示録 13 章 2 節)<sup>21</sup>。

ヤコブとモーセの 12 部族の将来について書かれた、この二つの極めて重要な予言におけるダンと反キリストの関連は、聖書におけるダンに関する他の多くの否定的な言及と一致し、その多くは預言的意味を持っています。

北からのバビロンの侵攻は、終末のバビロンの王である反キリストが北からイスラエルに対して侵攻してくるものの預言的な型です。そしてこの侵略は、エレミヤ書の中で何度もダンと関連しています。

(7)しし(すなわち、反キリストの予型としてのネブカデネザル: 上記 I.3.d 参照)はその森から出てのぼり、国々を滅ぼす者は進んできた(エレミヤ 25 章 32-38 節; 特に 38 節を参照)。彼はあなたの国(すなわち、イスラエル)を荒そうとして、すでにその所から出てきた。あなたの町々は滅ぼされて、住む者もなくなる…(15)ダンから告げる声がある、エフライムの山から災を知らせている。(16)国々の民に彼の来ることを告げ、またエルサレムに知らせよ。「攻めかこむ者が遠くの国から来て、ユダの町々にむかってその声をあげる。(エレミヤ 4 章 7 節, 15-16 節)

---

<sup>21</sup> 反キリストは、ユダの獅子であると主張していますが、実際は、その父である悪魔と同じように、正しい者を滅ぼそうとする「吠え猛る獅子」であり(1ペテロ 5 章 8 節)、光の天使の仮面をかぶる癖もあります(第二コリント 11 章 13-15 節)。

エレミヤ 8 章の、騎馬の大群が国中に押し寄せるといふネブカデネザルの攻撃の描写は、ゴグ(すなわち、反キリスト)が将来イスラエルに侵攻するといふエゼキエルの記述を思い起こさせます。(参照:[エゼキエル 29 章 12-16 節](#), [30 章 23-26 節](#))。そして、ダンと蛇のつながりは、再びその文脈で浮上します:<sup>22</sup>

「彼らの馬のいななきはダンから聞えてくる。彼らの強い馬の声によって全地は震う([エゼキエル 38 章 4 節](#)参照)。彼らは来て、この地と、ここにあるすべてのもの、町と、そのうちに住む者とを食い滅ぼす。見よ、魔法をもってならすことのできない、へびや、まむし[のような者たち]をあなたがたのうちにつかわす。それはあなたがたをかむ」と主は言われる。(エレミヤ 8 章 16-17 節)

ダンは他のどの部族よりも偶像崇拜と背教と密接に関連しています([士師記 18 章 30-31 節](#); [列王記上 12 章 28-30 節](#); [アモス 8 章 14 節](#); [レビ記 24 章 11 節](#):主を冒瀆するダン部族からのハーフ・イスラエル人であるユダヤ人の母についても参照)。他の部族がその土地に割り当てられた領土を占領している間、ダン族は(少なくとも一部は)割り当てられた居住地を放棄し、代わりに北の果てに移動し、その結果、反神の慣習に深く陥っていきました([士師記 18 章](#))。イスラエルの行軍順序において、ダンは「北に」宿営した三部族の先頭部族で、サタンと反キリストと最も密接に関連する場所であり([イザヤ 14 章 13 節](#)と[ダニエル 11 章](#)参照)、東の隊列の先頭部族ユダと正対する位置にありました(聖書はメシアと反キリストの部族が相対する位置を示しています: [民数記 2 章 3 節](#); [2 章 25 節](#))。またダンはその兄弟ナフタリと共に、ゲリジム山の祝福の代わりにエバル山の呪いを口にする部族に属しています([申命記 27 章 13 節](#))。

(大祭司の胸当ての:[出エジプト 28 章 20 節](#))ダン部族の宝石は貴かんらん石(すなわち「金の石」;[雅歌 5 章 14 節](#); [エゼキエル 10 章 9 節](#)参照)、またはヘブル語でタルシシという名前で、タルシシの船とその商業主義(参照:[士師記 5 章 17 節](#))を連想させます。どちらも明らかにフェニキアと関係があります([列王記上 10 章 22 節](#); [歴代誌下 9 章 21 節](#); [イザヤ 60 章 9 節](#); [エレミヤ 10 章 9 節](#); [エゼキエル 38 章 13 節](#); [エゼキエル 28 章](#)ではフェニキアのツロの王はサタンと反キリストとして象徴的に登場しています)。このように、十二部族の中での本質的な象徴として、ダンの宝石は明らかに世俗的で物質的な関連を持っています(ユダ族の赤いサルデスは、救い主が世の罪のために注がれる象徴的な犠牲の血を思い起こさせるので、これとは対照的です)。ダンはヤコブの妻ではない<ラケルの>つかえめからの最初の息子で、その母親ビルハはラケルの女中でした([創世記 30 章 3-4 節](#))。そしてビルハと寝たルベンは<長子の>生得権を失いました([創世記 35 章 22 節](#); [歴代誌上 5 章 1 節](#)参照)。モーセの律法の下で、神を冒瀆したために死刑に処せられた最初の人はダン人でした([レビ 24 章 11 節](#))。

最後に、聖書から、主を裏切ったイスカリオテのユダがダン部族であったことが示唆されています。ユダはダンとともに「十二人のうちの一人」であり、ダンと同様、最終的に十二人のリストから外されています(彼

---

<sup>22</sup> 実際、イレナイオスは、この二つの聖句のうち後者<エレミヤ 8 章>が、反キリストがダン族から生じることを示す明白な証拠であるとしています: “Hieremias ... et tribum ex quae [Antichristus] manifestavit dicens: ex Dan audiemus vocecem velocitatis equorum eius(Jer.8:16) et propter hoc non adnumeratur tribus haec in Apocalypsi cum his quae salvantur” (Adv. Haer. 5.30.2). そのため、<ダン族は>『黙示録』で、救われた部族には数えられませんでした」(Adv. Haer. 5.30.2) <—ラテン語の機械翻訳>。



の場合は使徒パウロに取って代わられました)。ユダの名字イスカリオテの語源は、「カリオテの人」が最も有力です。ユダにはキリアテ・ヤリムという名の町がありました。ヨシュア記はこの場所を、カナン人の異教の神である「バアルの町」Kiriath-Baalと呼んでいます(ヨシュア記 15 章 60 節)。士師記 18 章 12 節によると、北に移住したダン部族はキリアテ・ヤリムのすぐ西に宿営し、「このためキリアテ・ヤリムの西の地は今日までマハネ・ダンと呼ばれている」のだそうです。ダン部族の割り当て(ヨシュア記 19 章 40-46 節)に基づくと、この宿営地はダン部族の領土内にあり、キリアテ・ヤリムは正式にはユダに属する町で、東はユダ、西はダン、北はベニヤミンの三者の境界をなしていたと一般的に結論されています。このように、士師記 18 章 12 節はダンとユダの町を密接に関連付けるだけでなく、実際にはユダ領内にあるキリアテ・ヤリムと、国境を越えて、ダン領にあるマハネ・ダン(「ダンの陣地」という地域が二つのあったことも示しています。バビロン捕囚の世代は、先祖のイスラエル人の地名と系図を結びつけることが一般的でしたので(ネヘミヤ 7 章 1 節以降参照)、「二つのキリアテ」の存在は(十二弟子の)ユダの事においても重要です。ヘブル語でキリアテの複数形はカリオテだからです。つまり、「イス・カリオテ」(ヘブル語 `ish-karioth)という姓の接尾辞「-cariot」は、「(二つの)カリオテの人」を意味し、ユダの先祖がダンの領土内に住んでいたことを指していると考えられます(さもなければ、ユダの主要居住地だけを言及する必要があります :ネヘミヤ 7 章 26-29 節: の「キリアテ・ヤリムの人々」参照)。いずれにせよ、(十二弟子の)ユダは、艱難期におけるダン部族との並行関係が見られます。十二の選ばれたグループ(弟子達とイスラエルの部族)の一人/一つが背教することによって、その十二番目の位が一時的に外れることとなります(後にそれぞれパウロによって回復するダン族によって置き換えられます)が、ユダのダン族とのつながりをより強いものとする並行関係を見ることができます。

このように、ダンと主を裏切ったユダ、そして自分を主と偽る反キリストとの関連は、過去に主に従ったダン部族の人々、現在従っている人々、そして将来従うであろう人々の信仰と誠実さを無効とするものではありません。神はご自分を尊ぶ者をすべて尊ばれ(サムエル記上 2 章 30 節)、アブラハム、イサク、ヤコブ(その子ダン)になされた契約の約束は、神の力と忠誠と誠実さによって永遠に堅く立っています(ローマ 11 章 28-29 節)。そして、千年王国のエルサレムの記述(エゼキエル 48 章 32 節)とメシアの治世下のイスラエルの土地の分配(エゼキエル 48 章 2 節)から、ダン部族は過去の経歴や 144,000 人のリストからの除名にもかかわらず、イスラエルの部族のすべての権利を完全に回復されることがわかります。

このことは、反キリストがダン出身であることを世が知るようになるという意味ではありません。イスラエルの部族的関係のほとんどは、今日では神にしか知られておらず、私たちは聖書の中で「果てしない系図」(第一テモテ 1 章 4 節; テトス 3 章 9 節参照)に振り回されないようにと特に言われているのです。さらに、反キリストが母方のユダヤ人の血統を強調する場合、偽メシアとしてユダの子孫であると主張する可能性があり、そのような主張は新生していない世に信じられる可能性が高いです(キリストのガリラヤが出生地であるという誤った思い込みにより、当時の不信心な人々が彼の系図に間違っただけの印象を持ったことを考えてみてください。ヨハネ 7 章 42 節)。ダン部族の人々の背教と偶像崇拜のパターン、ユダの偽りと裏切りのパターンでは、反キリストはユダヤ人の出自とメシア的主張を利用してイスラエル国民の好意を得ますが(ダニエル 9 章 27 節参照)、最終的には、イスラエルの世界最悪の裏切り者、イスラエルに対するかつてない最悪の迫害者になることでしょう。というのも、反キリストはイスラエルの真の正当な支配者であるメシアを模倣し、それに反対し、イスラエルを滅ぼそうとする者だからです。

c. 反キリストの出身国: 反キリストの出身国と市民権を特定しようとする場合(上に述べた遺伝的祖先とは対照的に)、必然的にまず預言されているバビロンを特定しなければなりません。なぜなら、バビロンが彼の故郷であり、彼が世界支配に上るための権力基盤だからです。

1) バビロンは反キリストの母国: 新約聖書における「バビロン」は、古代の歴史的なバビロンを指すのではなく、聖書が反キリストの国に与えた象徴的な名前です(例:[黙示録 17 章 5 節](#)「大いなるバビロンの奥義、淫婦どもの母、地の憎むべき者らの母」;[第一ペテロ 5 章 13 節](#):「あなたがた(=地域教会)と共に選ばれてバビロン(=ローマ)にある教会」)。どう見ても、バビロンは非常に強力で、実際、世界で最も強力な国であり、その支配力は全盛期のローマに類似するものとなります。バビロンは、反キリストが自らの新しい「ローマ」連合体であるヨーロッパを支配し、そこから全世界を支配するために権力の基盤とする国です(艱難期の前半の<反キリストの>主な対抗勢力である南の国々の同盟勢力の二度目の敗北の後、バビロンが支配することになります。ヘブル語では、[ダニエル 11 章 25-30 節](#))。主の再臨に先立って、反キリストがバビロンを滅ぼすことは真実ですが([黙示録 17 章 16 節-19 章 3 節](#))、獣がバビロンから出て、主にその影響力と力によって手に入れた世界の覇権は、後に獣の手と命令によってバビロンが破壊されても、その実質は変わることはないでしょう。実際、これはまさにイザヤが預言したことです<sup>23</sup>。

(3)主があなたの苦勞と不安とを除き、またあなたが服した苦役を除いて、安息をお与えになるとき(すなわち、千年王国時代)、(4)あなたはこのあざけりの歌をとえ、バビロンの王(すなわち、反キリスト)をののしって言う、「あの、しえたげる者(すなわち、反キリスト)は全く絶えてしまった。あの、おごる者<欽定訳では「黄金の都」=すなわち、バビロン>は全く絶えてしまった。(5)主は悪い者のつえと、[われらを支配する]つかさびとの笏を折られた。(6)彼らは憤りをもってもろもろの民を絶えず撃っては打ち、怒りをもってもろもろの国を治めても、そのしえたげをとどめる者がなかった。(7)全地はやすみを得、穏やかになり、ことごとく声をあげて歌う。(8)いとすぎおよびレバノンの香柏でさえもあなたのゆえに喜んで言う、『あなたはすでに倒れたので、もはや、きこりが上ってきて、われわれを攻めることはない』。(9)下の陰府はあなたのために動いて、あなたの来るのを迎え、地の[前にいた]もろもろの指導者たちの亡霊をあなたのために起し、国々の[前にいた]もろもろの王をその王座から立ちあがらせる。(10)彼らは皆あなたに告げて言う、『あなたも[今は]またわれわれのように弱くなった、あなたもわれわれと同じようになった』。(11)あなたの栄華とあなた[を称えるため]の琴の音は陰府に落ちてしまった。うじはあなたの下に敷かれ、みみずはあなたをおおっている。(12)黎明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。(13)あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、(14)雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』。(15)しかしあなたは陰府に落され、穴の奥底に入れられる。(16)あなたを

---

<sup>23</sup> 歴史的なバビロンに関する近い将来の成就と、ここで論じられる終末論的な起ころうとしている事柄の適用に加えて、この預言は、獣の父であり、指導者であり、予型であるサタン<sup>24</sup>の先史以前の墮落にも関連しています。[「サタンの反乱」第1部第4節「サタンの性格、罪と墮落」](#)参照<日本語版では42ページ>。一般的な聖書の預言と、特にこの箇所に関する複数の適用については、このシリーズの第1部、セクションIV、[「艱難期の歴史に関する聖書の情報源」](#)<日本語版では60頁以降>を参照してください。

見る者はつくづくあなたを見、あなたに目をとめて言う、『この人は地を震わせ、国々[の礎を]を動かし、(17)世界を荒野のようにし、その都市をこわし、捕えた者をその家に解き帰さなかった者であるのか』。(18)もろもろの国の王たちは皆尊いさまで、自分の墓に眠る。(19)しかしあなたは忌みきらわれる月足らぬ子のように墓のそとに捨てられ、つるぎで刺し殺された者[犠牲者]でおおわれ、踏みつけられる死体のように穴の石に下る。(20)あなたは自分の国を滅ぼし、自分の民を殺したために、彼らと共に葬られることはない。どうか、悪を行う者の子孫はとこしえに名を呼ばれることのないように。(イザヤ 14 章 3-20 節)

この「嘲弄」の序文では、「バビロンの王」が主題であり(4 節)、将来の回復の日について語られていることが明確です(3 節)。さらに、これらの節にあるバビロンの支配者についてのそのような記述は、かつての歴史上の支配者に完全な成就を見出すことはできません。<sup>24</sup> ここで描かれているバビロンの王は、イスラエルを抑圧し(4 節)、地上のすべての国々を過酷に支配する「金の都」の支配者でした(5-8 節)。この王は、その野望と暗躍があまりに並はずれていた(つまり、「すべての国々を低くした」、地上の先達はみな、彼が下のシェオルに入るのを心待ちにしています(9-11 節)。彼は「明けの明星」(12a 節)のように天の高みから落ちてきたと描写されていますが、真の「明けの明星」は私たちの主イエス・キリストであり、その称号を装う他の者は詐欺師であることは既に見たとおりです。この節に登場する支配者は、高みを目指し、地上のどんな支配をも超えた支配を目指し、最も高い神のようになりたいと願っていました(13-14 節)。しかし、結局彼は身を低くされる者となり、自分が来たるべき者でなかったことを疑いなく証明されます(15 節)。この支配者は、「地を惑わし」、国々を根底から揺さぶり、世界を砂漠のようにし、都市を足下に踏みつけましたが、今や自ら低くされたのです。真のメシアがそうであるように)世界の捕虜に解放をもたらすのではなく、世界を捕虜として留めておいたのです。そして、その恐ろしい行為の結果、真の枝(イザヤ 4 章 2 節, 11 章 1 節, 53 章 2 節; エレミヤ 23 章 5 節, 33 章 15 節; ゼカリヤ 3 章 8 節, 6 章 12 節 参照)と違って、この支配者は忌まわしい枝のように追い出されます(マタイ 24 章 15 節; マルコ 13 章 14 節; ダニエル 11 章 31 節, 12 章 11 節; 黙示録 13 章 14-15 節参照)。

これらの節は、明らかに偽メシアである反キリストに適用されます。そして、この議論において最も重要なのは、最後に引用された節の太字のハイライト部分です。この聖句は反キリストを「バビロンの王」(4 節)と特定し、その最も突飛な行為、すなわち自国と自国民を破壊すること(20 節: [ハバクク 2 章 8-12 節](#)参照)を責めているのです。ですから、上に述べたように、反キリストがハルマゲドンの前にバビロンを滅ぼす(黙示録 17 章 16 節-19 章 3 節)ことは、彼が神秘バビロンの王として不適格でないばかりか、むしろイザヤ 14 章 3-20 節にも同じくあるように、バビロンを彼の母国として明確に示しています(彼は「バビロンの王」で、自分の民と自分の国を破壊したのです)。

また、この反キリストとバビロンの同一視と一致する他の預言的箇所も見出すことができます。[エゼキエル書第 28 章](#)では、反キリストは「ツロの王」(12 節)としても表わされ、謎のバビロンの他の象徴で、そのフェニキアの都市国家に代表される商業支配を強調しています(例えば、エゼキエル書の[ツロのための嘆きと黙示録 18 章](#)のバビロンのための嘆きを比べてみて、その言葉の近似に注目してください、またイザヤ書 23

<sup>24</sup> この箇所の歴史上のバビロンとサタン在先史時代の反乱への適用については、前脚注を参照。



章と比較してください)。バビロンと同様に、ツロも略奪され、火によって破壊されます([ゼカリヤ 9 章 3-4 節](#))。

特にエレミヤ書では、バビロンの王ネブカデネザルが獣の対型となっています(特に[エレミヤ 25 章 8-9 節](#); [エレミヤ 50-51 章](#)、特に [51 章 34 節](#)参照; [エゼキエル 29 章 17-20 節](#)も参照)。シェシャク(謎の(ミステリー・)バビロンの隠語)の王として、反キリストは最後に主の怒りの杯を飲みます(ハルマゲドンのこと:[エレミヤ 25 章 26 節](#); [黙示録 14 章 19 節](#)を参照)。おそらく最も重要なことは、[エレミヤ 51 章 1 節](#)に主が「バビロンとレブ・カメイの民」に対して破壊者を起こされることが書かれていることです。「レブ・カマイ **Lebh-Qamay**」とは、バビロン(特に、エレミヤの時代にカルデア人として知られていた新バビロニア帝国の人々)の隠語でもあります([エレミヤ 50 章 1 節](#)参照)<sup>25</sup>。さて、この暗号をヘブル語として読むと、「私に刃向かう者達の民」という意味になりますが、この未知のフレーズを「レブ・カミー **Lebh-Qamiy**」、「私に刃向かう者の民」と読むためには、マソラ語の母音一点のみ変更すればいいのです。つまり、この聖句を反キリストに特化したものとするためには、ヘブル語の原文そのものを修正する必要はなく、この聖句を指摘したマソラ派の学者たちの西暦 8 世紀の解釈を少し変更するだけでよいのです。バビロンに対する神の裁きという文脈では、最初の表現(「私に逆らう者たち」)はほとんど意味をなしません。単数形への変更によるバビロンの支配者の特定は、バビロンの運命が予言されているすべての箇所にも類似しています(すなわち、バビロンは常にその支配者と一緒に言及されていますが、彼が、バビロンと一緒に滅びるとは言われていません:[エレミヤ 51 章 12 節](#)参照)。バビロンの王が主に逆らって立ち上がる者であることは、上に引用したイザヤ書 14 章の「わたしは…しよう」と一致しますし、反キリストの前例のない冒瀆的行為について知っている他のすべてのことと一致します(例えば、[ダニエル 7 章 8 節](#)、[7 章 20 節](#)、[7 章 25 節](#)、[8 章 25 節](#)、[11 章 36-37 節](#); [第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [黙示録 13 章 5-6 節](#)、[16 章 14 節](#)、[17 章 13-14 節](#)、[19 章 19 節](#)とすぐこの後に続く [II.2](#) を参照)。ここで述べた他の箇所と合わせて考えると、反キリストとバビロン、特にその王としての関連は、謎のバビロンが彼の出身国であることを明確に示しています。

最後に、上記で指摘したように、反キリストは[エゼキエル書 38-39 章](#)に登場する将来のイスラエルの侵略者ゴグと同義です。このゴグは「マゴグの地の者」と言われていますが、この地は確かにそれなりの国家でありながら(イスラエルの地理的な観点からすれば、北の果ての民です。)、この預言の文脈では、謎のバビロンと同義語です。この謎のバビロンとマゴグの同一性は、エゼキエル 38-39 章に示されている終末論のユニークな内容(読者にも明らかなように、その適用は必ず将来に及ぶ)からだけでなく、その文脈でマゴグとその支配者ゴグに与えられている命令的役割からも明らかです。というのも、ゴグは侵略に最も重要な役割を果たす他の二つの主要国、メシエクトバルの「主君」なのです([エゼキエル 39 章 1 節](#)でゴグがこの二つの主要国を支配することが繰り返されても、マゴグは言及されません)。他の多くの重要な国々は従属的にこの連合体に含まれています(すなわち、ペルシャ、プテ、クシュ、ゴメル、ベテ・トガルマ:[エゼキエル 38 章 5-6 節](#)、さらにシバ、デダン、タルシシュもその従属の程度は低いものの、含まれています。[エゼキエル 38 章 13 節](#))、さらに他の無名の国々も参加しています([エゼキエル 38 章 6 節](#)後半)。このように、ゴグの母国であるマゴグは一種の「超国家」であり、そこからゴグはこの世界規模の連合を支配・指揮してい

---

<sup>25</sup> この暗号も、前の暗号も、「アスバッシュ」と呼ばれるアルファベット・コードによって導かれたもので、符号化された文字が、アルファベットの同じ数列の文字を逆に読んで表しています(つまり、アルファベットの最後から 1 番目の文字であるタウ tau は、通常の順序で最初の文字であるアレフ aleph を表し、最後から 2 番目の文字であるシン shin は、前から 2 番目の文字であるベス beth を表します。- したがって、アスバッシュ a=th-ba=sh, s=n - כ=ש という名前になります)。



ます(反キリストと謎のバビロンに完全に類似した状況)<sup>26</sup>。このように考えると、「マゴグ」という単語がバビロンに対する隠語<秘密の意味を持つ言葉>でもあることは間違いなく重要で、意図的です(これは上に見たようにエレミヤ書の中で謎のバビロンに対して特に使われた現象であることがよく証明されています)<sup>27</sup>。「ゴグ」という名前は、マゴグ(「ゴグの場所」という意味を持つことができます)<sup>28</sup>からの逆成語で、その主なはたらきは、この将来の支配者(反キリスト)をマゴグ、謎のバビロンと密接に関連付けさせるためです。

2) バビロンは地理的に明確な場所: 反キリストの母国として、バビロンは地理的に明確な場所です。この預言的文脈で使われる「バビロン」という名前は、これまで見てきたように象徴的なものですが(つまり、謎のバビロンは、ヨハネの時代のローマ帝国と多くの点で類似している未来の帝国の名前)、それでも、それは実在の場所なのです。例えば、ペテロが「バビロン」を使って、当時のローマを象徴的に表現していますが、それにもかかわらず、彼は明確な場所を指しています(第一ペテロ 5 章 13 節)。この点を強調するのはささいなことにはこだわっているように見えるかもしれませんが、現代の多くの黙示録の解釈では、バビロンを単なる「システム」(宗教、経済など)と見なし、特定できる地理的位置を否定しているので、このように主張することは重要なのです。聖書は違うことを言っています:

a) 黙示録 17 章 18 節では、娼婦バビロンは「地の王たちを支配する」者であり、「大きな都」として描写されています。ギリシャ語の「都市」はポリス(πόλις)と言いますが、この言葉は一般的に一つの都市部以上のものを意味します(例えばアテネはポリスと呼ばれる都市国家で、アテネ市街をはるかに超え、他の町や都市を含むアッティカ半島全体を包含していたのです)。

b) バビロンは物理的に破壊されることができ、明らかに具体的な実体でなければ破壊できない方法で(実際に)破壊されます。(イザヤ 13 章 1-22 節, 14 章 20-23 節, 21 章 1-10 節, 46-47 章; 48 章 14 節; エレミヤ 50-51 章; ハバクク 1-2 章; ゼカリヤ 2 章 7-9 節; 黙示録 16 章 19 節, 17 章 16-17 節, 18 章 1-24 節, 19 章 1-3 節; イザヤ 23 章 1-18 節; エゼキエル 26-28 章も参照)。

c) 信者は「バビロンから逃げなさい」と命じられていますが、それはバビロンが特定の地理的な場所である場合にのみ可能です(イザヤ 48 章 20 節; エレミヤ 50 章 8 節, 51 章 6-9 節, 51 章 45 節, 51 章 50)

---

<sup>26</sup> <黙示録の>ヨハネが、主の千年王国の治世の終わりになって千年王国エルサレムを包囲する軍隊とその指導者を「ゴグとマゴグ」(黙示録 20 章 8 節)と表現しているのは、まさにこのためです。つまりエゼキエル 38 章から 39 章は、その時<千年王国の終わり>にはじめて適用されるわけではありません(例えば、もし永遠の国がすぐに来るのであれば、これらの軍隊の残骸を片付けるための 7 年間の時間や必要性や可能性もないことでしょう:エゼキエル 39 章 9-10 節参照) - しかし、その場合も、サタンが裏で指揮する一人の反神支配者が率いる世界的な連合体があるからです(反キリストとその連合の場合と同じように)。

<sup>27</sup> 別のアルファベットコードでは、3 つの子音それぞれにヘブル語のアルファベットの前の文字を使用してマゴグを解読し、単語を左から右ではなく右から左に読むと、ヘブル語でバビロンを意味する「バベル」という結果が得られます、つまり、m-g-g [m-x-g]を逆にしたもの=g-g-m [x-g-m]、そして、それぞれの子音に前のアルファベットを代入すると、b-b-l [b-g-l] となります。また、「ゴグ」という名前には、ヘブル語で異邦人を意味する「ゴイ」が二重になっているのを見ることができます。

<sup>28</sup>ヘブル語の接頭辞 m-[-m] は、名詞形ではよくあるように、位置を意味します。

[節](#); [ゼカリヤ 2 章 6-7 節](#); [黙示録 18 章 4 節](#); [イザヤ 13 章 14 節](#), [52 章 11-12 節](#); [エレミヤ 50 章 16 節](#)を参照のこと)。

d) [黙示録 16-17 章](#)の**バビロン**と [18 章](#)のバビロンを区別する解釈論は、合理的な根拠がありません。バビロンの両所で描かれているテーマの一致は明らかです。例えば、1) [黙示録 17 章 4 節](#)に登場するバビロンの装いは、[黙示録 18 章 16 節](#)でも基本的に同じです。2) [黙示録 17 章 2 節](#)でバビロンがふるまう姦淫の狂気の酒を諸国民が飲んでいることは、[黙示録 18 章 3 節](#)で再び言及されています。3) 両章には、娼婦に例えられたバビロンが大きく登場しています([黙示録 17 章 1-6 節](#), [17 章 15-16 節](#)と[黙示録 18 章 3 節](#), [18 章 9 節](#), [19 章 2 節](#); [黙示録 14 章 8 節](#)も参照)。実際、バビロンに関するすべての記述は聖書全体を通して一貫しており、黙示録のいずれかの章をより広い視野で見ると、継ぎ目のない統一性が見られます(これはバビロンがツロという別の名前で記述されている場合にも当てはまります:特にイザヤ 23 章、エレミヤ 50-51 章、エゼキエル 26-28 章を参照)。

最後に、新約聖書を章で区切ることは(16 世紀、ヘンリ・エスティエンヌ、別名「ステファヌス」による)比較的新しいもので、(たとえば 17 章から 18 章への)章の区切りに解釈の重きを置くことは非常に注意しなければなりません。『黙示録』第 18 章の詳細が、第 16 章と第 17 章に直接続いており、聖書外典の章区切りの他は、途中休止は聖典にはないという事実は、このバビロンに関する記述が、その前の章と完全に一体のものであることをはっきりと示しています。簡単に言えば、「二つのバビロン」を作り出すために、黙示録のこれらの二つのセクションの間に何らかの区別があることを示唆するテキスト的、文学的証拠は一かけらもありません。

e) 最後に、聖書のどこにもバビロンが場所でないことを示すものはありません。もし、バビロンが経済システムや宗教システムであったとしたら、黙示録 16-19 章に書かれているように、(たとえそんなことが本当に可能だとしても)獣がバビロンを瞬時に破壊することは難しいでしょう。

### 3) バビロンは「十王国帝国」とは別物であり、区別されるべきもの:

現代の黙示録の解釈でよくあるもう一つの誤解は、謎のバビロンと反キリストの帝国が本質的に同じものであるという間違った考えです。しかし、そうではありません。バビロンが実在の場所(反キリストの本拠地)であるという事実を認めれば、バビロンが破壊された後も、反キリストの帝国が無傷であることが明確になります(実際、反キリストの配下の王たちがバビロンの崩壊に大きな役割を果たします):

あなたの見た十の角と獣とは、この淫婦を憎み、みじめな者にし、裸にし、彼女の肉を食い、火で焼き尽すであろう。(黙示録 17 章 16 節)

このように、反キリストとその帝国は、再臨に先立ってバビロンが滅ぼされた時にも、まだ健在で、再臨の時にバビロンが倒れた後に自ら滅ぼされるのです([ダニエル 2 章 34-35 節](#); [2 章 44 節](#)参照)。ですから、バビロンは反キリストの十王国とは別個の存在なのです。後述するように、反キリストの母国であるバビロンと、後に彼が支配するようになる十王国との間のこの区別は、聖書がこの異常に大きな獣の王国を「分裂した王国」([ダニエル 2 章 40-43 節](#))と呼び、「他のすべての王国と異なる」([ダニエル 7 章 23 節](#))とすることができる理由を理解する助けとなるのです。

4) バビロンは十王国帝国とは異なるので、ヨーロッパ圏内に位置してはいないでしょう: [黙示録 17 章](#)では、娼婦バビロンが獣(獣の帝国:[ダニエル 7 章 2-27 節](#)参照)に乗っている姿が描かれています。このたとえば、バビロンと帝国が互いに独立しながら、密接な関係にあることを説明しているものです。艱難期の前半に獣が支配する帝国は、(獣に乗るバビロンを権力の基盤とし)、十の主要な王国から構成されます(すなわち、[ダニエル 7 章 7-8 節](#), [7 章 19-20 節](#), [7 章 24 節](#); [黙示録 12 章 3 節](#), [13 章 1-3 節](#), [17 章 3 節](#), [17 章 7 節](#), [17 章 12 節](#), [17 章 16 節](#) の「十本の角」)。これらの王国の正確な正体は聖書に明示されていませんが、[ダニエル 9 章 24-27 節](#)と[黙示録 17 章 8-11 節](#)の二つの重要な聖句は、これらの国々が一般論として、ヨハネの時代のローマ帝国の支配地域と緩やかに同義であることを明らかにしています(このため、黙示録の解釈においては、十本の角の帝国を「復活したローマ帝国」と呼ぶことがあります)。

(24) あなたの民と、あなたの聖なる町については、七十週が定められています。これはとがを終らせ、罪に終りを告げ(すなわち、背教を全うさせ)、不義をあがない、永遠の義(すなわち、キリストの救い)をもたらし、幻と預言者を封じ、いと聖なる者<至聖所-新改訳IV>に油を注ぐため(すなわち、御国の到来)です。(25)それゆえ、<エルサレム再建を中止する命令が出され-英文直訳(紀元前 485 年ごろ:[エズラ 4 章 6-23 節](#))>エルサレムを建て直せという命令が出て(42 年後の紀元前 443 年ごろに再建が始まり、完成までにさらに 7 年を要する:[エズラ 7 章 11 節~28 節](#)、[ネヘミヤ 1 章 6 節](#)参照)から、メシヤなるひとりの君が来るまで、七週(すなわち、命令から再建までの間)と六十二週(つまり、再建から紀元前 2 年頃のキリスト誕生までの間)あることを知り、かつ悟りなさい<sup>29</sup>。その間に、しかも不安な時代に、エルサレムは広場<「堀(ほり)」-新共同訳、新改訳IV>(軍事的再建)と街路(居住の再建)とをもって、建て直されるでしょう。(26)その六十二週の後にはメシヤは断たれるでしょう。ただし自分のためにではありません([イザヤ 53 章 8 節](#)参照)。またきたるべき君(=反キリスト)の民は、町と聖所とを滅ぼすでしょう。その終りは洪水のように臨むでしょう(すなわち、ハルマゲドンでの彼の軍隊の「洪水」;[ダニエル 11 章 22 節](#); [ナホム 1 章 8 節](#)の同じヘブル語の単語シェテフ, שֶׁטֶף, 参照)。そしてその終りまで戦争が続き、[ひどい]荒廃は定められています。(27)彼(すなわち、反キリスト)は[イスラエルで][残りの]一週の間(すなわち、第七十週である、艱難期に)多くの者と、堅く契約(ヘブル語で בְּרִית, beriyth)を結ぶでしょう。そして彼はその週の半ば(すなわち、艱難期の中間点の直前に、犠牲と供え物とを廃するでしょう(すなわち、モーセとエリヤを排除し、神殿の儀式を中断します)。また荒す(すなわち、神からの離反と疎外を引き起こす)者が憎むべき者の翼に乗って来るでしょう。こうしてついにその定まった終りが、その荒す<「ことを特徴とする」-英文直訳>者(すなわち、神からの離反と反逆の原型であり、それを引き起こす原因であった獣)の上に注がれるのです」。(ダニエル 9 章 24-27 節)

最後の週(艱難期)において、この「君」が表に現れること、神殿の儀式を中断することのどちらも、この人物が反キリストであることを明確に示します。(ダニエル 11 章 21-45 節; [第二テサロニケ 2 章 3-12 節](#)参照)。また、この人物もメシヤと同じヘブル語の単語 ナギード naghidh, נָגִיד (「君」)を使って、真の君と

<sup>29</sup> 主の生年月日の決定に関わる年代的な問題については、「サタンの反乱」第 5 部「裁き、回復、置き換え」の II.9.a.1 項「キリストの誕生」参照。



「アンチ(反)-君」の存在を示唆しています)。また、イスラエルとの契約を「契約」(同じヘブル語のブリート berith、ברית(「契約」)ここでは真の契約と対立する「アンチ(反)-契約」を示唆)と表現していることも、この人物がまさに反キリストに他ならないことを明確に示します。私たちはすでに、反キリストの意図的な(虚偽の)メシアとしての主張について考察しましたが、イスラエルとの関係においても、彼がイスラエルとの正式な合意を同様のメシア的な方法で印象づけ、それがイスラエルにとっての「新しい日」の聖書的成就であると偽って示唆することは、十二分に考えられるからです。(イザヤ 55 章 3 節, 61 章 8 節; エレミヤ 31 章 31-33 節; エゼキエル 16 章 59-63 節, 20 章 37 節, 34 章 25 節, 37 章 26 節; ホセア 2 章 14-20 節; マラキ 3 章 1 節 参照)。ダニエル 11 章 22 節は、反キリストを「契約の君」(ナギード ブリート neghidh berith)と名付け、この二つの考えを組み合わせているので、ここで問題になっている人物の身元についての疑いは全くなくなっています。

この聖句で重要なのは、反キリストが終末論的にエルサレムを破壊する民の君であるとされている点です。紀元 70 年にエルサレムと神殿を破壊したのはローマ人でしたから、反キリストとローマとの関連は疑う余地がないのです。さらに、その破壊から反キリストが歴史の舞台に登場するまでには二千年近くかかるので、彼が君となる「ローマ帝国」は、ある重要な意味において、以前の帝国の復興でなければなりません(したがって、獣がその「致命的な傷」から驚くべき回復をすることは、これが十王国帝国に部分的に当てはまること、すなわちローマの復興として説明できるのです。黙示録 13 章 3 節, 13 章 12 節, 13 章 14 節; 黙示録 17 章 8-10 節参照)。ローマ人、ラテン語、ローマ帝国の制度は復元される可能性がないので、この帝国の復活は領土的な意味で、十王国は歴史的ローマ帝国とほぼ同じ領土を占めるという意味で復活したローマになることは間違いないと思われま(ダニエル 7 章 23-24 節で十王が第四の獣から発生するとされている理由はこれによるものです)。この点に関連して、バビロンは復活したローマと同じ領土に位置することはできず、ローマがこれらの地域を支配していたため、ヨーロッパ、地中海、近東に位置することはできないという結論になります。

(8)あなたの見た獣は、昔はいた(すなわち、「存在していた」)が、今はおらず(すなわち、「存在しなくなった」)、そして、やがて底知れぬ所から上ってきて(すなわち、一方ではローマの復興を指し、他方では反キリストのあからさまな蘇生をし)、ついには滅びに至るものである。地に住む者のうち、世の初めからいのちの書に名をしるされていない者たちは、この獣が、昔はいた(すなわち、「存在していた」)が今はおらず(すなわち、「存在しなくなった」)、やがて来るのを見て(すなわち、反キリストについては復活し、帝国について再興されるように見えて)、驚きあやむであろう。(9)ここに、知恵のある心が必要である。[獣の(黙示録 17 章 3 節と黙示録 13 章 1 節参照)]七つの頭は、この女のすわっている七つの山であり、また、七人の王のことである。(10)そのうちの五人はすでに倒れ、ひとり[次の(すなわち、第六の)], は今おり[生きていて]、もうひとり(すなわち、反キリスト)は、まだきていない。それが来れば、しばらくの間(すなわち、艱難期の間)だけおることになっている。(11)昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八のもの[王]であるが、またそれは、かの七人の中のひとりであって、ついには[自分の]滅びに至るものである。(黙示録 17 章 8-11 節)

「まだ来ていない」七番目の王が反キリストであるのに対して、先行する六人の王はローマ皇帝です。六番目の王は「今生きています」のであって、五人の王は死んでしまったからです。ヨハネが黙示録を書いた時



に生きていたローマの「王」である皇帝はネロで、その前にはユリウス・カエサル、アウグストゥス、ティベリウス、カリグラ、クラウディオの五人の先帝がいました。ユリウス・クラウディオの継承はネロで終わり(歴史の塵と化して久しい)、反キリストは、事実上、自分の国バビロンで権力を得た後、ローマの領土を支配する、回復したローマの次の支配者と言う意味で「七番目の王」としか言いようがありません。この命題の第二の部分、すなわち、反キリストが新ローマを支配する一方で、新ローマのものではないことは、11 節の文章が、反キリストは「八番目の(王)」であると同時に、先に述べた「七人の(王)」のうちの一者であると述べていることによって明らかにされています<sup>30</sup>。これが事実であるには、カエサルの継承者である(「七番目の王」という称号は、復活したローマを完全に支配することを示すもの)と同時に、ローマ帝国以外において自ら王権を持つ者でなければなりません。[ダニエル 7 章 7-24 節](#)によれば、[黙示録 13 章 1 節](#)、[17 章 3 節](#)、[17 章 16 節](#)の十本の角のうち、三つは完全に征服によって得た王国であり、七つの頭とそれに対応する残りの七つの角はヨーロッパにおける反キリストの権力の基盤となっているのです。これらの王国にはそれぞれ反キリストと同盟を結ぶ(角を持つ頭が象徴している)王がいるので、獣である彼自身は、他のすべてを支配する最高の王という意味で「八番目」でもあるのです。この聖句は、バビロンが歴史的ローマの領土ではないことを示しています。なぜなら、反キリストとその領域(バビロン)は、復活したローマとは別の場所にあることが、この聖句によって明確に示されているからです。

5) バビロンの特徴: バビロンが実在の場所であり、復活したローマの十王国とは異なる実在の国家であり、それゆえ、ヨハネの時代のローマ帝国が支配していた領域には含まれないことは、すでに述べたとおりです。聖書に書かれている謎のバビロンの特徴を列挙すると、反キリストの母国に最も合致する将来の候補として、現代のどの国が有力であるかという予想がつくようになります。この文章が書かれた時点からその日までの間に歴史的に多くのことが起こり得るのは事実ですが、それでもその日は急速に近づいており、現在の世界大国の性質は、少なくとも今後 20 年ほどの間に見分けがつかないほど様変わりすることはないでしょう。

a) 象徴性: 聖書の中でバビロンを象徴的に示唆することがよくあることを考えると、艱難期の反キリストの権力の座にこの名が選ばれたことは、ほとんど驚くことではありません。歴史上のバビロンは、もちろん、「エデンの東」の反-神の都市であり、バベルの塔があった場所であり、大洪水の後、(すでに見たように反キリストの予型である)ニムロデの(まさに反キリストが達成しようとする)世界一政府を建て上げるという悪魔的な計画による、人間の自由に対する最初の大きな攻撃を行った場所でもあります。<sup>31</sup> バビロンはまた、その後の民族の分散後に設立された最初の大帝国の首都でした。そして、その創設者ネブカデネザルは(バビロンの卓越した王として、これも反キリストの一つの予型であり)、<かつての>ローマの興隆と<これから>復活するローマである、反キリストの十王国帝国のダニエル書の預言における大きな像の「金の頭

---

<sup>30</sup> ギリシャ語のテキスト(写本「ms. x」を参照)では、「この[者]は 8 番目である」という表現は男性形であり、これは王たちに対する言及です。つまり獣そのもの(ギリシャ語では中性)や、頭の一つ(ギリシャ語では中性)、あるいは山の一つ(ギリシャ語では女性)を意味してはいません。七つの王国の順序における「もうひとり」、すなわち七つのうちの「最後」についても同様で、どちらの場合も、その言及は反キリストのことであり、彼の十王国の帝国のことではありません。

<sup>31</sup>『サタンの変遷』第 5 部「裁き、回復、置き替え」III.2「人間の自由に対するサタンの洪水後の攻撃(バベルの塔)」参照。

部」です([ダニエル 2 章 36-45 節](#))。<sup>32</sup> さらに、歴史上のバビロンは第一神殿の破壊と、<ユダヤ人の>70年間の国外追放をもたらしました。終末の「謎のバビロン」は、反キリストの権力基盤であって、これによってイスラエルと教会に迫害をもたらします([黙示録 16 章 6 節](#), [17 章 6 節](#), [18 章 24 節](#), [19 章 2 節](#)参照)。最後に、ペテロがローマにある教会を「バビロンにある教会」と言っているのは、ある意味で<ローマ>帝国とは別の、<ローマ>帝国を支配する包括的な中心的権力である<バビロンという>概念を反映したもので、復活する帝国を「獣に乗って」支配する将来のバビロンと一致しています。( [第一ペテロ 5 章 13 節](#)と[黙示録 17 章 1 節](#), [17 章 3 節](#), [17 章 7 節](#), [17 章 9 節](#), [17 章 15 節](#), [17 章 18 節](#)と比較)。読者には、このシリーズの第 1 部で、(フェニキアの主要都市の)ツロと(アッシリアの首都の)ニネベについて述べたことを思い出していただきたい; これら二つの都市の前者はその最高の経済大国として、後者はその最高の軍事大国として、私たちがもっぱら「バビロン」と呼んでいる未来の「謎の」王国との類似性を示すために使われています。<sup>33</sup> 結局のところ、反キリストは、[エゼキエル書第 28 章](#)において「ツロの王」として描かれているのです(上記の II.1 .c.1 参照)。

b) 過大な富: 旧約聖書の預言によると、バビロンは「金の都」([イザヤ 14 章 4 節](#): 欽定訳とヘブル語)、「宝に満ち」([エレミヤ 51 章 13 節](#))、その大きな富の結果として過度に高ぶります([エゼキエル 28 章 5 節](#))。彼女は「豪華な宮殿」に住み([イザヤ 13 章 22 節](#))、象徴的な姉妹であるツロとニネベのように([ゼカリヤ 9 章 3 節](#))、銀と金の無限の供給を楽しむでしょう([ナホム 2 章 9 節](#))。最終的に、その富は彼女の命を贖うことができず([イザヤ 47 章 11 節](#))、その大きな富はすべて略奪され、破壊されることとなります([エレミヤ 51 章 58 節](#))。この描写は、紫と緋色の服を着て、金、宝石、真珠で光り輝いている([黙示録 18 章 16 節](#)参照) [黙示録 17 章 4 節](#)にある娼婦バビロンの描写、および 18 章のその国の滅亡の描写とも完全に一致しています。( [黙示録 18 章 16 節](#)参照)。その章では、地上の商人たちがバビロンの過剰な購買と所有の目録を作り([黙示録 18 章 11-16 節](#)参照)、「このような大きな富」を失うことで嘆く([黙示録 18 章 17 節](#))のです。

c) 比類のない商業: バビロンは、その大きな富と贅沢の事実とは別に、商業活動で知られる貿易国でもあります。預言的な文脈の中で[ゼカリヤ 5 章 11 節](#)には、「邪悪」がシナルの地(すなわち、バビロニア)に運ばれると書かれています。この箇所は、主に謎のバビロンにおける悪魔的な宣伝活動の集中化(以下で扱う)を指していますが、邪悪が「はかりかご」に載せられて運ばれるという事実は、超商業主義と邪悪さが明らかに一つとなっていることを意味しています。<sup>34</sup> [ナホム 3 章 16 節](#)には、バッタのように土地を裸にして飛び去るアッシリア商人について言及されています。しかし、この点で、将来の謎のバビロンを最もよく描写しているのは、古代の商業の巨大都市であるツロです。ツロは[イザヤ 23 章 3 節](#)で「諸国の市場」と言われ、この比類のない商業がこの都のために巨万の富を得たのです([エゼキエル 28 章 4-5 節](#))。その商人は「君たち<君主たち-新改訳IV>」であり、その商人は「地で尊ばれている人達」です([イザヤ 23 章 8 節](#))。この最後の言及は、[黙示録 18 章 23 節](#)で謎のバビロンにそのまま適用されています。ツロがユダヤ人を奴

<sup>32</sup> 神のご計画に反対する悪魔の立場から、世界の中心としてのユーフラテス川とバビロンに関する前編 3AIII.6「第二の災い: 悪霊による滅び」([黙示録 9 章 13-19 節](#))も参照。

<sup>33</sup> 第 1 部「終末の時代に関する聖書の資料: 旧約聖書」の IV.2.a 参照。

<sup>34</sup> M.F.アンガー『旧約聖書注解』所収参照。

隷として売り飛ばすことは、この罪が主の日に裁かれると具体的に言われている以上、反キリストの迫害を予示しています。(ヨエル 3 章 4-8 節; アモス 1 章 9-10 節)。謎のバビロンの商業活動の悪しき性質は、第三の封印(黙示録 6 章 5-6 節; [本シリーズのパート 2B で説明](#))の動向も思い起こさせます。反キリストが経済活動を過度に支配して、選ばれた少数の者以外のすべての者に不利益を与え、この動向は獣の刻印で悪の頂点に達し、それなしでは誰も売り買いできなくなります(黙示録 13 章 16-18 節参照; 「強奪に満ちて」[ナホム 3 章 1 節](#)も参照)。この人為的で虐待的な機構は、バビロンが艱難期に集める不正な富の流入に貢献します。ですから、バビロンの交易活動が売春として表現されていることは驚くことではありません([イザヤ 23 章 15-18 節](#); [エゼキエル 26-28 章](#); [アモス 1 章 9-10 節](#); [ゼカリヤ 9 章 2-4 節](#) を参照)。最後に、[黙示録 18 章](#)をざっと読むなら、バビロンの富と貿易の規模、特に最高級の輸入品に対する食欲さについて、ほとんど疑う余地はないでしょう(特に[黙示録 18 章 11-20 節](#)を参照)。

d) 卓越した権力: 黙示録の中で、謎のバビロンはしばしば「**大いなるバビロン**」と呼ばれており([黙示録 14 章 8 節](#), [16 章 19 節](#), [17 章 5 節](#), [18 章 2 節](#), [18 章 10 節](#), [18 章 21 節](#))、これは「金の頭」、最初の大帝国、ネブカデネザルの歴史的バビロンの呼称でもありました([ダニエル 4 章 30 節](#))。この称号は、将来のバビロンが地上の他のすべての権力者を抜きん出て立ち、その権力についての他の記述と一致しています。バビロンは、次のように描写されています:

- ・「全地を滅ぼし尽す滅ぼしの山」([エレミヤ 51 章 25 節](#))
- ・無敵の軍隊を持つ([ハバクク 1 章 8-11 節](#)参照; アッシリア:[ナホム 2 章 3-4 節](#); ツロ:[エゼキエル 27 章 10-11 節](#)も参照)。
- ・「最も輝かしい王国」と「バビロニア人の栄光の誇り」([イザヤ 13 章 19 節](#))
- ・もろもろの国の女王([イザヤ 47 章 5 節](#))
- ・王冠を授ける者([イザヤ 23 章 8 節](#))
- ・諸国民を冒涇する「ただわたしだけ」([イザヤ 47 章 8 節](#))
- ・「冷酷で気性が荒く、全地球を掃討し、自分のものでない住居を奪う」([ハバクク 1 章 6 節](#)参照; アッシリア:[ナホム 2 章 11-12 節](#)も参照)。
- ・「恐ろしく」、「自分自身の名誉を高め」([ハバクク 1 章 7 節](#))、「おのれの力を神とする罪深い者」([ハバクク 1 章 11 節](#))である民を。
- ・「全地を砕く鎚(つち)」([エレミヤ 50 章 23 節](#))
- ・「国々を打つ棒と杖」([イザヤ 14 章 5-6 節](#))。

- ・神の命令で「国々を打ち砕く戦いの鎚(つち)」([エレミヤ 51 章 20-21 節](#); [黙示録 17 章 17 節](#)参照)。
- ・「全地の人の、ほめたたえられたもの」([エレミヤ 51 章 41 節](#))。
- ・多様な移住民を引き寄せる者([イザヤ 13 章 14 節](#))。

上記の聖句から、謎のバビロンの政治的優位性、軍事的支配、攻撃的な帝国主義がよくわかります(参照:ニネベ:[ナホム 3 章 2-3 節](#), [3 章 19 節](#))。将来、地球上のどの国も、彼女のような存在にはなることはないでしょう。反キリストが世界征服のために、まずバビロンを指揮し、次にバビロンの支配を通して支配権を得た十王国からなる復活したローマ帝国にすぐに旗を移すとき、「力の均衡」は問題視されなくなります。バビロンの軍事力のある特定の側面については、別に考察することが重要です。なぜなら、それはバビロンが将来の終末の権力者であることを明確に示しているからです。過去のバビロンは、どこから見ても、ほとんど陸上の軍隊に頼る内陸の帝国でしたが、艱難期の謎のバビロンは海洋国家として描写されており([イザヤ 21 章 1 節](#); [エレミヤ 51 章 13 節](#); [黙示録 18 章](#) 参照)、前例のない強さの海洋国家となることが予想されます。なぜなら、反キリストはこのような軍事力の行使によって、最終的に南部同盟を打ち負かし、世界支配に対する最後の大きな障害を取り除くからです([ダニエル 11 章 30 節](#), [11 章 40 節](#); [民数記 24 章 24 節](#)参照; ツロ-バビロンの例えを参照。[イザヤ 23 章 4 節](#); [ゼカリヤ 9 章 2-4 節](#)参照)。バビロンが行った攻撃的で強欲な帝国主義的商業は、その保護、育成、執行に比類ない海軍を必要とするのは理にかなっていることです。

e) 前例のない邪悪さ: 世界史上のどの国よりも、謎のバビロンは、邪悪さを特徴とするぜいたく品に溺れるでしょう。普通なら受け入れられるか、少なくともそれ自体には罪がない快樂でさえも、彼女が味わうものの異常なまでの過剰さと不正に得た出所のために、罪深いものになってしまうのです。反キリストの経済的搾取の邪悪なシステムは、黙示録 6 章の第三の封印である「黒い馬」(本シリーズの第二部 B、IV.3 を参照)の解説で部分的に取り上げました。また後でさらに詳細に取り上げることになります(以下の II.3 参照; [ダニエル 11 章 24 節](#), [11 章 39 節](#))。この搾取システムは、反キリストの政治運動(この運動は、政治、経済、宗教が分かちがたく融合したものです)を特徴づける偶像崇拜と魔術の一部であり、これは、バビロンで始まり、彼が神の神殿の座に座って自らを神であると宣言し、全世界に崇拝を強要するときに頂点に達することになります([ダニエル 8 章 11 節](#); [第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [黙示録 13 章 11-18 節](#); [ダニエル 11 章 31 節](#); [12 章 11 節](#); [マタイ 24 章 15 節](#); [マルコ 13 章 14 節](#))。謎のバビロンの本質的な悪は、聖書のもう一つの顕著なテーマで、特に他人を犠牲にして贅沢をすることに関連しています。彼女は淫乱で、安心しきってくつろぎ([イザヤ 47 章 8 節](#))、騒々しい酒宴で声を上げ([エレミヤ 51 章 55 節](#); [イザヤ 14 章 11 節](#)も参照)、自らの邪悪さに頼り、神を認めることをしない、淫らな者で([イザヤ 47 章 10 節](#))、奢り(おごり)高ぶり([イザヤ 47 章 1 節](#))、傲慢で([エレミヤ 50 章 32 節](#))、強欲で([ハバクク 2 章 5 節](#))、強奪、盗みをし、不当な利得([ハバクク 2 章 6-9 節](#))の罪を犯しています。ニネベのように、彼女は「虚偽の町」です([ナホム 3 章 1 節](#))。

霊的には、謎のバビロンは「海辺の砂漠」([イザヤ 21 章 1 節](#))であり、「偶像の地」([エレミヤ 50 章 38 節](#));



[ナホム 3 章 4 節](#)参照)です。そして、周知のように、強欲と貪欲は偶像崇拜の顕著な形態です([コロサイ 3 章 5 節](#); [ガラテヤ 5 章 17-21 節](#); [エペソ 5 章 5 節](#)を参照)。バビロンは、唯一の真の神を第一に考える代わりに、お金、快樂、名声、権力、所有物、すべての貪欲の対象を「崇拜」しているのです。この偶像崇拜的な考え方の土台が、艱難期の後半に反キリストの偶像崇拜的な宗教へと開花するのは、全く自然な成り行きでしょう。この地の住民は、「自分の力を神とする罪深い者たち」([ハバクク 1 章 11 節](#))であり、他者を搾取して贅沢をするために「引き網」に犠牲を捧げる者たちです([ハバクク 1 章 16-17 節](#))。バビロンの冒流的な物質的偶像崇拜の重要な側面の一つは、魔術や妖術などの蔓延です([イザヤ 47 章 9-15 節](#); [ナホム 3 章 4 節](#); [黙示録 18 章 23 節](#); [イザヤ 13 章 17 節](#)を参照)。これは、通常の意味のオカルトだけでなく、バビロンが今日の私たちに感銘を与えるようなテクノロジーという「魔術」に依存していることも意味していると考えべきでしょう。確かにテクノロジーは完全に物質的なものであり、理論上良くも悪くありません。しかし、バビロンは、霊的な領域から物質的なものすべてを完全に支配する神の力に依存するのではなく、テクノロジーに依存し、物質的な領域を操る人間の「秘密の知恵」の力に依存するようになります。「バビロンの知恵者と魔術師」が常に王の顧問であったように([出エジプト記 7 章 11-13 節](#); [第二テモテ 3 章 1-9 節](#))、魔術とテクノロジーは、悪魔の力によって、将来の謎のバビロンで同じような魔女の混ぜ物の酒を作らざるを得ないでしょう。世界の商業的、軍事的大国であることに加えて、バビロンは、そのテクノロジーの強さで国々を凌駕し、それを誇りとするようになります。

f) 抗い(あらがい)がたい文化的影響力: 謎のバビロンは、それ自体が救いようのない悪であるだけでなく、これまでどの国家や帝国もしなかったような悪の世界的な伝播に貢献します。その影響力の大きさから、国々は「彼女のもとに流れ込む」と言われています([エレミヤ 51 章 44 節](#))。これは、[黙示録 17 章 1 節](#)で「多くの水の上に座っている」と言われている意味の重要な部分です。この水は、後に[黙示録 17 章 15 節](#)で「民衆、群衆、国、言語」を意味すると解釈されています。言い換えれば、ミステリーバビロンの文化的影響は、世界中の社会のあらゆる層に前例のないほど影響を及ぼすということです。これは、バビロンが全世界に飲ませ、その結果、国々は「気がふれる」([エレミヤ 51 章 7 節](#); [黙示録 17 章 2 節](#)参照)「金の杯」であり、「忌まわしいもの、不品行の汚物」([黙示録 17 章 4 節](#))で満たされた同じ杯のことなのです。しかし、全世界のあらゆる悪の供給者としての謎のバビロンの役割に関する重要なテーマは、売春です。なぜなら彼女は「大淫婦」([黙示録 17 章 1 節](#), [17 章 5 節](#), [17 章 15-16 節](#), [19 章 2 節](#)参照。[イザヤ 23 章 15-17 節](#); [ナホム 3 章 4 節](#)も参照)であり、「淫婦どもの母」([黙示録 17 章 5 節](#))だからであり、「地の王たちが姦淫した」([黙示録 17 章 2 節](#)前半, [18 章 3 節](#); [18 章 9 節](#))ので、信仰のない地の住民はすべて「彼女の姦淫のぶどう酒に酔う」([黙示録 17 章 2 節](#)後半, [ハバクク 2 章 15-16 節](#)参照)ようになるのです。

これは非常に分かりやすい例えで(生々しいのは言うまでもありません)、私たちにとって謎のバビロンの行動を特徴づけるのに大いに役立っています。箴言の姦婦のように、彼女の家への道は破滅に通じています(箴言 5 章、7 章)。ですから、彼女のすべてが美しく魅力的であるように見えるのは、まったく驚くべきことではありません。そうでなければ、彼女は獲物を釣り上げることに成功しないでしょう。しかし、彼女の美しさは、その挑発的な演出によって、また他方では、その犠牲者の飲ませる「狂気のぶどう酒」によって引き立てられますが、それは見かけだけのものです([マタイ 23 章 27-28 節](#)参照)。指導者レベル(「地の王たち」:[黙示録 17 章 2 節](#)前半)と文化レベル(「地の住民」:[黙示録 17 章 2 節](#)後半)の両方において、謎のバビロンは(反キリストの新しい運動という形で:以下の II.3 節参照)非常に魅力的なメッセージを提供することになるでしょう。このメッセージは、酔わせるように見えますが、実際には、極めて致命的なものです(彼女

の姦淫の「まどろむぶどう酒」)。それは刺激的ですが、真に健全なものではありません(正当な関係のない売春の「セックス」)。外見は極端に魅力的ですが、内面は死者の骨で埋め尽くされています。したがって、比喩的にも文字通りの意味でも、一種の妖しい魔術です([ナホム 3 章 4 節](#); [第二テサロニケ 2 章 9-12 節](#); [黙示録 13 章 11-17 節](#) を参照)。要するに、謎のバビロンは、反キリストの密売人となって、彼が世界中に支配を拡大するために必要な手助けをすることなのです。バビロンの短期的な報酬は、上に述べたような計り知れない富であり、黙示録 17 章に描かれている娼婦のような豪華な装飾品でしょう。しかし、最後には、神が獣とその十人の王の心にそうさせるとき、バビロンとその所有物は、反キリスト自身の手で破壊されることとなります([黙示録 17 章 17 節](#))。

6) 将来の「謎のバビロン」の正体: ここでまず注意しなければならないのは、謎のバビロンはまだそれ自体存在していないということです。つまり、艱難期が始まって、反キリストの不法の計画を阻止する聖霊の働きが絶えるようになるまでは、バビロンとなる運命にあるその国も、実際にはまだバビロンではないのです。このことは、決して小さなことではありません。なぜなら、神の阻止する働きの終わりと、それに続く世界に起こる恐ろしい結果(その多くは、このシリーズですでに検証しました)は、国家と個人の両方に、多くの変化を引き起こすからです。大背教の間、衝撃的な数の信者が墮落していくでしょう。彼らは、実際に背教する前に、私たちからあらゆる配慮を受けるべきです。というのは、今、特定の個人の周りに霊的な危険が集まっていることを私たちがどれほど確信していても、そのトラブルの時が来る前に多くのことが起こり得るからです。謎のバビロンの場合も同様で、現在のどの国が将来そのような役割を果たすことになるかいくら明らかであっても、現在の動向と将来の現実とを区別することに注意し、神にとって不可能なことはないことを忘れてはなりません。このことを念頭に置いて、ここでは、将来起こりうる謎のバビロンについて、次のように特定します。

復活するローマは、聖書で言う北に位置するヨーロッパを中心とし、艱難期前半にエジプトを中心とする南部同盟と戦いますが(下記参照)、「東の王たち」はハルマゲドン([黙示録 16 章 12 節](#))まで艱難期の軍事活動に直接関与することはありません。このように、聖書にある地球の四つの象限<エルサレムを中心に、東西南北の四つの領域>のうち三つは、当時の預言の歴史に説明されているので、バビロンの位置として明らかに除外されます<sup>35</sup>。一旦、西半球に推定し、艱難期が始まるであろう時刻表が正しいと仮定すると、第七の封印が解かれた後、謎のバビロンの役割を果たす国が現在のアメリカであると特定するには、解釈の飛躍を必要としません<sup>36</sup>。

この議論の最初に強調しておかなければならないのは、謎のバビロンには、アメリカ(あるいは過去や現在の他の国)にはまだなく、そして実際まだアメリカではあり得ない多くの特徴があるということです。謎のバビロンはまだ将来であり、そのため現在におけるその祖先にあたる国(ここの分析が正しければアメリカ)でさえ、上に述べた傾向がすでに明白である場合でさえ、その将来の行動に対して今は責任を問うことはできません。ざっくりと歴史的例えを用いるなら、1920 年代から 1930 年代初頭のワイマール・ドイツは、(こ

<sup>35</sup> 『[来たる艱難期](#)』の「[第 2 部 B: 艱難期の天の前奏曲](#)」IV.4b「[四騎士のまとめ](#)」聖書における地球の四つの四分の一の領域(リンク先のファイルでは、139 頁)を参照。

<sup>36</sup> 残るは西の四分の一(別名「島々」または「海沿いの国々」)のみ。

の旧共和国の崩壊前にすでにいくつかの不穏な傾向が見られたにもかかわらず)それを取って代わったナチス・ドイツとはほとんどの点で非常に異なるものでした。政権が変わり、本質的に邪悪な全体主義体制が導入されたことが、大きな違いをもたらしたのです。

上に列挙したバビロンの特徴の多くは、まだこの国には当てはまらず、どの国が謎のバビロンになろうと、現在の不法への阻止する聖霊の力が取り除かれて初めて、これらの特徴が完全に発現することは事実です(すなわち、「邪悪」のための「家」がまず準備されなければなりません:[ゼカリヤ5章5-11節](#)参照)。<sup>37</sup> それにもかかわらず、現時点で認識されている肯定的な霊的特徴が存在するため、あるいは上に挙げた否定的特徴のいくつかが完全に欠如しているため、米国が将来の謎のバビロンになることは事実上不可能であると考えるのは、この国を本当に愛しているすべてのクリスチャンにとって愚かなこと(あるいは少なくとも非常に危険な希望的観測)であると言えるでしょう。反キリストにとって、善意の個人を自分の包括的な政治運動に参加させることほど重要なことはほとんどないでしょうし、魅惑的な大衆運動に内在する危険性を理解することができない人々が、無防備な状態に陥られるのは、今回が初めてではありません。この現象は、20世紀の歴史を学ぶ者にとっては十分に馴染み深いものですが、艱難期において反キリストが無制限の悪魔の力を利用できるようになることは、共産主義とナチズムの場合では、存在していなかったことです。(本シリーズの前編3Aで学んだように)艱難期前半の大背教の期間に、主から離れるクリスチャンの数がかつてないほど多いことを考えると、この国の多くの信者の心を蝕むのは、まさにこの<真理を>拒む霊に他ならないでしょう。したがって、神の言葉を学ぶ者として、私たちは、たとえそれが何らかの理由で自分たちが不快に思うような結論に導かれるときでも(そしておそらく特に)、聖書の真理が導くところに従う義務があります。私たちはこの特別な杯が過ぎ去ることを願い、祈ります。しかし、どんな代償を払っても、聖書の事実に直面することを厭わないようにしなければなりません。もし、神か国かの選択に迫られたら、救いの道はどこにあるのか、疑う余地はありません。

大いなる謎のバビロンは、「淫婦どもらの母、地の忌まわしいものの母」と言われています。これは、バビロンが、宗教、経済、政治、社会の分野で、主にとって不快感を与えるものの主要な源であることを示すので、特定するのに重要で明白な描写です。以下に述べるように、反キリストの世界支配のシステムは、上記に挙げた様々なカテゴリーのすべてに全くの邪悪さを注入します(例えば、バビロンは、彼の万教一致主義の宗教、経済支配、軍事征服、邪悪な社会工学の発射台となるのです)。反キリストが権力を握った時点から明らかになり始める物事のうち、今日存在しているものは、ごく限られた点でしかないと言えるでしょう。さまざまな宗派の影響が明らかであるにもかかわらず米国は現在、世界に単一の宗教体系を押し付けているわけではありませんが、反キリストのバビロンはそうします。唯一の真の超大国としての政治的力にもかかわらず、米国は現在、世界の他の国々を帝國的支配体制に従属させてはいませんが、反キリストのバビロンはそうするでしょう。米国は世界の社会を特権階級のために再編成していませんが、まさにそれを反キリストは自分のコントロールを増大するために行うのです。バビロンの文化的影響力の分野でも、米国から発信される文化的性質のほとんどすべてを貫く道徳の退廃は、謎のバビロンの墮落した性質と一致すると言えるかもしれませんが、対抗する勢力も働いています。一方、反キリストのバビロンでは、彼の政策と基準に反対する声はすべて(神の介入は別として)最終的に沈黙させられるでしょう。この比較と暫定的な識

---

<sup>37</sup> 聖霊の阻止する働きが取り除かれることについては、この[シリーズの第二部 B.III](#)(リンク先の110頁)を参照。



別において重要なのは、現在の現実や現在の傾向というよりも、むしろ将来起こり得る潜在的な負の側面です。この国に対する最も辛辣で激しい批判者だけが、米国が上に挙げたバビロンのすべての特徴に反論の余地なく見えると言うことでしょう。しかし、地政学的な現状では、この国はバビロンになり得る力と可能性を持った唯一の国なのです。現時点では、米国はいわば「弾を込められた銃」に過ぎませんが、反キリストが権力を握れば、悪人の手に落ちた無比の武器のようなものになるのです。これは20世紀初頭から半ばにかけての全体主義体制に匹敵し、かつそれよりも桁違いに強力で、しかもライバルもない(反キリストが十王帝国である復活ローマを支配した後の世界にとって、この状況はさらに悪化する)状態になるでしょう。

また、過去の功績によって、謎のバビロンが将来の不義から除外されるわけではありません。歴史上のバビロンも、悪の国々を倒すために神に用いられましたが、イスラエルを滅ぼしたために後に滅ぼされました(エレミヤ 51 章 24 節; 黙示録 17 章 6 節, 18 章 24 節, 19 章 2 節参照)。また、過去の霊性や霊的復興の時代が、将来の不義のための免罪符となるわけでもありません。アッシリアはヨナの説教で悔い改めましたが、その後の世代は頑なになりました(マタイ 12 章 41 節参照; イザヤ 10 章 7-19 節)<sup>38</sup>。また、謎のバビロンが反キリストの命令に応答しただけであるとして、その責任から逃れることができるわけではありません。バビロンは「獣に乗り」(黙示録 17 章 1-3 節)ますが、バビロンから出る迫害に全責任があります(バビロンなしではありません。黙示録 16 章 6 節, 17 章 6 節, 18 章 24 節, 19 章 2 節)。

信者として、私たちは時を見分けるように求められています(ルカ 12 章 56 節)。謎のバビロンを識別するためには、上記のような傾向がどのように進展していくかを観察することが必要です。この動向の鍵は、道徳的な規範の問題です。ゼカリヤ 5 章 5-11 節は、謎のバビロンが艱難期の不法地帯の出発点となること、そして、この前例のない「邪悪」を入れた籠<口語訳聖書では「エパ枿」>がバビロンで落とされる前に準備段階があることを示唆しています。現在(すなわち、聖霊の阻止する力が取り除かれる前に)、行われているあらゆることの中で、反キリストにとっての最高のチャンスとなるのは、国民全体の道徳観の退廃です:

卑しい事が人の子のなかにあがめられている時、悪しき者はいたる所でほしいままに歩いています。(詩篇 12 篇 8 節)

実際、この道徳的、社会的、文化的な領域で、邪悪な者とその手先である人間や天使によって、謎のバビロンの発展のための基礎が最も熱心に築かれていることがわかります。最近、この国が受けた攻撃で、私たちの集団的な墮落がこれらの出来事と関係があるかもしれないという意見をあえて表明する人はほとんどおらず、表明した人は即座に非難され、すぐに沈黙しました(イザヤ 22 章 5-14 節参照)。

(3)ふたりの者がもし約束しなかったなら、一緒に歩くだらうか。(4)ししがもし獲物がなかったなら、林の中でほえるだらうか。若いししがもし物をつかまなかったなら、その穴から声を出すだらうか。(5)もしわながなかったなら、鳥は地に張った網にかかるだらうか。網にもし何

---

<sup>38</sup> 古代イスラエルにおける多くのリバイバルの後、背教が起こったことを参照(例: 士師記 2 章 10-15 節)。アッシリアの滅亡がヨナによって始まったリバイバルの後起こったことは、この教会の最後の時代、すなわち、ぬるま湯が頂点に達するラオディキアの時代に割り当てられた年数とほぼ同じであることは、十二分に興味深いことです。



もかからなかったなら、地からとびあがるだろうか。(6)町でラツパが鳴ったなら、民は驚かないだろうか。**主がなされるのでなければ、町に災が起るだろうか。**(アモス 3 章 3-6 節)

ますます不道徳になっていく環境の中で、このようななだめすかすような声しか上げられないことは、バビロンに侵攻される前のユダの状態を思い出さずにはられません。主のために真実の声を上げる者は迫害されました:

あなたの預言者たちはあなたのために人を欺く偽りの幻を見た。彼らはあなたの不義をあらわして捕われを免れさせようとはせず、あなたのために人を迷わす偽りの託宣を見た。(哀歌 2 章 14 節)

どんなに国を愛していても、国は人でできており、人は変わってしまいます。大背教のところで述べたように、艱難期の圧力は非常に強く、艱難期の半ばには、この国の住人で、忠実な信者でもなく、サタンに積極的に仕えていない者は、ほとんどいなくなるでしょう。このような状況下で、完全に悪魔の支配下におかれぬ唯一の国家はイスラエルです(ただし、そこでも後述するように複雑な様相を呈するでしょう)。ですから読者は艱難期の始まり以前の状態と始まった後の状態を区別する必要があります。なぜなら、すべての国とほぼすべての人においてその性質が、聖霊による不法を阻止する働きが取り除かれることによって変わり、地上における悪魔の活動が大規模に強化され、特に反キリスト(およびその政治、経済、社会、宗教システム)の台頭によって顕著に現れるからです。

最後にこの点で、米国のように謎のバビロンの必要な特性に見合う代替的な権力の中心が成長するには(未曾有の大災害がない限り)十分な時間が残っていないと思われるので、「ではなぜ去らないのか」と問うのは的外れなことではないでしょう。聖書は、確かに「バビロンから脱出」するのに適した時期があることを多くの示唆を与えていますが、それは艱難期の後半に訪れます(この点については、本シリーズの第 5 部で詳しく取り上げます)。逃げるべき正しい時期がある一方で、間違った時期もあります。艱難期の終わりには、反キリストが地球のほぼ全域をある程度支配することになるので、上記の質問に対する最初の答えは、明らかに「どこに逃げるか」です。このテーマについてここで詳しく説明することはできませんが、聖書には、大艱難期の迫害を引き起こす嵐の目のようなバビロンが、再臨の前に滅びるまで逃れ場となるという示唆があることだけは申し上げておきたいと思います。もしそうであれば、聖書を第一に考える信者たちは、大規模な出エジプトに直面しても留まり、危機が去ったように見える時に出発することになります(つまり、人間の目だけで判断すると、脱出の適切な時期も直感に反することになります:[第一テサロニケ 5 章 2-3 節](#)を参照してください)。

## 2. 反キリストの性格

反キリストの父方の出自、母方の出自、また出身国を確認した後、聖書が彼個人について述べていることを見てみましょう。[ダニエル 8 章 23-25 節](#)は、反キリストに捧げられたヘブル語の詩的な預言で、獣の人格の重要な特徴をいくつか含んでいます。

(23)彼らの国の終りの時(すなわち、艱難期)になり、罪びとの罪が満ちるに及んで[背教が確認されるとき]、ひとりの王(すなわち、反キリスト)が起るでしょう。その顔は猛悪で、彼はなぞを解き<策にたけた-新改訳IV>、(24)その勢力は盛んであって<新改訳IVの 24 節初めの訳は:「彼の力は強くなるが、自分の力によるのではない」>、恐ろしい破壊をなし、そのなすところ成功して、有力な人々(=信者)と、聖徒である民(=イスラエル)を滅ぼすでしょう。(25)彼は悪知恵をもって、偽りをその手におこない遂げ、みずから心に[大いに]高ぶり、不意に多くの人を打ち滅ぼし、また君の君たる者に敵するでしょう。しかし、ついに彼は人手によらずに滅ぼされるでしょう。(ダニエル 8 章 23-25 節)

・「彼らの国の終りの時」: ここでの内容は、一見すると反キリストについて述べていますが、それに加えて、この節が主に獣についての預言として意図されていることが、文脈上、数多く示されています。ダニエルにこの預言を説明するようという天の命令を受けた後、[ダニエル 8 章 17 節](#)で、ガブリエルはこの幻が「終わりの時」(これは明らかに艱難期を指しています: 同じヘブル語の表現が使われている[ダニエル 12 章 4 節](#)を参照)に関係していると宣言しています。この点は、2 節後の[ダニエル 8 章 19 節](#)でさらに強調され、ガブリエルはこの幻を「(神の)怒りの後の時」(すなわち、艱難期、[黙示録 15 章 1 節](#)参照)であると言い、「(これらはすべて)定められた終わりの時」(すなわち、艱難時代)であると言っています。最後に、この天使のメッセージの終わりに、ダニエルは「この幻を封印しなさい、それは何日も先(つまり遠い未来)のことだから」と言われます。[ダニエル 8 章 26 節](#)後半。

・「罪びとの罪が満ちるに及んで[背教が確認されるとき]」: このシリーズの前の回で説明したように、これは大背教のことで、艱難期前半にピークに達する出来事です。

・「ひとりの王が起るでしょう。その顔は猛悪で、」: これは、大艱難期の始まりに、反キリスト(上記で見たように、アンティコス・エピファネスは、広い意味での当時の予型であり、対型です)が現れることを指しています。ヘブル語の「アズ・パニム」(「厳しい顔」)は、反キリストの比類なき凶々しさと大胆さを指しています([申命記 28 章 50 節](#); [箴言 7 章 13 節](#), [21 章 29 節](#)参照)。彼は、恥も外聞もなく、完全な決意と説得力をもって、その驚くべき嘘を宣言するのです。獣は、自分が犯した途方もない悪事を、赤面もせず、簡単に正当化します。

・「策にたけた」 獣は、完璧な役者であり、熟練した謀略家です。ヘブル語の “mebiyn chidoth” は文字通り「なぞを解く」という意味で、悪魔の力を受けた邪悪な知性を非常に巧妙に悪用します([ダニエル 11 章 27 節](#)参照)。

・「彼の力は強くなるが、自分の力によるのではない」<新改訳IVの 24 節初め>: 反キリストは悪魔によって産み出されるだけでなく、彼はそのすべての事業において邪悪な者によって力を与えられるのです([第二テサロニケ 2 章 9-10 節](#)参照)。

・「恐ろしい破壊[活動]をなし、そのなすところ成功して」: 獣が不信心者と背教者の両方を欺き、自分の目的に引き入れることに成功するのは、艱難期の前半を通して急速に進み、三年半の「大艱難期」の始まりに反キリストが完全に「現われる」際に、世界規模の洪水にまで進展します([黙示録 13 章 1-8](#)

節参照)。

・「有力な人々(=信者)と、聖徒である民(=イスラエル)を滅ぼすでしょう。」:これは大背教の具体的な言及であり、その概要です。「有力な人々」とは私たちの主の「英雄たち」のことであり、反キリストに打ち破られるまで信仰の善戦をしている(あるいは、していた)、勝利した者です([第一テモテ 6 章 12 節](#); [イザヤ 53 章 12 節](#)に「強い者」と呼ばれる信者が究極的に報われることを参照)。「聖なる民」とは、ここでは特に、大背教の中で押し流されるイスラエルの民の中にいる者のことを指します。

・「彼は悪知恵をもって、偽りをその手におこない遂げ、」: 獣の動物的な狡猾さが、権力を握るため、自らが後押しする裏切りを促進しているのが伺えます(参照:[ダニエル 11 章 23 節](#) <口語訳で「偽り」と訳されている>「ミルマ」は「陰謀」と同じ意味です)。

・「みずから心に[大いに]高ぶり、」:反キリストの傲慢さは、人間の通常の抑制の範囲を超えるでしょう([第二テサロニケ 2 章 4 節](#)参照)。

・「不意に多くの人を打ち滅ぼし、」:特に獣の政治・宗教運動は、信奉者の夢や願望を実現するために、誘惑的なほど容易な道を提供します(信奉者の良心や道德観が損なわれます)。

・「また君の君たる者に敵するでしょう。しかし、ついに彼は人手によらずに滅ぼされるでしょう。」:反キリストはその傲慢さゆえに、(ハルマゲドンで)キリストに対抗できるとさえ考えるでしょう。しかし、獣がすることは、悪魔の力によってできるだけで、最後には神の力によって滅ぼされます。

a. 獣の象徴するもの:

わたしの見たこの獣はひょうに似ており、その足はくまの足のようで、その口はししの口のようであった。(黙示録 13 章 2 節前半)

この箇所は、ダニエルの四つの獣の姿をモデルとしているだけでなく、「他の獣とは異なる」四番目の獣をさらに明確に描写しているものです([ダニエル 7 章 7 節](#), [7 章 19 節](#), [7 章 23-24 節](#))。ダニエル書の幻では、第一の獣は獅子、第二の獣は熊、第三の獣は豹に似ています。上記の黙示録第 13 章に描かれている獣は、これら三つの獣の属性を備えており、このことは、恐ろしい第四の獣の全体的な外観の詳細が示されていないダニエルの幻と矛盾してはいません。したがって、ダニエルの第四の獣と黙示録の獣は同じものであり、両者の間、及びその象徴するものに矛盾はありません。黙示録の第 13 章(および第 17 章で詳しく説明されている)に書かれている詳細は、このシリーズの後の章で取り上げる際に説明することにして、割愛します。ここでは、獣の性格に関連する象徴的な側面についてのみ考察する必要があります。反キリストの足は熊の足のようで、口はライオンの口のようですが、反キリスト自身は豹に最もよく似ています(このことはギリシャ語ではさらに明確で、比較級 *homoion* ホモイオンが、彼の足と口をそれぞれ熊とライオンと比較するのに使われる(言葉)よりもより近い類似性を示しています:[黙示録 1 章 13 節](#)を参照のこと<この節の「*homoios*~のような」と訳されている言葉。ちなみに「熊の足のよう」「ししの口のよう」の「のよう」は *hos* が使われています>)。ダニエル 7 章に登場する豹は、アレキサンダーとその帝国を表します。反キ

リストとその王国は、ネブカドネザルとそのバビロニア帝国のライオンのような「噛みつき」とクロス王とそのペルシャ帝国の熊のような引き裂く力を持つ一方、獣とその王国が最もよく似ているのはアレキサンダーとその帝国なのです。

[ダニエル 7 章 6 節](#)に登場する豹には四つの翼があるとされており、この豹は特に素早いのです([ハバクク 1 章 8 節](#)を参照)。迅速さは、反キリストのすべての活動(と彼の王国と政治・宗教運動の活動)を特徴づけるでしょう。反キリストの台頭と征服の速さは、世界を圧倒し、反キリストの敵を脅かすでしょう。その獣の他の性格的特徴は、聖書の豹についての描写によると、狡猾([エレミヤ 5 章 6 節](#); [ホセア 13 章 7 節](#)参照)で、凶暴([イザヤ 11 章 6 節](#)参照)、単独行動をする([雅歌 4 章 8 節](#)参照)ことが導き出されます。このような観点から見ると、反キリストは恐ろしく、決断力に富み、危険で、暴力的で、裏切り者で、狡猾な人物であり、猫のように落ち着きがなく、邪悪な計画を進めようとする人物であると言えるでしょう。([ハバクク 2 章 5 節](#)を参照)。これらの特徴は、アレキサンダーだけでなく、カエサル、ナポレオン、ヒトラーのような世界征服を欲した指揮官を思い出させますが、ここで強調しなければならないのは、(それらのはなはだしい連中と比較しても)反キリストはこうした特徴と能力を他に類を見ないほど発揮するということです。豹の最後の特徴として見逃せないのは、その類まれな魅惑的美しさです([エレミヤ 13 章 23 節](#)参照)。獣は、その性格の威圧的な側面と、まばゆいばかりの外見(肉体的な美しさだけでなく、魅力的な性格、カリスマ性、存在感)の両方を兼ね備えるでしょう。これらの要素は、反キリストが世界の大多数の住民を誘惑する際に少なからず影響を与えることでしょう。

b. 反キリストの特徴: 先に述べた象徴から得られるもののほかに、反キリストの性格を直接的に描写している聖句が数多くあり、上記の描写を補強し、拡大しています。いくつかの重要な箇所は、その重要なポイントを説明するのに役立ちます。

(4)見よ、その魂の正しくない[傲慢な]者(すなわち、反キリスト)は衰える<英直訳:[傲慢で]膨れ上がっている>。しかし義人はその信仰によって生きる。(5)また、酒は欺くものだ[彼はどれほど欺くことだろう]。高ぶる者[である彼]は定まりがない。彼の欲は陰府のように広い。彼は死のようであって、飽くことなく、万国をおのれに集め、万民をおのれのものとしてつどわせる」。([ハバクク 2 章 4-5 節](#))

ここで明らかな獣の特徴は、非常に傲慢であることです([イザヤ 14 章 11-14 節](#); [ダニエル 7 章 8 節](#), [7 章 11 節](#), [7 章 20 節](#), [7 章 25 節](#); [第二テサロニケ 2 章 4 節](#))、個人的な出世、獲得、征服、搾取に対して貪欲で落ち着きのない野性的な性質([イザヤ 14 章 8 節](#); [ハバクク 2 章 17 節](#); [黙示録 6 章 7-8 節](#)前半, [11 章 18 節](#)参照)、そしてその並外れた欺き([ダニエル 8 章 23-25 節](#), [11 章 21 節](#), [11 章 23 節](#), [11 章 27 節](#); [ハバクク 2 章 2-20 節](#)) が挙げられます。ハバククが歴史上のバビロンに焦点を当てたのは事実ですが([1 章 5-11 節](#)参照)、<歴史上の>バビロンが来たるべき謎のバビロンを預言するために用いられ、第 2 章冒頭で終末に関する預言に移行したという文脈上のしるしがあります([ハバクク 2 章 3 節](#)前半:「この幻は定められた時に起こり、**終わり**[すなわち、終わりの時]を指すものである」)、[ハバクク 2 章 4 節](#)で歴史上のバビロン人を指していた「彼ら」が「彼」に突然変わっていることなどは、この節が反キリストに適用することを決定的に指摘しています(<その前に記述されている歴史上のバビロンと>[ハバクク 2 章 4-19 節](#)の内容は全く別です)。



わたしが、その[十の]角を注意して見ていると、その中に、また一つの小さい角が出てきたが、この小さい角のために、さきの角のうち三つがその根から抜け落ちた。見よ、この小さい角には、人の目のような目があり、また大きな事を語る口があった(すなわち、神に逆らっていた)。(ダニエル 7 章 8 節)

ここで示唆されているように、神ご自身を冒瀆するような傲慢な自慢話は、反キリストの行動のより顕著な特徴の一つです(黙示録 13 章 5-6 節参照:[ダニエル 7 章 11 節](#), [7 章 20 節](#), [7 章 25 節](#); [黙示録 13 章 1 節](#), [17 章 3 節](#)も参照)。この過度の傲慢と自慢は確かにその時代の精神に通じるものとなるでしょう(参照:[第一テモテ 4 章 1-2 節](#); [第二テモテ 3 章 1-9 節](#); [第二ペテロ 2 章 1-22 節](#), [3 章 3-7 節](#); [ユダ 1 章 3-16 節](#)参照)、反キリストの場合、彼の冒瀆の程度と恐ろしい性質は、獣が神の仮面をかぶって振る舞う、神を冒瀆することの一環であり、その一部ともなり、前例のないものになるでしょう([ダニエル 11 章 36 節](#); [第二テサロニケ 2 章 4 節](#))。

彼に代って起る者は、卑しむべき者であって、彼には、[通常の方法による]王の尊厳が与えられず、彼は不意にきて[権力を獲得し]、巧言をもって国を獲るでしょう。(ダニエル 11 章 21 節)

ヘブル語のニファル分詞<受動、つまり「～される」を意味するヘブル語の文法の分詞>は、上記の(「卑しむべき者」と訳された<英文は「a man of contempt(卑しい者)」>)バザ(בוזה)のように、時に形容詞に近い意味を持ちます(ニブゼ nibhzeh<「バザ」のニファル受動態>の訳語として、欽定訳では「卑劣な人」、NASB では「卑しい人」、NIV では「軽蔑すべき人」となっています)。しかし、ニファル分詞は時に中動態の意味を持ち、この場合、(悲しいことに、大方はそうされることが当てはまるのに)反キリストが軽蔑されたり、軽蔑の対象となるのではなく、また、神の観点から見て、反感と軽蔑以外の何物でもない(これは確かに真実なのですが)というのでもなく、むしろ本当に尊敬に値するすべてのものを軽蔑するという彼の態度がその最も顕著な特徴の一つとなることを意味しています。<sup>39</sup> この呼称は、間違いなく、反キリストとキリストを意図的に対比させたものです。キリストは、[イザヤ書 53 章 3 節](#)で「軽蔑される」という全く同じ分詞形で描写されています(その文脈では真の受動的な意味が、より適しています)。私たちの主は、私たちのためにご自分を犠牲にして人生を捧げられましたが、反キリストは、神の憐れみのあらゆる側面を徹底的に軽蔑し、自分のことしか考えません。次の[ダニエル 11 章 22 節](#)では、反キリストは「契約の君」とも呼ばれ、イスラエルとの艱難期の条約を結ぶ者とされています([ダニエル 9 章 25-27 節](#))。私たちの主イエス・キリスト御自身が、イスラエルとすべての信じる人類が永遠の命を得ることになった真の命の「契約」です([イザヤ 42 章 6 節](#), [49 章 8 節](#)参照; [マタイ 26 章 28 節](#); [ルカ 22 章 20 節](#); [ヘブル 7 章 22 節](#), [8 章 6 節](#), [9 章 15 節](#), [12 章 24 節](#), [13 章 20 節](#))。一方、獣は、この「契約」を通してイスラエルの救い主として登場しますが、神の真の「聖なる契約」を軽蔑するだけでなく([ダニエル 11 章 28 節](#), [11 章 30 節](#), [11 章 32 節](#))、自分がこの世と結んだ契約さえ軽蔑し、「週の半ば」にこれを破棄するのです([ダニエル 9 章 27 節](#))。このように、反キリストは(自分のと神の)「契約を軽んじる」者、「ニブゼ・ベリイト nibzeh beriyth」(ברית בוזה)ですから、ここでそ

<sup>39</sup> sha'al(「請う」「願う」の意)のニファル<受動>形、nish'alは[ネヘミヤ 13 章 6 節](#)で「自分のために頼む」という意味。

のヘブル語の数詞体系に言及する価値があるでしょう。〈ゲマトリアで〉その数を加算すると666になるのです<sup>40</sup>。「ニブゼ・ベリイث nibzeh beriyth」自体は[ダニエル 11 章 22 節](#)の「ナギジ・ベリイث」、「契約の君」に掛けた言葉です。

c. 反キリストの政策から読み取れること：最後に引用した[ダニエル 11 章 21 節](#)の後半は、反キリストの政治のやり口の本質を明らかにし、そのやり口の中に、彼の真の性格の一部を見ることができます。獣のあらゆる行動は、裏切りやそそのかしによって特徴づけられます。つまり、彼が言うことは何一つ真実ではなく、彼が約束することは何一つ信頼できず、彼の言動や約束はすべて、彼が接する人々の心の内にある欲望を引き出し、肯定し、認め、最大限に誘惑するように仕組まれています。結局のところ、その父である悪魔([ヨハネ 8 章 44 節](#)参照)のように、反キリストは自分以外の誰も、何も、真の意味で顧みることはないでしょう(ただし、これまでの世界の歴史の中の誰よりもうまく自分の嘘を「売り込む」能力は持っているでしょう)。獣の背信的で魅惑的な性質の根底にある自己中心的な性格は、そもそもバビロンの援助がなければ権力を握ることができなかったのに、そのバビロンを滅ぼすこと([イザヤ 14 章 20 節](#))、これらの戦争犯罪が引き起こす多くの苦しみにもかかわらず、人質を取って住民を大規模に移住させる手法で広範囲の収奪、悲惨、死を引き起こすものとなるにも関わらず行うこと([イザヤ 14 章 17 節](#)参照)、そして彼の残酷な経済政策と社会政策(このシリーズの第 2 部 B の最初の 4 つの封印の動向の下で議論)、最終的に彼と彼の最も信頼できる少数の人々だけが利益を受ける政策([ダニエル 11 章 39 節](#))などに見ることができます。

実際、反キリストが着手する法律、習慣、経済、宗教、社会構造の改変は、人類史上かつてなかったほど非道で、思い上がったものであり([ダニエル 11 章 24 節](#), [11 章 37 節](#))、聖書では反キリストを「不法の者」と特徴づけています([第二テサロニケ 2 章 3 節](#), [2 章 8 節](#), [2 章 9 節](#); [第二テサロニケ 2 章 7 節](#)を参照)。獣のこの特徴は、伝統や道徳や価値観がいかに有効であっても、それを完全に軽蔑することです。(その「時代」にふさわしい)神の法律と人間の伝統の両方によって設けられた障壁は、受け入れられている従来の規範を超えた行動を阻止するように設計されているものですが、獣が「時と法律を変えようとする」という預言からも、聖書が獣を「軽蔑する者」(上記参照:[ダニエル 11 章 21 節](#))であると見なしていることは、明らかです([ダニエル 7 章 25 節](#); [エステル 1 章 13 節](#); [ダニエル 2 章 21 節](#)を参照)。獣は文化的、国家的規範を蹂躪し、世界中の国や社会の内部社会構造を引き裂き、国際主義的に文章化されているもの、されていないものすべての基準を平準化しようとし、それが引き起こす苦しみ、不正、混乱を少しも気にかけるようなことはせず、自分の利益のために押し付けるでしょう([ダニエル 11 章 36 節](#))。

d. 反キリストのカリスマ性とサタンによる権力化：反キリストの悪魔的な父性については、すでに論じたとおりです。この点に関する重要な箇所([ダニエル 8 章 24 節](#); [ダニエル 11 章 39 節](#); [第二テサロニケ 2 章 3-10 節](#); [黙示録 13 章 1-18 節](#))は、反キリストの「行うすべてのことの成功」は直接悪魔の力、支持などに起因していることを明白に指摘しています([ダニエル 8 章 12 節](#)参照; [ダニエル 11 章 36 節](#)も参照)。

---

<sup>40</sup> だからといって、この事実が黙示録 13:18 で与えられている「ゲマトリア」の完全な解釈を提供すると言っているのではありません。666 の完全な解釈は、反キリストの名前の数値を計算して初めて可能になります(最初に確認する適切な名前がなければ事実上不可能です)。完全な議論については、このシリーズの第 4 部をご覧ください。

彼(反キリスト)の力は強くなるが、彼自身の力によるのではない。彼は、あきれ果てるような破壊を行い、事をなして成功し、有力者たちと聖徒の民を滅ぼす。(新改訳Ⅲ ダニエル 8 章 24 節)

彼(反キリスト)は外国の神(すなわち、悪魔)の助けによって、城壁のあるとりで(すなわち、軍事力と経済力のある国々;[エゼキエル 31 章 11 節](#);[ヨハネ 12 章 31 節](#);[第二コリント 4 章 4 節](#)参照)を取り、彼が認める者には、栄誉を増し加え、多くのものを治めさせ、代価として国土を分け与える。(新改訳Ⅲダニエル 11 章 39 節)

(9)不法の人の到来[反キリストの出現]は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、(10)また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行われます…(新改訳Ⅲ第二テサロニケ 2 章 9-10 節前半)

龍(すなわち、サタン)は自分の力と位と大いなる権威とを、この獣に与えた。(黙示録 13 章 2 節)([黙示録 13 章 4 節](#);[13 章 14-15 節](#)も参照)

反キリストが享受する大衆からの好意は、一部は彼の魅惑的な手口から、一部は彼が最も献身的な信奉者に与える報酬から([ダニエル 11 章 39 節](#))、一部は不信心な世界に感銘を与える彼の行為から来ます(特に彼の明白な蘇生:[黙示録 13 章 3-4 節](#)を参照のこと)。しかし、反キリストはまた、並外れたカリスマ性を持つ「大物」人物であることは間違いありません([ダニエル 7 章 20 節](#)後半;[黙示録 17 章 8 節](#);[第二テサロニケ 2 章 10 節](#)を参照)。

(3)その[獣の]頭の一つが、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった[ように見えた]。そこで、全地の人々は**驚きおそれて**、その獣に従い、(4)また、**龍がその権威を獣に与えたので**、人々は龍を拝み、さらに、**その獣を拝んで**言った、「だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか」。(黙示録 13 章 3-4 節)

獣は、「神の子」が人間の女性と同棲してネピリムを生み出した大洪水以前から、地上では見られないほどの個人的な魅力を示すことでしよう([創世記 6 章 1-4 節](#);[第二ペテロ 2 章 4-5 節](#);[ユダ 1 章 6-7 節](#))。41 さらに、反キリストの魅力がネピリムの祖先たちの魅力に匹敵し、さらに優れてさえいることは、彼が、ただの一般階級の悪霊どもの子孫ということではなく、闇に落ちる前には最も輝かしい光の天使であった「覆うケルブ」、ルシファーの息子であるとすれば、全く理解できることです([エゼキエル 28 章 12-17 節](#);[イザヤ 14 章 12 節](#);[第二コリント 11 章 14 節](#)参照)。

さらに、(彼自身や彼のために行われた偽りのしるしや奇跡に加えて:[マタイ 24 章 24 節](#);[第二テサロニケ 2 章 9 節](#);[黙示録 13 章 14-15 節](#);[16 章 14 節](#);[19 章 20 節](#)を参照)反キリストの能力、惹き付ける力、

---

41 「サタンの反乱」第5部:「裁き、回復、置き替え」Ⅲ.1 節、「人間の血統の純潔に対するサタンの洪水前の攻撃(ネフィリム)」参照

成功は、聖書に弱い人や全く知らない人にとっては、真のメシアであるという彼の主張を裏付ける確かな証拠に思えるでしょう。また、彼に反対するすべての人を厳しく扱うことは、彼に対する世界の称賛を高める以外の何ものでもありません(過去の多くの残酷な独裁者が彼らの信奉者の目から得た称賛と、人々が厳しく統治する人を称賛する傾向があるという現象を比較してください:[第二コリント 11 章 20 節](#)を参照)。ですから、反キリストに対する神の評価は厳しく批判的ですが、だからといって、少なくとも最初は(あるいは、彼の最も忠実な支持者の目には)、彼が世間からそのように否定的に見られるとは全く限りません。なぜなら、もし可能なら、「選民さえも」彼に欺かれるでしょうから、彼の魅力は強力で、その欺きは効果的です([マタイ 24 章 24 節](#))。ちょうどイスラエルの北王国の悪王たちが、神の正しい評価においてどのような存在であったかが聖書にはっきりと描かれているように、彼らは(偶像崇拜に加担した十部族が証明しているように)住民から支持を受けていた可能性が高いのです。反キリストは「主に対して悪巧みをし、よこしまなこと(ベリヤエル *beliya'al*)を計る者」([ナホム 1 章 11 節](#))なのです。

### 3. 反キリストの台頭

ダニエル書 11 章は、艱難期前半の軍事的、政治的出来事に関する最も詳細な資料であり、それらの出来事をほぼ年代順に網羅しているため、この研究の残りの部分は、これに大きく依存します<sup>42</sup>。11 章には、特に、反キリストが彼の母国において権力者になったこと、その後復活したローマ帝国の占領、南部同盟の征服、イスラエルの抑圧、支配方法の多くの詳細が記述されています。したがって、この章の主要な目的と内容の大部分が反キリストに焦点を合わせていることをここで指摘しておかなければなりません。

この重要な章の解釈者の中でしばしば見落とされるのは、ダニエル書第十章が第十一章のための「準備設定」であり、導入部であるため、その預言的な章が最初から直接終末に適用されることについて読者の注意を向けさせているということです。

ペルシャの王クロスの第三年に、ベルテシャザルと名づけられたダニエルに、一つの言葉(すなわち 11 章)が啓示されたが、その言葉は真実であり、**大いなる戦い**(あるいは「戦争」;すなわち、艱難期そのものに関するもの:[マタイ 24 章 7 節](#); [黙示録 12 章 7 節](#); [19 章 11-21 節](#))を意味するものであった。彼はその言葉に心を留め、その幻を悟った。(ダニエル 10 章 1 節)

**末の日に、あなたの民に臨まんとする事を、あなたに悟らせるためにきたのです。この幻は、なおきたるべき[遠くの]日にかかわるものです。**(ダニエル 10 章 14 節)

これらの箇所を逆順に見ていくと、創世記 49 章のヤコブの預言のところで見たように<創世記 49 章 1 節は「後の日」いずれも同じヘブル語「アハリース *אחרית*(最後の/終わりの)」が使われています>、上記 2 番目の聖句の「末の日」は必ず終末を指す預言的表現です(この文脈でも上記の二番目の聖句の天使の発

---

<sup>42</sup> ダニエル書のヘブル語は、特に独特に省略され、簡潔であり、事前に詳細かつ具体的な解釈を理解していなければ、しばしば不明瞭なほどです(11 章ほどそれが顕著な箇所はありません)。



言が示しているとおりで)。つまり、ここで言われているのは、単なる未来ではなく、終末論的な未来(つまり、艱難期から始まる人類史の最終段階)を指しているのです：[イザヤ 2 章 2 節](#)；[エレミヤ 30 章 24 節](#)、[48 章 47 節](#)、[49 章 39 節](#)；[エゼキエル 38 章 16 節](#)；[ホセア 3 章 5 節](#)；[ミカ 4 章 1 節](#)；[ダニエル 8 章 19 節](#)の「憤りの終り」、また[エゼキエル 38 章 8 節](#)の「終りの年」参照<sup>43</sup>。

上に引用した最初の箇所「大いなる戦い」(あるいは「戦争」)という表現(ヘブル語でツァバ・グドール tsabh`a ghadhol, צבא גדול)は、もちろんどちらの世界大戦<第一次世界大戦、第二次世界大戦>をも指してはならず、(人間と天使の両方の)世界史の中で最大の軍事衝突の時期である艱難期そのものを指しているのです。反キリストの二重帝国(復活したローマを支配するバビロン)の偉大な「国家-王国」が、大規模な南の同盟の「国家」と「王国」と衝突し、史上最大の二つの連合の艱難期における戦いのときです([マタイ 24 章 7 節](#))。そのとき、サタンとその天使たちはミカエルとその天使たちとの「戦争」の末に地上に投げ落とされ([黙示録 12 章 7 節](#))、最後に反キリストとその軍勢は再臨される主イエス・キリストによって消滅させられます([黙示録 19 章 11-21 節](#))。11 章の前半は、アレキサンダーの征服とそれに続くセレウコス王の遠征([2-20 節](#))を扱っていますが、これらはすべて、まだ将来の艱難期と比べると、ダニエルの視点からは比較的近い出来事であり、この預言の主要な主旨と目的が、まだ来ていない反キリストの支配を説明することであることは明らかです。この長い序文の目的は、セレウコス朝の王の中で最も悪質で、上に見たように、反キリストの最も重要な代表的予型であるアンティオコス・エピファネスまで時間軸を下げることにあります。多くの解釈者は、ここでの予型論を理解せず、この章の反キリストへの適用は 36 節からであると主張してきました<sup>44</sup>。しかし、これらの注釈者ですら、36 節までに反キリストがすでに描写されており、この章の両方の箇所で登場する「王」が明らかに同一人物であることを一般的に認めています。21 節から 35 節までをアンティオコス・エピファネスに限定して、それが反キリストにも適用されることを見抜けなかったのは、全く残念な誤りです。21 節から 35 節までの内容が反キリストを決定的に指し示していることは別として(結局、彼は「契約の君」なのです；上記 II.2.b 節の[ダニエル 11 章 21 節](#)の議論を参照)、物語の流れは、この二つの「独立」したと思われる部分を一つの連続した全体として明確に結びつけています。この時点で、ダニエル書 11 章の後半の概略を説明しておくことは、この章を読み進めていく上で役に立つでしょう：

21 節：獣の経歴の概要その 1： 獣の台頭と謎のバビロンの掌握手段。

22 節：獣の経歴の概要その 2： ハルマゲドンへの動員およびハルマゲドンでの滅亡。反キリストが預言された「契約の君」であることの確認。

23 節：謎のバビロンを支配するための反キリストの手口が再び繰り返して述べられることによって、時系列に戻る<sup>45</sup>。

---

<sup>43</sup> 「来たる艱難期」第 1 部：序論 I.2.h 「[艱難期に関する]その他の箇所」参照。

<sup>44</sup> 反キリストの描写が 21 節から始まることを最も早く認識したのはジェローム Jerom のようです。

<sup>45</sup> 次の注を参照。

24 節:七つの王国(復活したローマ)の掌握; 権力の強化と南部同盟への攻撃準備。

25-28 節: 三国(南部同盟)に対する最初の作戦。

29-30 節前半: 南方に対する第二の作戦。

30 節後半-35 節: 反キリストの暗殺未遂、彼の蘇生が推定される、およびその結果としてのイスラエルへの迫害。

36-39 節: 大艱難期における反キリストの治世。

40-43 節: 大艱難期前半の南部同盟に対する反キリストの勝利が再び述べられている第二次作戦の詳細な説明<sup>46</sup>。

44 節: 第五の鉢の裁きの後、自分の王国を確保するために、反キリストがイスラエルから離れる。

45 節 ハルマゲドンでの反キリストの敗北。

私たちはすでに、「軽蔑する者」という表現と、獣をその最も重要な歴史的タイプの一つであるアンティオコス・エピファネス(ダニエル 11 章 21-35 節の推定対象者)と結びつける予型論について取り上げました。この研究の最初の部分(ダニエル 11 章 21-23 節)で、私たちは、反キリストが自国において権力を持つようになることに注意を向けることにします:

(21)彼に代って起る者は、軽蔑する者であって、彼には、王の尊厳が与えられず(すなわち、合法的な慣例的な方法で権力を握らず)、彼は人々を魅惑的な[方法で]、二枚舌を使って国(すなわち、謎のバビロン)[の権力]を獲るでしょう。(22)彼から、洪水のような軍勢(すなわち、軍隊:[ダニエル 9 章 26 節](#), [11 章 40 節](#)参照; [イザヤ 8 章 7-8 節](#), [28 章 15-22 節](#); [ナホム 1 章 8 節](#); [黙示録 12 章 15 節](#))が出るが、(ハルマゲドンで)粉々になるでしょう。彼こそは「契約の君」(すなわち、イスラエルと偽りのメシア平和協定を結ぶ者:[ダニエル 9 章 27 節](#))だからです。(23)彼は、人々と契約を結んで後、その陰謀を実行に移し、小さな派閥から[力を]増して、[非常に]強くなります。(英文直訳 ダニエル 11 章 21-23 節)

獣はまず、謎のバビロン(ここでの予型論では、アンティオコスの王国と類似した国家)を支配するようになりますが、その権力の獲得方法は、通常の継承の方法とは相容れないものです。アレクサンダー大王に継ぐ王国の継承者の継承を支配していたビザンチンの策略や陰謀を考えると、これはかなりの発言です。

---

<sup>46</sup> ここと 23 節に見られるように、あらずじや最初の説明の後に、より詳しい説明や「フラッシュバック<過去の出来事の再現、要約>」的な説明が続くという現象は、聖書ではよく見られるものです。創世記 2 章 4 節で述べられている再創造の 7 日間の概要と、その後が続くアダムとエバの創造に関するより詳細な記述を比べてみてください。[「サタンの反乱」第 2 部:「創世記のギャップ」III.2 節、「創世記 2:4 の要約」](#)を参照。

さらに、これらの節は、反キリストの権力掌握が次のような方法によるものであることを明記しています：

1) 「誘惑的な方法によって」(ヘブル語のベシャルヴァ**בשלווה**, この句は反キリストの方法、特に彼の行動の意外性によってすべての潜在的敵対者を安心させ不意をつく能力に焦点を当てています；[第二サムエル 3 章 27 節](#)の<「ひそかに」と訳されている>バシェリイを参照)。

2) 「二枚舌を使って」(ヘブル語ではバチャラクラコト、**בחקלות**, この言葉は反キリストのすべての言葉の狡猾さと欺瞞性を引き出すもので、特にあらゆる観客や社会の層に対する彼のお世辞は、彼自身の悪の目的のためにすべての人の警戒心を解くように目論まれています；[ダニエル 11 章 34 節](#)参照)、そして

3) 「陰謀」(ヘブル語のミルマ **mirmah**, **מרמה**, この言葉は彼のクーデターに関わる裏切りを強調するので、「彼と同盟を結んだ」従者たちと共同して行われます。[列王記下 9 章 23 節](#)参照)により動き出します。

これらの記述は、獣がある種のクーデターによって権力を獲得すること、あるいは、少なくとも獣の出身国である謎のバビロンの常識からはかけ離れた方法で権力を獲得することを明らかにしています<sup>47</sup>。時代の兆候を注意深く観察する信者にとって、獣が最初に力を得る際の非正統的、陰謀的、違法な方法は、彼が実際に反キリストであることを明確に示すものとなるでしょう。

上記の箇所は、過去に起こった多くの権力掌握と類似していないことが明らかです。特にボルシェビキとナチスの権力掌握は、示唆に富む類似点です。カリスマ的指導者を中心に、献身的で高度に組織化された少数の謀略集団が、あらゆる欺瞞と宣伝の手段を用いて、好機に権力を奪取しようとするシナリオは、20世紀史の学習者にとって特に馴染みのあるものです。

a. **指導者**：上記の反キリストに関する記述の中で、私たちが与えられている多くの詳細は、獣が世界にどのように見える姿を現わすかということよりも、獣の実態がどんなものであるかを描いていることに注意しなければなりません。この二つ<外見と内実>の違いは、反キリストが台頭し、大艱難の始まりにすべての抑制を捨てるまでの間に、特に顕著になります。(すなわち、反キリストが「思いのままにする」のは「その時」です。[ダニエル 11 章 36 節](#))。つまり、([ダニエル 8 章 23 節](#)の記述を例にとるなら)獣は「厳しい顔つき」で「欺きに精通している」が、世間には全くそのように見えないということです。彼の人格の否定的な現実と彼の目的の邪悪な性質は、かつて誰も見たことがないほどの「甘美さと軽快さの」装いの下に隠されており、彼の見せかけを見破るには、聖書の確かな深い知識に加えて、高いレベルの霊的識別力が必要とされます。獣が世に知られ、台頭してくる過程で過小評価されてはならないのは、獣の公的な人格の一面であり、メシア的な主張です。彼は結局のところ、反キリストなのです(参照：[ダニエル 8 章 11 節](#))。イエスが宣教を始められた時、非常に若かったように(やっと 30 歳)、一方では「伝統的な型を破り」、他方ではキリストを模倣するというパターンに沿って、むしろ反キリストはさらに若くして出現すると予想されます。ミレニアル世代<新世紀世代:1980 年から 2005 年にかけて生まれ、十代からデジタル環境になじんだ初の世代

---

<sup>47</sup> 獣の父が、墮落した天使たちを従わせて主に反逆させる際に用いた、同様の「売り込み」口と比較してください。[「サタンの反乱」第 1 部:「サタンの反乱と墮落」IV.3](#) 参照。

>の誕生日は、真の意味はありませんが、悪魔が自分の代わりのメシアを真の天才として差し出すための材料になることは間違いありません(そして、そのような誕生日は、艱難期の始まりの予測である 2026 年によく適合します)<sup>48</sup>。

そこで、私たちは、艱難期の初期に(あるいは、艱難が始まる前に)、少なくともイエス・キリストであることをほのめかす(そして後にそれを宣言する)非常にカリスマ的な若者の出現を仮定することができます。外見上、質素で禁欲的なライフスタイル、独身主義を示し、「イエスがどのような人か」を想像するときに世界が期待するものに近い外見を通して、獣は簡単に多くの人を彼の見せかけに引き込むであろうと想像できます。悪魔の力を受けた「奇跡」の働きは、この欺瞞の過程に大きく貢献するでしょう([第二テサロニケ 2 章 9-12 節](#))。私たちの主が私たちに、初降臨に近いこのような方法で来ることを期待してはならないと明言していることは別として(主の再臨に関しては、疑念の余地はありません:[マタイ 24 章 23-31 節](#)、[マルコ 13 章 21-26 節](#)、[ルカ 21 章 8-9 節](#)参照)、獣の言葉の中には、自分たちの神を知る者にとっては、獣が真のメシアではないことが十分に明らかな示唆が隠されているのです。なぜなら、反キリストの言うことはすべて、大衆に感銘を与え、個人的な支持を得ること、つまり、真理を教えるよりも好意を抱かせることに向けられるからです(これは、彼が口にする決まり文句がどんなに立派で深い響きを持っていても同じことです)。

このように、反キリストは究極の「羊の皮を被った狼」([マタイ 7 章 15 節](#); [黙示録 13 章 11 節](#)参照)であり、外見は優しく穏やかですが、内実はサタンの猛々しい子であることを効果的に演出するのです。悪魔が、今では真の明けの明星に取って替えられた「光を運ぶ者」としての権威ある地位を捨て([イザヤ 14 章 12 節](#)と[第二ペテロ 1 章 19 節](#); [黙示録 2 章 28 節](#), [22 章 16 節](#)を比較)、なお「光の使者」として自分を偽装するように([第二コリント 11 章 14-15 節](#))、反キリストもまた、不信仰な世の人々の目には明るく輝く光として映るかもしれませんが、その内実は深い闇なのです。また、反キリストは、できるだけ多くの人を虜にするために、自らを万能の存在とするため、そのアプローチは同調的であると予想されます。宗教的な解決策を求める人々には真の救世主に見え、世界の問題に対する政治的な解決策を求める人々には偉大な指導者に見えるでしょう。科学や超自然に魅了される人々には、反キリストが、遺伝子操作されたスーパーマンや、この悩める世界の傷を癒すために遠くから送り込まれた地球外生命体として認識される可能性があることは、想定外のことはありません。反キリストと彼が作り出す印象は非常に驚異的で印象的なので、彼の台頭の初期段階でさえ、「この人こそキリストだ！」と叫ぶ人がたくさんいるに違いありません。

[第一ヨハネ 2 章 18-22 節](#)に基づくと、「偉大な指導者」としての獣の初期の台頭について、もう二つの点を指摘することができます。この箇所では、ヨハネが反キリストのたとえを用いて、すべての偽教師と偽りの「キリスト教」指導者の危険性について読者に警告しています。19 節に「私たちの前から出て行った」とあるように、当時の教会にとって最も危険なのは、信仰をあからさまに断つ以前に「キリスト教の指導者」として信任を得ていた不信者や背教者たちでした。このことから、獣自身が、目に見える教会のかつての「聖職者」としてそのキャリアを開始する可能性が非常に高いという結論が導き出されるでしょう。第二に、18 節にある「多くの反キリスト」がいるというヨハネの見解は、艱難期の初期に特に重要な意味を持ちます。聖霊の抑制が解除されると(2B で説明)、これらの小さな「反キリスト(達-複数)」が、現在よりも目立つようになり、

---

<sup>48</sup> [「サタンの反乱」第 5 部「裁き、回復、置き換え」II.7-9「人類史の 7 日間」](#)参照。



より多くの信者を獲得するようになります。これらの偽メシア(達)は、実際の獣にとって競争上の問題を引き起こすどころか、反キリストの台頭の初期にその存在を紛らわす役割を果たすでしょう。これらの偽-反キリストはより明らかに誤っており、よりあからさまに自己中心的な動機から働くことが予想できます。そのため、これらの偽メシア(達)は、「反キリスト」のより確かな候補として思われるだけでなく(したがって、本物の反キリストを監視や見破られることから守ることができる)、彼らのよりあからさまで邪悪な悪魔的行動と比較すると、獣の動きが本物の反キリストとしての活動である可能性は非常に低いと思わせるのです。

最後に、私たちは反キリストの初期の出現について知りたいことをすべて知っているわけではありませんが、私たちが知っていることは、その外見、態度、表現、個人的なカリスマ性が極度に説得力のあるものになることを示唆しています。彼の動機は完全に悪であり、彼の道徳的性格は存在しないので、私たちの多くが非常に共感する政治的立場や社会的大義を非常に効果的に支持する可能性が高いです(ただし、彼は実際に約束を実行するつもりはなく、自分の嘘に対して責任を負うこともないでしょう)。したがって、艱難期の信者は、あらゆる種類の政治から距離を置くことが、これまで以上に重要になります。預言された出来事は、私たちの行動とは関係なく起こるのです。私たちの義務は主に対するものであり、艱難期の政治状況に対する私たちの第一の責任は、獣の動きに巻き込まれないようにすることです。反キリストを信じることや彼に従うことが信者にとって困難なことであるとか、軍事的に反キリストに対抗することが可能であるとか、神的であるとか考えることほど、私たちの霊的福利にとって危険なことはいないでしょう。それどころか、その時代の大きな圧力の下では、反キリストの強力な渦に巻き込まれるのはあまりにも簡単なことなのです。難しいのは、目に見えるものはすべてイエス・キリストに委ね、政治のことはイエス・キリストに任せ、本当に重要な霊的現実に集中することです。

b. その動きについて : 先に述べたように、その逆のこともあり得ますが、艱難期の前にはかなりの平和と繁栄の時期があり、第七の封印が解かれると同時に、その状況は急速に激変するという可能性もあります。第二の封印とその象徴である赤い馬の乗り手(2B 参照)については、艱難期は前例のない内紛、内戦、社会的動乱の時代となり、法と秩序の崩壊が世界中で驚くほどの速さで進行することも見てきました。このコントラストは、犯罪、革命、一般的な社会の崩壊を加速させる傾向とともに、これらの新しく増大する恐怖に対して決定的な行動をして解放を約束する指導者と運動に対して、世間一般は非常に受容的になることでしょう。世界の商業資本であるバビロンにとって、世界的な不安定さは、革命や独裁政権によって海外のビジネスによる利益が脅かされ(特に後述の南部同盟の台頭を参照)、さらなる懸念材料となるでしょう。

その中で、キリストに似た風貌を持ち、奇跡的な能力を持つ人物の出現は、どんな状況下でも注目を集めるでしょう。艱難期の到来という危機の中で、反キリストはより熱狂的に迎えられるでしょう。しかし、政治的な権力を握るには、運動を造り出す必要があります、そのような組織は、少なくとも綱領のようなものが必要となりますが、彼は、約束したことを実行するつもりはなく(この失敗の責任を問われることもない)、彼の実際の政策と、政権に就く前の宣言との間に類似性があるとしても、それは単なる偶然でしょう。反キリストの最初の権力の基盤が宗教的であることを考えると、彼の運動もまた、(実際には、明確な政治的野心を持っているのですが)外観上は政治的というよりも宗教的である可能性が高いです。従って、獣の政策公約は、現代の民主主義国家の市民が慣れ親しんでいるものよりも、さらに大まかなものになることが予想されます。「偉大な宗教指導者」として、また少なくとも彼の側近にとっては「真のメシア」として、彼に身を委ねる人々

には、彼が権力を握った後すべての問題を解決することを「信頼」することが期待されるでしょう。攻撃の対象となる具体的な政策案がほとんどない中、反キリストは巧妙かつ欺瞞に満ちた手口で、なるべく人々を疎外させないように、政策を練り上げ、同時に大多数には、詩的で曖昧な彼の言葉に彼らの野生的な夢を投影させるでしょう。欺きの達人として([ダニエル 8 章 23-25 節](#), [11 章 21 節](#), [11 章 27 節](#); [第二テサロニケ 2 章 9-12 節](#); [黙示録 19 章 20 節](#) 参照)、獣は、右翼と左翼の両極に訴え、彼らを取り込みながら、中間の人々も取り込む広報戦略を立てるでしょう:

- 社会政策の面では、増大する不安定さと犯罪の抑制を約束しながらも、それ以外のすべての行動に対しては、(たとえそれがどれほど下劣なものであっても)放任主義を採用する。
- 経済政策の面では、拡大する危機の打開を約束しながら、同時に債務を軽減し、(財産権を無視した)経済的平等を実現する。
- 外交政策の面では、海外の世界の積極的な改善にかかわることで自国の安全を約束(独善的に正当化された独裁的な世界一国主義アプローチ)。

つまり、反キリストの運動は、禁欲主義と自由主義(社会政策)、資本主義と共産主義(経済政策)、孤立主義と介入主義(外交政策)のように見える矛盾した政策方針を同時に包含することになります。もちろん、世界的な権力基盤さえ確保できれば、本当には「やりたい放題」となります。危機の重圧に加え、獣の政策方針に具体性がないことも、正当な懸念を和らげるのに大いに役立つでしょう。獣の運動は、何よりもまず「宗教的」なものであり、「万人のために」政治的解決策に転じたのだから、このように具体的なことを言わないのは合理的に見え、より伝統的な政党の場合よりも容易に許容されることになるでしょう。信奉者たちは、この特別に「善良で才能のある」人物に信頼を置き、彼が現代の緊急の問題に対して、神の力と超自然的な解決策をもたらすことを信じ、世界中の平和、繁栄、安全、調和の新千年紀を、社会のあらゆる部分が恩恵を受ける、つまり誰もが勝ち、誰も失わない、あらゆる点で祝福されたものをもたらすということを感じるようになるでしょう。このビジョンの魅力、緊急事態の緊急性、聖霊による抑制の解除、反キリストの特別例外的な(しかし実際はひどい)性質はすべて、彼の運動の成功と人気を高める要因になります。

反キリストの宗教的・政治的運動の文脈で理解すべき重要な点は、その台頭が大背教に果たす役割(逆に、大背教がそれに果たす役割)です。世界中の多くの生ぬるいキリスト教徒が真のメシアへの忠誠から離れることは、偽メシアである反キリストに従う者への転換と密接に関連するでしょう。前回は、艱難期の特殊な状況、すなわち聖霊の抑制がなくなること、それに伴う不法の秘密の勢力、確かな聖書の教えの欠如、説得力のある偽りの教えの氾濫が、すべて反キリストの宗教運動の隆盛に寄与することを見てきました。<sup>49</sup> 結局、獣の嘘が効果を発揮する前に、まず真理が拒絶されなければならず、この神のみ言葉の真理の拒絶こそが、反キリストの成功と密接に織り込まれる背教の核心です:

---

<sup>49</sup> 反キリストの宗教運動についての詳細は、「来たる艱難期」3A:「艱難期の始まり」II.3.c.2「艱難時代の偽宗教の説得力」、そしてこのシリーズの第4部では、VI.1 節「反キリスト教宗教とその世界的拡大」をご覧ください。

わたしはだれに語り、だれを戒めて、聞かせようか。見よ、彼らの耳は閉ざされて、聞くことができない。見よ、彼らは主の言葉をあざけり、それを喜ばない。(エレミヤ 6 章 10 節)

この宗教運動は、反キリストの政治的攻勢を開始する拠点であり、エキュメニカル<各宗教、教派の一致を目標とするよう>なもので、今日「キリスト教団体</組織>」と呼ばれるもののほとんどを徐々に取り込み、吸収していきます。そして、獣とその偽預言者があらゆる欺瞞の覆いを脱ぎ捨て、サタンとその油注がれた反キリストへの徹底した崇拜という、この運動の正体を露わにすると、艱難期中盤で<その宗教運動は>最高潮に達します([第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [黙示録 13 章 1-18 節](#); [ダニエル 11 章 36-39 節](#))。こうして、反キリストがついに「姿を現した」時には、すでに彼を真のメシアとして受け入れている人々には、あまりにも遅すぎることでしょう。しかし、反キリストの運動の展開という点では、この受け入れ、忠誠、「信仰」は一朝一夕に転換するというより、政治的、軍事的成功を重ねて力と勢いを増すような段階的なものであると予想できます(ちょうど、大背教が大迫害の圧力下にあって頂点に達するのと同じです。[マタイ 24 章 8-28 節](#))。

政策的には、反キリストの漠然とした疑似宗教的な約束は、政治的両翼の両端にいる名ばかりで生ぬるいクリスチャンの興味を大いにそそるでしょう。左派の人々にとっては、獣が説く「経済的正義」、「共生」道徳、「全人類の利益」のための積極的な国際主義は、大いに推奨できるものでしょう。右派の人々にとっては、「千年間」の経済的繁栄と無限の機会の約束、犯罪と社会的動乱の撲滅の約束、「征服する救世主」を口実にした外敵の強力な排除の約束は、抵抗しがたいものでしょう。つまり、この偉大なメシアの支配下にある黄金時代は、すべての関係者にとって「見逃すには惜しい取引」に思えるでしょう。このような夢のような見通しのすべてが、霊的というよりも本質的に世俗的で物質であることを理解するクリスチャンの懐疑論者は、自分たちがますます<蚊帳の>外にいることに気づくでしょう。

最も効果的な悪魔のプロパガンダ、最も強い圧力、そして歴史上最も霊的に準備されていない大勢のクリスチャンという三重の組み合わせが、反キリストの成功と背教のプロセスに大きく貢献することになるでしょう。ですから、バビロンという最も大きなキリスト教共同体の場所(人数、影響力、そして歴史的には有効だったもの)が、最も大きな背教の場所となることは理解できることです。実際、反キリストの母国として、バビロンは大背教が始まる場所であり、イエス・キリストから最も多く、最も劇的な離反が見られる国となるのです。キリスト教世界におけるその影響力を考えると、悪魔とその反キリストにとって、信仰に対する最後の大打撃を開始する場所として、これ以上の場所はないでしょう。

獣の政治・宗教運動に関して確かなことは、(新しい「メシア」を「ただ信じる」必要性以上に)具体的なことは意図的に曖昧であるかもしれませんが、興奮や娯楽には欠けることはないだろうということです。解決策を求め、気晴らしを求め、誘惑に敏感な時代の世界にとって、これまで見たこともないようなカリスマ的な人物に導かれる大衆運動の誘惑、約束、スリル、情熱、興奮は抵抗しがたいものでしょう(そしてそれに抵抗する者はほとんどいないでしょう)。この一見正しい装いをした独善的な運動は、あらゆる種類の悪と隠された欲望に方向性を与え、数で物を言わせ、大衆的大義名分によって自分たちのしようとすることを正当化するでしょう。反キリストの運動の約束は、バビロン住民の不安を解消し、欲望を刺激し、多くの者を酔わせる葡萄酒となるでしょう。それによって獣にクーデターを実行し、バビロンを支配するための実質的基盤を与えることになるでしょう([ハバクク 2 章 4-5 節](#)を参照)。

c. 党: [ダニエル 8 章 9 節](#)によると、反キリストは「小さく始めて」、すぐに艱難期の指導者の中で最も強力になります(つまり、事実上「どこからともなく」やって来て、「十の角」の誰よりも目立つようになります:[ダニエル 7 章 20 節](#)を参照)。したがって、艱難期の初期に、それまで知られていなかったこのカリスマ的指導者の周りに大衆運動が急速に展開し、ほとんど一夜にして権力者になることを想定してよいでしょう。しかし、反キリストの全体的な支持者(つまり、彼の大衆運動に参加しながらも、彼の真の目的に対する献身と理解の度合いが様々な人々)と、彼の熱心な支持者(ここでは彼の「党」)を区別することが重要です。[ダニエル 11 章 23 節](#)後半は、獣が権力者になるには、小さなグループ(me'ath goy メアトゴイ)だけが必要であると述べています。これは、その時に彼の旗に群がる人数のことではなく、彼の意図に本当に通じている小さな陰謀団のことを指していると考えべきでしょう。

彼は、これ(すなわち、反キリストの側近)と同盟を結んで後、偽りのおこないをなし、わずかな民(すなわち、彼の「党」)をもって[非常に]強くなり、([ダニエル 11 章 23 節](#))

バビロンで権力を握り、復活したローマを支配し、世界で唯一の主要勢力である南部同盟を破るという彼の急速な台頭は、すべて艱難期の最初の三年半の間に起こるので、反キリストが艱難期の開始と同時に、かなりの数の支持者を集め始めることはほぼ確実なものです。しかし、反キリストの実際の「党」は、反キリストをバビロンの支配者に押し上げる支持者の波に比べれば、かなり小さいと予想されます。また、上記の引用にあるように(そして過去の全体主義的な動きと類似している)、この「党」自体の中に、反キリストが最も信頼する側近(すなわち、彼の急成長が始まる前に、最初に彼に「同盟」した人々)からなる内部核が存在する可能性があります。この指導者の側近(黙示録第 13 章の偽預言者のような者を含む)には、獣の本性と意図について何の疑いも持たず、この幹部は艱難期が始まる前から、反キリストと共に組織と計画に携わっている可能性が高いです。獣は、艱難期が始まってその本性が明らかになるずっと前から、間違いなく「弟子」たちを集め、形成しているはずだからです。このような内輪の弟子たちは、彼の本当の出自と計画を知っていて、それに完全に加担しているはずで、それに対して、後に彼が行う「しるしと奇跡」のために「驚き」、一斉に彼の下に押し寄せる人たちがいます([第二テサロニケ 2 章 7-9 節](#)を参照)。

反キリストの超自然的な魅力と彼が「メシアである」という「証拠」は、私たちが以前に獣の運動について示唆したこと、つまり、最初は宗教的な運動でありながら政治的な運動のように振舞うということを裏付けているのです。このような理由から、獣の内部の支持者の上に築かれる本来の「党」のメンバーの多くは、疑似メシアである反キリストの人物を受け入れることによって宗教と政治の境界が曖昧になった宗教家や信奉者であると予想されます。彼の「国が到来した」後の実際的な報酬の約束は、彼のすべての支持者を動機づけるのに強い影響を持つでしょう。この偽メシアのエキュメニカルな運動が約束するすべての益と報酬は、物質的なものであり、この世に焦点を当てたものであり、真の霊的側面はまったくないことを、信者は見逃してはいけません。このようなことを考えるとき、クリスチャンが覚えておくべき最も重要なことは、この刺激的な新しい人物は、彼が主張するような真の「キリスト教の体現と成就」とかではなく、たとえキリスト教団体が彼に群がることになっても、彼をそれにならせることはできないということです。彼は真のメシアではなく、非常に巧妙に作られた偽物に過ぎないのです。そのことは、私たちの主、唯一のキリストご自身によって、前もって警告されています。



(23)そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、また、『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。(24)にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを[十分]行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。(25)見よ、[(今、わたしは)]あなたがたに前もって言うておく。(マタイ 24 章 23-25 節)

d. 十字軍のこと: 上記の獣の運動の宗教的な焦点は、彼の権力への台頭を政治的な運動というよりも、十字軍のようなものにするでしょう。これは、内政・外政の両面において言えることです。反キリストの社会、経済、外交政策の基盤は、魅力的で魅惑的な進歩を約束するものであることは、すでに述べたとおりです(もちろん、彼は権力を握った後もそれを維持するつもりはありません)。しかし、彼と彼の政党の魅力の大部分は、彼が取り除くと約束する脅威にあると予想されます。誰もその将来の世界の正確な状態を予見することはできませんが、反キリストがバビロンで権力を握り、その後復活したローマを支配した後、艱難期の前半の残りの部分は、世界に残る唯一の重要な勢力圏である南の同盟に対する二つの大規模な軍事作戦に費やされることは事実です([ダニエル 11 章 25-30 節](#), [11 章 40-43 節](#))。バビロンと復活したローマの両方で反キリストの影響力が増大するのは、少なくとも部分的には、彼が世界のこの地域からみて西側に増大する脅威に立ち向かうことのできる唯一の見込める指導者であると認識されているからであると推測するのは、それほど飛躍したことではないでしょう。

おそらく、この国においてとヨーロッパにおいて一人の強者を権力の座に押し上げることができるのは、世界征服を企む救世主的人物の配下で反-西欧の統一イスラム世界を作り上げることでしょう。このような事態は、伝統的な侵略行為に加えて、エスカレートしたテロリズムとして現れるならば、より一層恐ろしく、説得力のあるものとなるでしょう。ダニエル書 11 章とこの問題に触れている他の箇所には、この「南の王」に関する具体的な情報はあまりありませんが、この王を征服するために二度にわたる相当な戦いが必要であり、その同盟が聖書の「南」(すなわち、中東、アフリカ、おそらく中央アジアの一部を中心とする大きな王国)を包含しているということは、その力が大きくなることを示唆するに十分です。また、この人物を信奉者は来たるべきイスラムの「メシア」、マハディーと見なしている可能性が高いことも推測に値します。このような政治環境では、西側が征服に燃える統一イスラム同盟に包囲されているため、名目上キリスト教徒である世界がこの<イスラムの>外国人指導者を「反キリスト」と見なすことは容易に想像できるでしょう。そして、南部同盟の指導者が「反キリスト」として<西側に>受け入れられると、神の言葉よりも自分の目を信じる人々にとっては、真の反キリストがメシアであるという主張がより一層真実味を帯びてくることになるのです。その時の政治的な出来事の詳細はともかく、南部同盟に関する預言から、海外からの脅威がバビロンの内部にあらゆる恐ろしい方法で現れていると推測することができます。また、聖霊の抑制がない無法状態が引き起こすことになるその時の圧力の強さを過小評価することはできません<sup>50</sup>。したがって、反キリストが自分の支持者を増やすために、このような脅威を最大限に利用しないとすれば、実に奇妙なことです。このように見てくると、反キリストの台頭は、「キリスト教」を代表してイスラムの「反キリスト」に戦争を仕掛ける前に、まずバビロンと西側を統一しなければならない十字軍のようなオーラを帯びることでしょう。自ら征服するメシア、イスラエルの擁護者(後述の第四章参照)、西欧「キリスト教」の救出者の役割を担うことは、力のない

---

<sup>50</sup> 「来たる艱難期」第3部A:「艱難の始まり: 第七の封印から二人の証人まで」II.3.a 項「不法の秘密の力の解き放ち」参照。

名ばかりのどこの国のキリスト教徒の目にも、反キリストの善意が大きな意味を持って映ることでしょう。しかし、真に神を知る者にとっては、反キリストにとって世界征服は目的のための手段にすぎないことが理解できるでしょう。彼は悪魔の意志を実行し、信じる者すべてとユダヤ人の家系の者すべて、とりわけ信じるユダヤ人を地上から排除することが、サタンの課題の最上位にあることでしょう。これが彼の真の目標の核心であり、ハルマゲドンの理由と原動力となるものです(第5部参照)。

e. 権力の掌握: 聖書は、反キリストが権力を握るきっかけとなるような特定の出来事を明記していません。悪魔が「クーデター」によって一時的に世界を支配し、神の地球再建の後、最初の両親を誘惑して再び地球を支配したように<sup>51</sup>、獣も陰謀的な方法を用いて、まず権力を掌握するのです。

(23)彼らの国の終りの時(すなわち、艱難期)になり、[背教によって]罪びとの罪が満ちるに及んで、ひとりの王(すなわち、反キリスト)が起るでしょう。その顔は猛悪で、彼はなぞを解き、(24)その勢力は盛んであって、恐ろしい破壊をなし、そのなすところ成功して、有力な人々(=信者)と、聖徒である民(=イスラエルの[一部])を滅ぼす(墮落させる)でしょう。(25)彼は悪知恵をもって、偽りをその手におこない遂げ、みずから[大いに]心に高ぶり、不意に多くの人を打ち滅ぼし、また君の君たる者に敵するでしょう。しかし、ついに彼は人手によらずに滅ぼされるでしょう。(ダニエル 8 章 23-25 節)

彼に代って起る者は、卑しむべき<軽蔑する者>であって、彼には、王の尊厳が与えられず(つまり、合法的な、従来の方法で権力を握ることはなく)、彼は不意にきて、巧言をもって国を獲るでしょう。(ダニエル 11 章 21 節)

この権力の掌握は、何か特別な出来事に続いて行われる可能性もないわけではありませんが、必ずしもそうではありません。反キリストの勢力が十分で、世論が十分に喚起されれば、反キリストは時間をかけずにバビロンの権力の座を奪うと思われ、彼について学んだことからすると、可能な限り早い時期にそれを行うことを示唆しています。上記の聖句が強調するテーマは、彼が実際に権力を握る際の欺瞞性です。したがって、彼が具体的にどのような手段を用い、どのような機会を利用するとしても、彼の行動は欺瞞に満ち、違法で、極度に傲慢であることは確実であり、聖書を表面的にしか知らない人々でさえ、彼ら関わっている人物は確かに真のメシアではないことを保証するはずです。しかし、恐ろしい時代、国内外の安全に対する恐ろしい脅威、「不法の秘密の力」の爆発と前例のない「惑わす力」(このシリーズの前回で学んだ現象; [第二テサロニケ 2 章 3-12 節](#)参照; [ダニエル 8 章 23 節](#)参照)、そして聖霊の抑制の働きがないことが、バビロンの将来の世代の多くの人々が、反キリストをメシアと考え、そのクーデターを救いの唯一の希望として受け入れることにつながることでしょう。最後に、なぜ反キリストは、このように有利な要素をすべて備えていながら、より伝統的な方法で権力を獲得するのではなく、このような手段を取らなくてはいけなかったのかという問いは妥当でしょう。この疑問に対する答えは、彼が正統性の見かけさえも全く気にかけないという事実とは別に、彼がすべての計画を実行に移す驚異的な速さ(そして忍耐の完全な欠如)であ

---

<sup>51</sup> 「サタンの反乱」の第一部と第三部をご覧ください。

り、彼が待ちきれないという見地と、バビロンにおける彼の出世のまさに「豹のような」速さが、まだ十分に納得していないすべての人々の間に生み出す疑惑と抵抗の理由から、不意を突く速やかなクーデターを必要とするのです(黙示録 13 章 2 節)。

### III. 獣の王国

バビロンで権力を握った後、反キリストは、旧ローマ帝国のヨーロッパ部分の主要七カ国を支配するために迅速に行動するようになります。バビロンとこの復活したローマの従属帝国が一緒になって、初期の獣の王国の本質を構成します(つまり、当時の世界のもう一つの主要な権力ブロックである、さらに三つの王国を構成する「南の同盟」を反キリストが征服して拡大する前の状態です)。

[同じように魅惑的な方法で]不意にその州[すなわち、復活したローマ帝国]の最も肥えた所[すなわち、七つの国々]に攻め入り、その父も、その父の父もしなかった事をおこない、その奪った物、かすめた物および財宝を、[自分に従う]人々の中に散らすでしょう。彼はまた計略をめぐらして、[残りの]堅固な城(=南部同盟の三つの下位連合)、を攻めるが、ただし、それは時の至るまでです[英文:好機を待つでしょう]。(ダニエル 11 章 24 節)

エゼキエル書では、反キリストの王国が、複数の部分からなる下位の帝国を支配する一つの国として描かれています。

「人の子よ、メセクとトバルの大君であるマゴグの地のゴグに、あなたの顔を向け、これに対して預言して、(エゼキエル 38 章 2 節)

ゴグとは、上記 II で指摘したように、反キリストの預言的呼称であり、マゴグとは、彼の母国バビロンを指し、より大きな複合帝国(別名、「復活したローマ」)に君臨する「超国家」です。上記の箇所では、復活したローマ帝国を「メセクとトバル」という二つのヤペテ族の国名で表現しています。この二つの民族は聖書だけでなく、古代の世俗史においてもしばしば関連しているからです(創世記 10 章 2 節; 歴代誌上 1 章 5 節; エゼキエル 27 章 13 節, 32 章 26 節, 39 章 1 節)<sup>52</sup> 上記の記述と同じように、復活したローマのヨーロッパ地域もまた、全体的には連合していますが、それぞれユニークで異なる複数の、領土的に連続した国家で構成されるでしょう。

バビロンの従属帝国のこの中心的な特徴、つまり、ある意味では統一されていないながら、同時に明らかにばらばらの部分から構成されていることは、ダニエルの巨像の幻においても強調されています。しかし、この幻では、「足」と「つま先」という異なる部分があるだけでなく、その本質的な材料の構成の中にさえ、さら

---

<sup>52</sup> ヘロドトス(Hist.3.94; 7:78)やアッシリアの記録など。Unger's Bible Dictionary』、『The Interpreter's Dictionary of the Bible』、s.v. 「Meshech」 and 「Tubhal 」参照。

なる分裂を見ることができるのです。

(39) あなたの後にあなたに劣る一つの国が起ります。また第三に青銅の国が起って、全世界を治めるようになります。(40)第四の国(すなわち、復活したローマ)は鉄のように強いでしょう。鉄はよくすべての物をこわし砕くからです。鉄がこれらをことごとく打ち砕くように、その国[この第四の国]は[他の王国を]こわし砕くでしょう。(41)あなたはその足と足の指を見られましたが、その一部は陶器師の粘土、一部は鉄であったので、それは分裂した国をさします。しかしあなたが鉄と粘土との混じったのを見られたように、その国には鉄の強さがあるでしょう。(42)その足の指の一部は鉄、一部は粘土であったように、その国は一部は強く、一部はもろいでしょう。(43)あなたが鉄と粘土との混じったのを見られたように、それらは婚姻によって、[十の小王国は]互に混ざるでしょう。しかし鉄と粘土とは相混じらないように、かれとこれと相合することはありません。(ダニエル 2 章 39-43 節)

この箇所でも、獣の王国は全体として二部構成であることが示されています。獣が立つ「鉄」の足が二本(すなわち、バビロンと復活したローマ)あるからです。また、上記の[エゼキエル 38 章 2 節](#)の「メセクとトバル」と同様に、バビロンが支配する復活したローマ帝国の二重性を表す二つの「足」があり、それ自体が複数の部分からなる二分化が見られるのです。さらに、ダニエルは足とつま先を「一部は鉄、一部は粘土」と注意深く繰り返し表現していますが、この二つの要素は混ざり合うのではなく、目に見えて区別でき、別個のものとして表現されています。つまり、混同され互いに融合され、均質化されるのではなく、重層化されるのです。ですから、足の指の一部は鉄で、一部は粘土でできていて、粘土と鉄は足の中に放射状に広がっていて、縞馬の縞模様のように区別できるのです。鉄の足指はヨーロッパからなるローマの7つの国を象徴し、粘土の足指は南の連盟の3国を象徴しています。前者は強く、後者はもろいのです。

1. 獣の十本の角：ダニエルの巨像の構想にある、一部は鉄、一部は粘土からなる十本の足の指は、ダニエル書 7 章、黙示録 13 章と 17 章に見られる恐ろしい獣の十本の角と明らかに類似しています。どちらも、復活したローマ帝国が最終的に(南方の三国が崩壊した後)統一された際の十カ国を象徴しています。

その後わたしが夜の幻のうちに見た第四の獣(すなわち、ローマ/復活したローマ)は、恐ろしい、ものすごい、非常に強いもので、大きな鉄の歯があり、[他のすべての獣を]食らい、かつ、[それらを]かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。これは、その前に出たすべての獣と違って、**十の角を持っていた**。(ダニエル 7 章 7 節)

エゼキエルの「メセクとトバル」の言及や、ダニエルの鉄と粘土のつま先の暗黙の区別に見られるこの新ローマの二重性は、獣の十本の角についての他の記述にも見出すことができます。

(19)そこでわたしは、さらに第四の獣(すなわち、ローマ/復活したローマ)の真意を知ろうとした。その獣は他の獣と異なって、はなはだ恐ろしく、その歯は鉄、そのつめは青銅であって、[他のすべての獣を]食らい、かつ、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。(20)この獣の頭には、**十の角があったが**、そのほかに一つの角(すなわち、反キリスト)が出てきたので、この角のために、**三つの角が抜け落ちた**。この角には目があり、また大きな事を語る口があって、その



形は、その同類のものよりも大きく見えた。

十の角はこの国(すなわちローマ、第四の獣)から起る十人の王である。その後にもまたひとりの王(すなわち反キリスト)が起る。彼は先の者と異なり、かつ、その三人の王を倒す。(ダニエル 7 章 24 節)

すぐ上の箇所も、復活したローマ(=歴史的ローマの「その王国から」後に「生じる」十の王国)の二重性を明確にしています。十本の角は、反キリストによって公然と征服された三つのブロックと、残りの七つから成るブロックに分けられるからです。[ダニエル 7 章 24 節](#)は、反キリストの帝国を構成する十の王国のうち、ヨーロッパ以外の三つの国が軍事力によって征服されることを示していますが、復活したローマの残りの七つの王国が反キリストとどのような関係にあるかは、黙示録の記述の解説に頼ることになります。

また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、大きな、赤い龍がいた。それに七つの頭と十の角とがあり、その頭に七つの冠をかぶっていた。(黙示録 12 章 3 節)

ここでは、サタンを象徴する竜が、その反キリストである獣と非常によく似ていることがわかります。この類似は意図的なものであり、反キリストとその父である悪魔の一致の度合いを示すものです。冠をかぶった七つの頭が見えるのはこの箇所だけであることから(他の箇所では冠をかぶっているのは角)、地上にサタンの王国を建設するための重要な足がかりは、実際には反キリストとバビロンの指揮下にある、復活したローマの中央七王国のことであることがわかります。

(そして、海の砂の上に立った。) わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。それには角が十本、頭が七つあり、それらの角には十の冠があつて、頭には神を汚す名がついていた。(黙示録 13 章 1 節)

この聖句は、復活したローマの初期構造と最終構造を一度に示しています。十本の角は、復活したローマの二つの別々の部分の支配者達を表し、七つの頭は、復活したローマの主にヨーロッパの七つの王国を表しています。<sup>53</sup> この箇所はまた、七つが果たす重要な役割を示しています。なぜなら、七つは獣とその王国を特徴づけており、獣の「神を汚す名」は実際に七つに直接刻まれているからです。(これは、艱難期の後半に獣に従う者たちの額に獣の数が刻まれることと明らかに類似しています)。[黙示録 13 章 16-17 節](#)、[14 章 9 節](#)、[20 章 4 節](#)参照)。新約聖書の最も古い写本では、ギリシャ語の「名」は複数形ではなく、単数形で書かれています。この記述から、反キリストの冒瀆的な称号が七つの頭に分配的に書かれ、その称号が七つの頭にそれぞれ一文字ずつ刻まれたと理解できます。もちろん、このことは、その名前や称号が何であるかという疑問を提起します。

---

<sup>53</sup> 上記の II.1.c.3 節で見たように、頭には二重の解釈があります。獣が「七つのうちの一つ」(すなわち、[復活した]ローマの究極的な皇帝)であると同時に、「八番目」(すなわち、復活したローマとは別の王国[バビロン]の王)であると言われるのはこのためです。これはダニエル書 7 章の小角の場合と類似しています。

この点では、この名称が「神を汚す」ものであるという記述が鍵になります。究極の神を汚すことは常に神性を偽ることです(ヨハネ 10 章 33 節参照)。これまでの議論から明らかなように、反キリストの冒瀆の核心は真のキリストであるという主張であり、この点で、彼の反-神の話は最も冒瀆的であると言えます(そのため、聖書は彼を反キリストと呼んでいるのです)。この反キリストによる「メシア」の称号の篡奪は、実際、三位一体のすべてのメンバーに対する三重の冒瀆なのです: 1) 彼がキリストであるという主張は偽りで、真のメシアに取って代わる冒瀆の試みであること(マタイ 24 章 5 節; 第一ヨハネ 2 章 22 節); 2) しかし、彼の主張は、父(父のみが真のメシアに油を注ぐことができる)の権利を横柄に奪い、真のキリストとしての御子の父による多くの実証を冒瀆的に否定していること(マタイ 3 章 17 節, 17 章 5 節; 詩篇 2 篇 6-12 節, 110 篇 1-7 節; イザヤ 42 章 1-4 節; コロサイ 1 章 19 節; ヘブル 1 章 1-14 節 参照); 3) さらに、彼の主張は主が警告した「霊に対する冒瀆」の極致であることです(マルコ 3 章 30 節; マタイ 12 章 31-32 節, マルコ 3 章 23-29 節, ルカ 12 章 10 節も参照してみてください)。なぜなら、反キリストは、自分自身を真のメシアと主張することによって、定義上、本当にキリストである「油を注がれた者」に対する御霊の証に対して冒瀆しているからです(したがって、本質的に御霊を嘘つきと呼んでいるのです)。したがって、反キリストがキリストであると主張することは究極の神への冒瀆ですから、「キリスト」という称号は七つの頭に刻まれる名称の候補としてあり得ないことではありません。この可能性は、「キリスト」という名前がギリシャ文字(『ヨハネの黙示録』の言語)で必要な 7 文字(すなわち、Χ ρ ι σ τ ο ς)を持っているという事実によって、「その頭には神を冒瀆する名があった」という言葉の最も可能性の高い意味が、頭につき 1 文字と仮定することによってより一層高くなります。ここで非常に重要なのは、黙示録 13 章 1 節に登場する獣の七つの頭に書かれた称号は、単に「キリスト(Christ)」であって、ザ・キリスト(*the Christ*)ではない(すなわち定冠詞がない、これはギリシャ語では常に非常に重要です)、ということです。したがって、聖書は、神によって真に油注がれた方と、この油注ぎを冒瀆し、偽って主張する反キリストとを慎重かつ意図的に区別しています。この冒瀆の名を受け入れることによって、七つの頭/王国とその王たちは、獣がキリストであると主張することに完全に加担し、それに基づいて権力を獲得することにも加担していることを示しています(下記参照)。

ここに、知恵のある心が必要である。[獣の]七つの頭は、この女のすわっている七つの山であり、また、七人の王のことである。(黙示録 17 章 9 節)

この聖句は、獣の復活したローマ帝国において、主にヨーロッパの七カ国が果たす役割の重要性を強調するものです。なぜなら、この七つの頭は「女(すなわちバビロン)が座っている七つの山」と表現されているからです。これは、バビロンがこれらの「山々」を支配し、それに依存していることを表していると思えません。ここで使われているギリシャ語「オス(ὄρος)」は「丘」ではなく「山」を意味するので、これらの山を「ローマの七つの丘」と捉えることは文脈上あり得ません。それどころか、聖書では「山」は強力な国家を指す比喩として使うことがあり(例: エレミヤ 51 章 25 節; ダニエル 2 章 35 節)、ここでもそのような意味合いが含まれています。この箇所では、バビロンが七つの国に依存し、また支配していることに加えて、「山」という言葉が使われていることから、この七つの国の力が取るに足らないものでないことが分かります。

上記の聖句を考察すれば、聖書が十本の角と七つの頭(あるいは十本の角のうちの三本の角と七本の角)を区別しているのは、象徴上の矛盾ではなく、復活したローマの一部が最初に反キリストとバビロンによって同化され、後に残りの三つの王国(私たちが言うところの「南の同盟」)を征服することを区別するためのものであることが十分わかるはずです。実際、黙示録 17 章に登場する獣に乗った女の幻には、大淫婦

バビロン、七つの頭で表される七つの王国、そして十本の角で表される復活したローマの十王国が一度に登場し、反キリストの王国の三つの要素が密接に絡み合っていることが分かります。

このように十本の角と七つの頭という象徴の根本的な意味を理解した上で、次に、復活したローマの地理的な構成について簡単に考察するのが適切でしょう。まず、ヨハネの時代のローマ帝国は、ヨーロッパを中心としながらも、ヨーロッパの境界をはるかに越えて広がっていたことが指摘されます。ネロの治世末期のローマは、地中海沿岸の全域を占め、イギリスからアルメニアまで、南ドイツからサハラ砂漠まで延びていました。また、イタリアを除くヨーロッパの諸地域は、＜ヨーロッパ以外の地域に比べて＞人口が最も多く、最も繁栄していたというわけではありませんでした。例えば、エジプトは帝国の穀倉地帯として最も重要な州の一つであり、小アジアには最も裕福な都市国家が存在し、北アフリカはイスラムの征服に伴う組織的荒廃以前は、もっと青々とした農業生産性の高い地域でした。さらに、イタリアが旧イタリアと密接に対応していることを除けば、現在の地中海世界の政治地図は、ネロの時代の地図とほとんど似ても似つかないことが多いのです。イスパニア＝スペイン、ガリア＝フランスはそれぞれ近似地域ですが、現在のフランスとスペインの領域は、いずれも古代ローマ時代には複数の州に分割されていました。聖書は、獣の帝国を初期のローマ帝国と特定する以外に、獣の帝国を構成する十の王国を正確に特定していません。しかし、ダニエル書第11章に記述されているように、反キリストによる南の王とその王国の征服(すなわち、「小さい角の前に倒れる」南の同盟の三つの角)から、いくつかの基本的な推論をすることができます。(ダニエル7章19-24節)。反キリストの勢力圏と南部同盟の三つの王国の間の対立がイスラエルの地を中心に起こるので(ダニエル11章25-30節, 11章40-44節)、これらの三つの「角」はパレスチナ近辺のローマ帝国の領域として理解するしかないでしょう。南部同盟とこの紛争については、以下のIVからVIで詳しく述べますが、これらの出来事が現代に近いことを考えると、これらの三国がその地域の現在のイスラム勢力圏であるか、少なくともその勢力圏を中心としたものである可能性が高いことをここで述べれば十分でしょう。黙示録執筆当時、エジプトは戦略的に(中央の地理的条件と穀物生産能力からして)最も重要な州であり、小アジア(トルコ)は最も豊かな州、シリアは(パルティア帝国が近接し敵対していたため)ローマ軍団が最も集中する場所でした。したがって、筆者の考えでは、以下に述べる概論として、ローマのパターンと現在の地政学的状況の両方に合理的に合致しており、三つの「角」の候補として最も有力であると考えます:

1. エジプト(イスラム圏のアフリカとアラビア半島を含む連合を代表する)。
2. トルコ(イスラム教の中央アジアとコーカサスを含む連合を代表する)
3. シリア(イラク、イラン、パキスタンを含む連合を代表する)

詳細については誰も確定できません。しかし、この三つの王国とヨハネの時代のローマとの対応関係や、三人の王が支配することについては、聖書は非常に正確に述べているのです。したがって、上記のグループ分けが決定的であるかのような印象を与えることは筆者の本意ではありませんが、それでも、イスラム世界の中にヨハネの時代の地方と何らかの関係を持つ三つの下位連合を仮定することは、三つの角の解釈に対する最良の解決策のように思えます(たとえ、上記のグループ分けが結局、正確さに欠けていることが判明した場合であっても、です)。

このように、アフリカと中東を、反キリスト帝国の原型となる残りの国や地域のリストから外すとすれば、次のような7つの名簿が残ります。

1. イギリス(イギリス諸島のすべてを含む/代表的名として)
2. フランス(ベネルクス諸国を含む/代表的名として)
3. ドイツ(その他の中欧諸国を含む/代表的名として)
4. ギリシャ(バルカン半島、東欧、ロシアを含む/代表的名として)
5. スペイン(イベリア半島を含む/代表的名として)
6. イタリア
7. イスラエル

南部同盟の三つの小グループの場合と同様に、このリストは、将来のその時点で現れる実際の連合体のおおよその目安にできることを意図しています。しかし、聖書は歴史的ローマと復活したローマの地理を支配する七人の王とその王国のグループを明確に示していますし、艱難期の前半と後半の出来事(特にダニエル書 11 章)には、中立な国は全く示されていません(実際、大艱難期に入ると、全世界がある程度、反キリストに支配されます:[黙示録 13 章 3 節](#)後半)。ですから、現在の地政学的現実からすれば、「ギリシャ王国」がロシアに支配される可能性は非常に高いのですが(そして、その「王」はロシアから生まれる可能性が高い)、現在(および近い将来の)現実には、ローマ帝国とその地方の歴史的配置とある程度結び付いていなければならないということなのです。ですから、近い将来、ヨーロッパの国々が実際にどのように連携するにせよ、本質的なポイントは、現在のヨーロッパから構成され、(七人の特別な支配者が率いる)ほぼ完全に構成される七つの勢力圏が存在するようになるということです。--より正確に言うなら、非ヨーロッパ国家であるイスラエルが(ほとんど指摘するまでもなく)その七国のうちの一つであるため、六つくのヨーロッパの国々です。ヨハネの時代、パレスチナはもちろんローマの保護領であり、これらの出来事に関する聖書の二大資料であるダニエル書と黙示録では、イスラエルが中心的な役割を担っています。さらに、イスラエルを北王国の南部同盟に対する「くさび」とし、その同盟に対して「イライラさせるもの」とすることは、聖書の解釈と現地の現実の両面から、合点がいくところなのです。実際、この記事を書いている時点では、現在の事態を予測すれば、近い将来、西欧とイスラム世界がイスラエルを中心とした宿命的な決闘に巻き込まれる事態を想定するのは難しくありません。

反キリストの歩みを振り返ると同時に、その治世の終わりまでを見通すと、次のようにまとめられます。

1. バビロン掌握される
2. 復活したローマ(七王国)掌握される



3. 南部同盟(三つの王国)が二回の作戦で征服される。
4. 世界が征服される(多かれ少なかれ反キリストの影響下に置かれる)。
5. ハルマゲドン(キリストの再臨に対抗するために、世界の軍隊がイスラエルに集結する)。

2. 復活したローマ帝国の掌握: これほど重要な出来事でありながら、[ダニエル 11 章 24 節](#)を除いて、反キリストがバビロンの占領を利用して、復活したローマ帝国の七カ国を支配することについて、聖書がほとんど言及していないのは、意外に思われるかもしれません。例えば、黙示録では、17 章で獣とバビロンに関連した十本の角と七つの頭について言及していますが、これらの出来事は事実上、事後的にすでに達成されたものとして描かれています。このように聖書が詳しく説明していないこと、これらの出来事が起こるまでの期間が非常に短いこと(つまり、反キリストは艱難期の開始後 18 ヶ月以内に南方に対する最初の作戦を開始する準備ができています)、そして(以下で扱う)[ダニエル 11 章 24 節](#)に記されている事柄が組み合わさると、すべて同じ結論に達するのです: 反キリストによる七王国の掌握は非常に速く、驚くほど簡単に行われ、実際のところ、それはほとんど掌握とも言えないほどのものとなるでしょう。なぜなら、復活したローマの七つの王は、最初から反キリストの同盟者だからです。

**(12)あなたの見た十の角は、十人の王のことであって、彼らはまだ国を受けてはいないが、獣と共に、一時だけ王としての権威を受ける。(13)彼らは心をひとつにしている。そして、自分たちの力と権威とを獣に与える。(黙示録 17 章 12-13 節)**

この箇所は、獣が十人のグループと、その中の七人のエリート・グループの両方と密接な関係にあることを明確に示しています。この節では、十人の王がすべて、それぞれの国に対して持っている権力と権威を反キリストに譲り渡すことが語られています。このことは、復活した帝国とその支配権を握る反キリストを理解する上で重要です。そしてこれは、復活したローマを支配しようとする獣の努力が、最も重要な国々の支配者たちによって妨げられるどころか、むしろ彼らによって著しく助けられることを示唆しています。

1) 彼らは皆、「**獣と共に、一時(すなわち艱難期)だけ王としての権威を受ける**」とされています。聖書はこのように、彼らの権力の獲得を反キリストのそれと直接結びつけています。また、「権威を受ける」という表現は、彼らが反キリストのように独立した存在ではなく、より大きな計画(すなわち、サタンの世界征服計画)の庇護の下に活動することを表しています。

2) この印象は、彼らがすべて同じ「目的」(ギリシャ語のノーム、 $\gamma \nu \omega \mu \eta$ )を持っていると言われていたという事実によって強まります。そして、この共通の目的というのが、まさに獣に権力と権威を譲り渡すことなのです。

3) 最後に、彼らとその権力と権威を反キリストに譲り渡そうとしているという事実は、前代未聞の個人と国家の利害の調整、協力、従属を意味し、これまでの世界史に類例のないものです。このことからわかることは、この十人の王がネピリム(創世記第 6 章以降、聖書に記録されていない半天使的な生き物)である

か、あるいは、少なくとも悪魔の熱心な信奉者であり、政治キャリアの初期段階から、復活したローマを支配する反キリストの台頭を支援し、後押しすることを目的とする者達であるということです。十人の王について、「獣と共に王としての権威を受ける」と言われていることから、この言葉には、彼らのそれぞれの国での権力の掌握は、バビロンでの反キリストの台頭と多くの類似点があり、彼らが最初から悪魔の計画の一部であることが明らかです(後にバビロンに関して彼らが思いを一つにし協力する: [黙示録 17 章 16 節](#)参照)。

どのように解釈しても、前節と本節で取り上げたすべての「頭の角」の箇所は、特に一緒に考えると、反キリストとその王国とその配下の支配者たちを非常に密接に結びつけているのです。したがって、反キリストが「復活したローマ」として十王国を支配することに、それらの国々自体が協力することは、偶然ではなく、世界の権力を獲得するための悪魔の大計画の不可欠な部分でもあるのです。その意味で、以下の聖句は、反キリストがその権力基盤であるバビロンから、復活したローマを掌握することを描写していると解釈できるのです。

[同じように魅惑的な方法で]不意にその州(すなわち、復活したローマ帝国)の最も肥えた所(すなわち、七つの国々)に攻め入り、その父も、その父の父もしなかった事をおこない、その奪った物、かすめた物および財宝を、[自分に従う]人々の中に散らすでしょう。彼はまた計略をめぐらして、[残りの]堅固な城(=南部同盟の三国連合)、を攻めるが、ただし、それは時の至るまでです[英文:好機を待つでしょう]。(ダニエル 11 章 24 節)

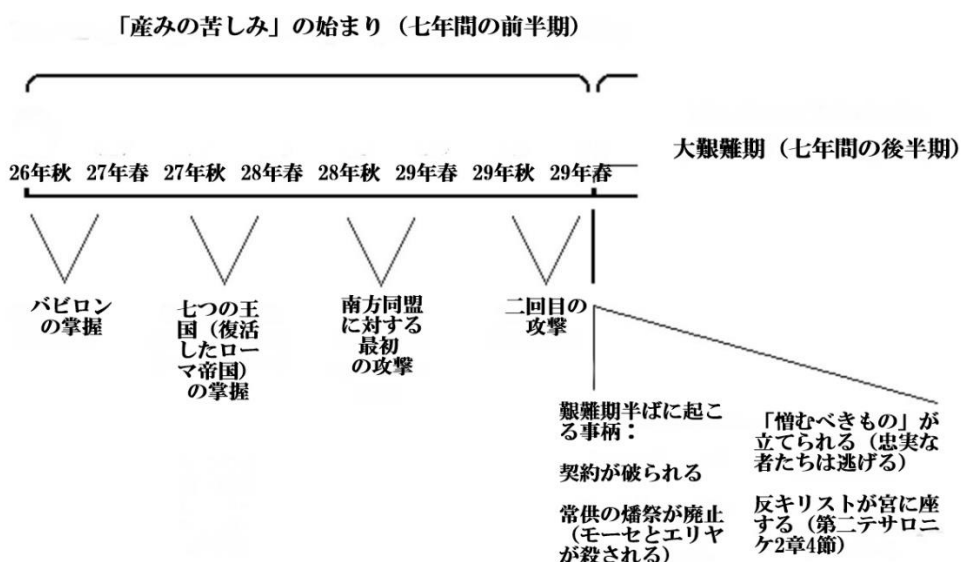
上記の翻訳にある「その州の最も肥えた所」という表現は、復活したローマの七つの国々(「州」)で、残りの三つの「粘土の王国」に対抗する、復活した帝国の強い「鉄」の部分の指しています(参照:[ダニエル 2 章 39-43 節](#)参照)。<sup>54</sup> ここでのヘブル語は、反キリストがこれらの諸州に入ることに對して敵対するという明確な意味を全く与えていないだけでなく、「同じように魅惑的な方法で」という記述は、彼がこれらの七つの国々を所有することは、バビロンで権力を掌握したのと同様の方法で行われることを強く示唆しています。実際、[ダニエル 11 章 24 節](#)で使われているヘブル語の表現は、[ダニエル 11 章 21 節](#)で述べられている反キリストのクーデターと事実上同じです(つまり、ポー בואのカル態に、前置詞句 beshalvah, בשלחהが合わせて、両方の場合において「誘惑的な方法で支配権を得る」意味で使われています)。したがって、複雑な一連の軍事作戦というよりも、反キリストによるヨーロッパとイスラエルの支配は、主として政治的な手段によって達成されることが明らかです。[ダニエル 11 章 24 節](#)が示す図式は、艱難期の出来事の時期について私

---

<sup>54</sup> この表現は、少なくとも部分的に、一般的に誤解されています。ヘブル語の形容詞 mishman(複数形:mishmanim、משמנים)は、語根 shaman(複数形:shamanim、שמן)から派生したもので、文字通りには「肥えた」という意味ですが、強さや富の感覚で用いられることも多く、この箇所でもその意味で使われています(イザヤ書 10 章 16 節、「たくましい戦士たち」を参照)。私たちが「帝国」と訳している言葉は、ヘブル語の名詞 medinah(מדינה)で、アラム語からの借用語です。ヘブル語では「州」を意味しますが、主にバビロニア帝国とペルシア帝国の州であったユダに当てはめて使われています。単独で使用される場合、この単語は「都市」を意味するという証拠があります。また、ここでは定冠詞が付けられていないため、固有名詞と見なさなければなりません。つまり、「<普通の>都市」ではなく「<都(みやこ)としての>都市」、すなわち、帝国の首都、そして帝国そのものを意味します(これは、タルガム(Targums=アラム語の解釈)において、ローマとコンスタンティノープル(Constantinople)の両方について、この名詞が基本的に用いられています)。この点において、NASB 訳の「その領域で最も肥えた場所(複数 places) the richest places of the realm」は、多くの訳の中でも最も正確な意味を捉えている訳と言えるでしょう。

たちが知っていることと一致しています。ヨーロッパとイスラエルを「征服」するための複雑な一連の軍事行動は、準備と達成にかなりの時間を要することはほぼ確実です。ヨーロッパでそのような長期にわたる戦争が起こることは、艱難期の前半において、特に獣による七王国の掌握に続いて南部同盟に対して二回の作戦があることからして、聖書の記述とは一致しません(特に、[ダニエル 11 章 25-30 節](#)と [11 章 40-43 節](#)を参照)。

### 艱難期前半に起こる事柄



上の図は、艱難期前半の出来事の流れと、(42 ヶ月という期間の制約の中での)ここでの主題であるその主要な出来事のおおよその時期や期間を知るのに十分なものでしょう。獣が最初にバビロンを占領し、その後、復活したローマ帝国の最初の七カ国を確保するための準備には、最低でもそれぞれ 6 ヶ月を要すると思われます。反キリストが新たに獲得した北の帝国が、南の同盟国に対して行う二つの大きな作戦も、艱難期前半に起こると預言されていることを考えると、(そのような作戦は歴史的に冬の間に行われ、その前の夏の間は組織化と準備に必要な期間となるでしょう。)このような時間的制約を考慮すると、このく七つの国への覇権はクーデター的なものであり、しかも多面的なものであることが分かります。

反キリストが欺瞞的な手段を使って、故郷バビロンで権力を獲得するシナリオはすでに説明しました。七つの国で同時に同じようなことを行うには、上記のように、人類史の中で前例のない、並外れた協力が必要であることは間違いありません。上層部の協力は別としても、このような偉業が可能かどうかは大いに疑問です(これら七カ国とその影響範囲にそれぞれ大規模な同調支持者の第五列<裏切り集団のこと>があると仮定しても)。実際、[ダニエル 11 章 24 節](#)が示唆するシナリオだけが、一見して実現可能なシナリオであり、黙示録に詳細が記されていないことから、反キリストが復活したローマ帝国を初めから支配していると示唆するものです。これは、私たちがすでにダニエル書で得た情報と一致しています。

十の角はこの国(すなわち、第四の獣であるローマ)から起る十人の王である。その後



ひとりの王(すなわち、反キリスト)が**起る**。彼は先の者と異なり、かつ、**その三人の王を倒す**。  
(ダニエル書 7章 24節)

この聖句は、三つの王国の軍事的敗北を強調することによって、先の七つの王国の場合には、そのような明白な軍事的征服がないことを必然的に示唆しています。しかし、また上記の聖句は、反キリストと七つの王国の関係を説明するのに役立つ、重要な詳細も提供しています。つまり、この七人の並外れた独裁者が自国の権力者になること(その後、弱い近隣諸国に対し覇権を確立する)ことは、反キリストがバビロンを占領するよりも**前である**ということです。つまり、事実上、獣が自らの政治的地位を確保すると同時に、復活したローマの七カ国は、次々と摘み取られるのを待ち受ける熟したリンゴのようなものになるのです。

反キリストの宗教的・政治的運動が艱難期の数年前から展開されていたと想定しても(それによって、七つの国々における多くの類似した運動の展開と、その後の指導者による権力の掌握を位置づけることができるようにすること)、これらの七人の王がどのようにして、あるいはより正確に言えば、なぜ、その権力と権威を獣に引き渡す備えをしているのかを完全に説明することはできません。これが、歴史的に知られているあらゆる行動と相反するものであることを、いくら強調してもし過ぎることはないでしょう。したがって、この七人の王たちは、見た目以上に獣と共通点があり、彼らの悪魔と悪魔の手下との関わりは、世界で最も邪悪な暴君や独裁者の場合よりも、過去に見たどんなものよりはるかに密接で、はるかに際立ったものであると言わざるを得ません。悪魔崇拝を積極的に実践していたとしても、悪魔の息子の意志に自己犠牲的に従うこうした態度を完全に説明することはできません。したがって、この異常な一連の出来事に対する最善の説明は、彼らも反キリストと同じくネピリムであり、反キリストのように悪魔自身の化身ではないにしても、悪魔の最も信頼する手下たちによって創り出されたということになるでしょう。このようにしてのみ、歴史的なローマの領土内で、七人の異なる個人が権力の座に急浮上した偶然の一致を説明できるようになります。また、この七人が圧倒的な強制力が存在しないにもかかわらず、その並外れた権力を放棄し、他の人物に譲り渡そうとすることも説明できます。この七人は獣と同様に、邪悪な存在であり、邪悪な者の意思と計画を遂行することを生得的に約束しているとしか考えられません。この解釈は、聖書の中で獣とこの七人の間に見られる密接な関係を説明します。例えば、1) [黙示録 13章 2節](#)では、獣は「獅子のような」口を持つと言われていますが、これは、獣と明らかに類似している七人の王を指す複数形です。2) 七人の王は、[黙示録 13章 3節](#)で七つの同じような頭を持つものと描写されていますが、そのうちの一つの頭には致命的な傷があります。このような描写は、ここで取り上げている反キリストと「八番目にして七人のうちのひとり」であるこれらの王(すなわち、彼が独立した皇帝として見られているか、復活したローマの化身として見られているか)によって異なりますが：[黙示録 17章 11節](#)との類似性を示すものでもあります。3) 前述の通り、それぞれの頭に刻まれている言葉が全体として、獣を偽キリストと特定する「神を汚す名」となっているという事実([黙示録 13章 1節](#))、4) これらの角のうち一本の角として反キリストが識別され([ダニエル 7章 24節](#))、最初は小さく([ダニエル 7章 8節](#))、次第に大きくなること([ダニエル 7章 20節](#))。そして最後に、5) ダニエルと黙示録でのこの描写のすべての例で、七つの頭と十の角がすべて同じ獣に内在する部分であるということです。したがって、これらの指導者間(および獣とグループとしてのこれら七人)の目に見える連携や、彼らが代表し利用する政治的、社会的、宗教的現象に目に見える類似点があったとしても、真実は、彼らの前例のない協力にはもっと深く不吉な理由があり、偶然に一致する利己心の領域すべてが、実際にはもっと暗い目的の一致によって動いていることになるのです。七王国の掌握が、軍事作戦というよりむしろ勝利のパレードのように見えるのは、何よりもこのためです(最近の歴史では、ナチス・ドイツのオーストリア併合におお



よそ類似しているかもしれません)。

このような例外的な(あるいは神から見れば極悪な)指導者であっても、現在の民主主義国が独裁的な支配に身を委ねるに足る動機を与えるには、何らかの外的あるいは内的危機が必要でしょう。ヨーロッパとそれ以外の地域の政治体制が劇的に変化する最も可能性の高い根拠は、イスラム世界において、反西洋的なジハードの意図を持つグループと指導者が引き続き台頭し、力をつけていくことです。さらに、ダニエル書第 11 章に示された記述は、明らかに、統一された北のブロック(反キリストのバビロンが率いる復活したローマ帝国)が、同様に統一された南(イスラム教徒)に対して、二つの大規模で最終的に決定的な攻撃を繰り広げるといふものでした。この南の同盟を象徴する三つの角は、後に反キリストの統一ローマの一部となります([黙示録 17 章 12-17 節](#))。したがって、南の三本の角が当初は反-獣の動きを示し、後には手の平を返したように一致して反キリストを支持することの最も合点の行く説明は、この同盟を率いる「南の王」によって権力を得ていた者達の、その王への忠誠は実は見せかけであったということです(参照: [ダニエル 11 章 25-30 節](#); 以下の第 V 部と第 VI 部の議論を参照ください)。

艱難期の始まる前に中東で台頭したカリスマ的な人物を想定することは、聖書が記述している出来事の最も可能性の高い解釈と言えます。この解釈は、西側諸国が急進的な政治改革を行うほどの脅威が生じたことを説明する一方で、三人の王が最初は獣に敵対し(少なくとも外見上は)、後に(最初の後援者が破られた後)進んで獣に服従するという形で台頭することを説明するものです。この記事を書いている時点では、イスラム世界全体を支配するようなカリスマ的指導者の出現は、悪夢のようなシナリオです。このような「マハディー」、すなわちイスラムの「救世主」が出現し、その周りにイスラムの勢力が結集することによって、おそらくヨーロッパとイスラエルで短期間のうちに劇的な政変を引き起こし、その後さらに急速にバビロンと復活したローマ帝国の支配に反キリストがさらに急速に台頭することを説明できる一つの出来事となるでしょう。指数関数的に増大するテロリズム、西欧に敵対する世界のこの一部の統一による明白な軍事的脅威の出現(その征服に固執さえする)、そして中東の石油に依存する経済の崩壊に直面して、一連の指導者(そしてその後、特にある指導者)の出現が、たとえ自由の喪失という犠牲を払ってでも、生存の唯一の希望として歓迎されることは容易に理解できるでしょう。イスラエルが最初の南方同盟からの攻撃の主要な標的になるという事実は、西側、特に米国の多くの人々に、国内外でのこの軍事独裁体制の発展を支持する動機をさらに与えることになるでしょう。このシナリオで最も皮肉で危険なことは、獣とその七人の王の宣伝マシンによれば、彼らが権力を握ることになる来たるべき紛争は、偽キリスト「マハディー」に対するキリスト教とイスラエルの防衛戦争として宣伝されることになるでしょうが、一方、この取り組みを支持する人々は、真の反キリストに肩入れすることになるでしょう。聖書によれば、すべての信者とすべてのユダヤ人を抹消させることこそ、彼の主要な目的のひとつです。

## IV. 反キリストのイスラエルとの同盟

イスラエルという国は、長い歴史の中で、主によって形成され、溶鉱炉であるエジプトから取り上げられ、ご自分の特別な民、国家として頂いたにも関わらず、主に頼らず、勢力を争い合っている帝国の力に頼ることを選んだことが何度もありました。人間の視点からすると、イスラエルの歴史の大半がそうであったように、

対立し合う帝国の間に位置する比較的小さな国は、どちらかの勢力に味方するか、少なくともある一方の勢力に脅かされた時には、他方のもう一方の勢力に助けを求めることが得策であるように思われます。しかし、イスラエルは神の特別な所有物であり、「神の目の玉」(ゼカリヤ 2 章 8 節)であり、裏切ることになる人間の力や善意ではなく、神御自身の力と憐れみに頼ることが、常に神の意志であったのです。

…エジプトに頼るのではなく(イザヤ 20 章 5-6 節; 30 章 1-7 節を参照)。

助けを得るためにエジプトに下り、馬にたよる者はわざわざいだ。彼らは戦車が多いので、これに信頼し、騎兵がはなはだ強いので、これに信頼する。しかしイスラエルの聖者を仰がず、また主にはかゝることをしない。(イザヤ書 31 章 1 節)

…また、アッシリヤにでもなく(エゼキエル 23 章 5-8 節参照)。

(12)あなたたちはこの民が(アッシリアとの)同盟[を解決策]と呼ぶものを／何一つ(アッシリアとの)同盟[を解決策]と呼んではならない。彼らが恐れるもの(=シリアと同盟を結んだ北の王国の脅威)を、恐れてはならない。その前におののいてはならない。(13)万軍の主をのみ、聖なる方とせよ。あなたたちが畏るべき方は主。御前におののくべき方は主。(新共同訳イザヤ書 8 章 12-13 節)

…バビロンにでもない(エゼキエル 23 章 14-21 節参照)。

彼らがあなたの親しみ慣れた人たち(すなわち、バビロン人)を、(主が)あなたの上に立ててかしらとするとき、あなたは何を言おうとするのか…(エレミヤ 13 章 21 節前半)

モーセとエリヤが主導し、144,000 人が手助けするリバイバルとは対照的に、イスラエルの国家そのものは主が戻られるまで、世俗の手に握られたままとなります。そして、主から離れて安全を求めるこの同じ傾向によって、イスラエルは(七つの王国の一つとして)まず獣と手を組み、次に艱難期の終わりに、艱難を通過するバビロンと共に獣に対して反逆を企てて(このシリーズの第五部参照)艱難の苦しみを通過することになります。現在信仰を持っている人たち、そして将来、ユダヤ人への例外的な伝道活動によってイエス・キリストの十字架を受け入れる多くの人たちを除けば、イスラエルは非常に世俗的、物質主義的な国家であり、艱難期においてもそうであり、他のローマ連合国と問題を抱えることがあっても、バビロンとは良き同盟国なのです(イザヤ 2 章 7-8 節; アモス 8 章 11 節を参照)。特に、反キリストの最初の権力基盤として、艱難期の初期に重要な役割を果たすのはバビロンです。(同盟の掛け声をあげても、それが自らの破滅となる)南部同盟の拡大による脅威の激化に直面し、特にイスラエルがバビロンと反キリストに救いを求めることは、今日でも存在する両国の特別な関係からして、容易に想像できます。

この動向の一つとして、またその結果として、ユダヤ人の支配者が現れ、その権力と影響力は、艱難期初期に主権を握るヨーロッパの他の並外れた「王」たちと肩を並べるでしょう。このユダヤ人の支配者を、艱難期後半に登場する反キリストの偽預言者(黙示録 13 章 11-18 節)と混同しないようにしなければなりません。このユダヤ人の支配者は七人の王の一人です。ゼカリヤ書 11 章は、「愚かな」(または「神を信じない」)

「価値のない」(または「悪い」)羊飼いと描写しており、イスラエルでの出来事の観点から、この時代の詳細に多くの光を当てている預言書でもあります。

(4)わが神、主はこう仰せられた、「ほふるべき羊の群れの牧者となれ。(5)これを買う者は、これをほふっても罰せられない。これを売る者は言う、『主はほむべきかな、わたしは富んだ』と。そしてその牧者は、これをあわれまない。(6)わたしは、もはやこの地の住民をあわれまないと、主は言われる。見よ、わたしは(すべての)人をおのおのその牧者の手に渡し、おのおのその王の手に渡す。彼らは地を荒す。わたしは彼らの手からこれを救い出さない。(7)わたしは羊の商人のために、ほふるべき<英訳「苦難を受けるべき」>羊の群れの牧者となった。わたしは二本のつえを取り、その一本を恵みと名づけ、一本を結びと名づけて、その羊を牧した。(8)わたしは一か月に牧者三人を滅ぼした。わたしは彼らに、がまんしきれなくなったが、彼らもまた、わたしを忌みきらった。(9)それでわたしは言った、「わたしはあなたがたの牧者とならない。死ぬ者は死に、滅びる者は滅び、残った者はたがいにその肉を食おうがよい」。(10)わたしは恵みという[名の]つえを取って、これを折った。これはわたしがもろもろの民と結んだ契約を、廃するためであった。(11)そしてこれは、その日に廃された。そこで、わたしに目を注いでいた羊の商人らは、これが主の言葉であったことを知った。(12)わたしは彼らに向かって、「あなたがたがもし、よいと思うならば、わたしに賃銀を払いなさい。もし、いけなければやめなさい」と言ったので、彼らはわたしの賃銀として、銀三十シケル(枚)を量った。(13)主はわたしに言われた、「彼らによって、わたしが値積られたその尊い価を、宮のさいせん箱に投げ入れよ<新改訳IV「陶器師に投げ与えよ」>」。わたしは銀三十シケル(枚)を取って、これを主の宮のさいせん箱<英直訳「陶器師の畑」>に投げ入れた。(14)そしてわたしは結びという第二のつえを折った。これはユダとイスラエルの間の、兄弟関係を廃するためであった。(15)主はわたしに言われた、「おまえはまた愚かな牧者の器を取れ。(16)見よ、わたしは地にひとりの牧者を起す。彼は滅ぼされる者を顧みず、迷える者を尋ねず、傷ついた者をいやさず、健やかな者を養わず、肥えた者の肉を食らい、そのひずめをさえ裂く者である。(17)その羊の群れを捨てる愚かな牧者はわざわいだ。どうか、つるぎがその腕を撃ち、その右の目を撃つように。その腕は全く衰え、その右の目は全く見えなくなるように」。(ゼカリヤ11章4-17節)

この預言において、ゼカリヤは神の命令により、たとえ話を演じます。その主な適用は、苦難の時代にモーセとエリヤの働きを通してイスラエルに宣言されるイエス・キリストに関する福音のメッセージの拒絶です。この箇所における真理に対する主な反対勢力は、七番目の王、すなわちイスラエルの指導者であり、その王国は七本の角の最後のものとなります(この文脈における「王」と「牧者」がしばしば、反キリストとして誤認されていますが、違います)。

1-3 節: この寓話は、明らかに権力者が卑しめられる過程について取り上げており、キリストの再臨に先立つ艱難期に適用されます([イザヤ 2 章 11 節](#)～、[5 章 15 節](#); [イザヤ 13 章 11 節](#); [エゼキエル 21 章 26 節](#)を参照)。

4-6 節: この節は、この章の預言的な情報を、イスラエルとそれ以後の大艱難期に適用するためのもの



のです。「ほふられるべき羊の群れ」とは、艱難期に入る運命にある人々を指しています。「買い手」は反キリストとハルマゲドンの侵略軍で、その侵略の際にイスラエルの地を完全に破壊します(エゼキエル 38-39 章参照)。「売り手」は第 7 番の王であるイスラエルの指導者とその取り巻きです。彼らはこの活動に対して「責任を問われない」、つまり、ハルマゲドンで滅ぼされるまで、その恐ろしい行為の報いを受けないことを意味します。モーセとエリヤ、そして 144,000 人の働きにもかかわらず、この時点でイスラエルの大多数の人々が福音を拒絶したため、艱難期の半ばで憐れみの期間は終わり、大艱難が起こります。この間、イスラエルの地は、その歴史上最も困難な時期を経験し、主は「もはやあわれみを持たれない」([エレミヤ 30 章 7 節](#)参照)のです。そして、イスラエルだけでなく、「全人類」にも同じパターンの激しい艱難が訪れます。

7-8 節: 上述した概要の後、この節は 7 年間の後半が始まる前の期間に私たちを連れ戻します。「苦難を受けるべき」群れとは、福音を拒否したために苦難を受ける人々のことです。ゼカリヤは、この神から指示された行動において、良い羊飼いであるキリストの予型(象徴的代表)として行動しています。キリストは、モーセとエリヤという二本の杖を御自身のものとして持ち、イスラエルの住民にご自身とまもなく訪れるご自分の王国を提供しようとしているのです。この寓話は、旧約聖書の預言によく見られるように、初降臨と再臨を凝縮しています。教会の時代は、預言的に言えば、十字架とメシアの千年王国との間の幕間の期間です。二つの杖の名前、「恵み」と「結び」はそれぞれ、私たちが持つべき喜びと愛、そして(モーセを通して旧約を制定し、新約を予見したことに見られる)神の民がイエス・キリストを通して神によって与えられる関係、そして、(エリヤの統治の宣言の役割について先に見たように)イスラエルの契約の国としての主による再確立における回復と破れたものの「縫合」を意味しており、この国を通してメシアが世界を統治することになります。モーセとエリヤの働きは「このようにして」(7 節)、これらの真理がイスラエルにもたらされる手段となります(ただし、ほとんどの人はキリストの再臨の時点までこれらを受け入れることはないでしょう)。「牧者三人」が滅ぼされるとは、艱難期中期に反キリストによって南の同盟が打ち破られることを指しています。この外的脅威が取り除かれた後、反キリストはモーセとエリヤに戦いを挑み、イスラエルの大多数は公然と前者<反キリスト>を選ぶようになり、つまり、主とその代表者を「嫌悪」するようになり、主は彼らのことで「悲嘆に暮れ」、それによって慈悲の時代が終わりを告げます。これは大艱難期の始まり(すなわち、その「最初の月」(注:「一ヶ月」ではありません;[創世記 1 章 5 節](#)、「第一日」=「最初の日」参照)に起こります。皮肉なことにイスラエルにとって、マハディの侵略の脅威が取り除かれることによって、反キリストとその政策に対するすべての抑制がなくなり、その結果、彼とその父である悪魔のイスラエル破壊の計画の実行が始まるのです。

9-14 節: この節では、警告と憐れみから、裁きと艱難への移行の詳細が述べられています。神の真理、神の恵み、神の御子を拒んだ羊たちを、神は「もはや牧さない」とされ、彼らは、神の代わりに選んだ者、反キリストとその現地代表である第七番の王の厳しい扱いに耐えなければならなくなるのです。「契約」の破棄は、神に選ばれた民が受けるべき慈悲の期間の終了を意味し、その最初の象徴として、それを仲介したモーセ(すなわち「喜び」と名付けられた杖)の死が挙げられます。艱難期の前半のラッパの裁きは警告、大艱難期の鉢の裁きは懲罰であることを見てきたように、厳しい艱難に移行する七年間の後半が始まる前のイスラエルに対する神の憐れみも、ここに見ることができるのです。そして、イスラエルから保護が取り除かれると、同じ苦難と罰が「すべての民」に襲いかかるのも不思議ではありません。大艱難期は、イスラエルと世界への証人であるモーセが取り除かれた「その日」に始まるからです([黙示録 11 章 13-14 節](#)と [11 章 15-19 節](#)を比べてみてください)。ゼカリヤは、主イエス・キリストを象徴する者として、この二人の証人の拒



絶を、主ご自身に対する拒絶として描写するように言われています。銀貨 30 枚の預言は、一方ではメシアとその働きに対して、また他方ではモーセとエリヤに対する「解雇手当の値」であり、イスラエルの不信心者が、自分たちのために死んでくださった方と、自分たちのために捧げられた主のしもべの多大な犠牲に対して、低い評価をしていたこと、そしてこれからもすることが明白に示されているのです。これは主の初降臨の時に実現したことであり、ここでは再臨前のモーセ(とエリヤ)に適用されています。どちらの場合も、この解雇手当は主自身ではなく、主の裏切り者、初降臨の時はユダに(まさに文字通りの意味で)、再臨の時は(二人の証人に対する戦争に協力する)第七王に対して与えられています<sup>55</sup>。ここで述べられている「兄弟関係」の崩壊は、歴史的には、信じる「ユダ」と信じない「イスラエル」の分裂を指しています。執筆当時、北の王国は遠い昔のことでしたので、イスラエルはモーセとエリヤのメッセージを拒否する不信仰者を象徴的に表し、「ユダ」は福音のメッセージに応答し、大迫害が始まる前の艱難期中期に、エリヤ(とモーセ)が仲介した回復の「結び」の務めに応答して砂漠に逃げ込む人々を指しています([黙示録 12 章 1-17 節](#)参照)。

[15-17 節](#)：この無価値な(あるいは「神を信じない」)羊飼いは、実は、第七番目の王であり、艱難期のイスラエルの支配者で、初めから反キリストの連合の一部でした。彼は民を搾取し、必要な時に民を守らないので、その利己的な手口はこの節で明らかです([エゼキエル 34 章](#); [エレミヤ 23 章 1-4 節](#); [ゼカリヤ 10 章 2-3 節](#); [ヨハネ 10 章 1-18 節](#)を参照)。このように、彼が非難されるのは避けられないでしょう。

エゼキエル書 21 章には、反キリストの仲間として艱難期にイスラエルを支配し、虐待する第七の王も言及されています。

(25)汚れた悪人であるイスラエルの[邪悪な]君よ、あなたの終りの刑罰の時であるその日が来る。(26)主なる神はこう言われる、(王家の)かぶり物を脱ぎ、冠を取り離せ。すべてのものは、そのままには残らない(すなわち、彼とその政権は退けられる)。卑しい者は高くされ、高い者は卑しくされる。(27)ああ破滅、破滅、破滅、わたしはこれをこさせる。わたしが与える権威をもつ者(=メシア)が来る時まで、その跡形さえも残らない。(エゼキエル 21 章 25-27 節) ([ヨハネ 5 章 22 節](#); [使徒行伝 10 章 42 節](#); [第一ペテロ 4 章 5 節](#)参照)

第七番目の王は、他の六人の王と(そしておそらく残りの三人の王とも)非常によく似たパターンで台頭し、統治し、そして滅亡します。この羊飼いは、彼を支持する羊たちにとって夢の王者のように見え、外部の脅威が迫っているためか、あっという間に自国の最高権力者になり、他の追随を許しません。しかし、いったん権力を握ると、自分の部下を顧みず、自分の利益のために(そして間違いなく自分の側近の利益のために)容赦なく搾取します。この王がハルマゲドンの作戦でイスラエル(第七番目の王自身の国)を滅ぼすときも、反キリストを支持するように、他の下位の王たちも反キリストの意向が、それぞれの民族の真の利益より間違いなく優先されると予想されます。

---

<sup>55</sup> 「陶器師に投げる」という表現は、「共同墓地」の購入を意味します([マタイ 26 章 14-15 節](#)、[27 章 3-10 節](#)参照)。共同墓地は、主要な町であればどこにでもあり、鉢の粘土が採掘されていました。このような墓地は、長い年月を経て、大小さまざまな穴が多数開き、粗末な埋葬以外には何の役にも立たなくなります。

聖書は、艱難期のイスラエルの王に関する具体的な情報に加えて、その時代に反キリストとイスラエルが結んだ契約や同盟に関する具体的な情報も与えています。

彼(すなわち、反キリスト)は[残りの]一週(すなわち第七十週目である艱難期)の間多くの者と、堅く契約(ヘブル語ではベリートברית, beriyth)を結ぶでしょう。そして彼はその週の半ば(すなわち、艱難期中盤の直前)に、犠牲と供え物とを廃するでしょう(すなわち、モーセとエリヤを排除し、神殿の儀式を中断します)。また荒す者が憎むべき者の翼に乗って来るでしょう(すなわち、神から見捨てられ、疎外されます)。こうしてついにその定まった終りが、その荒す者(すなわち、神からの疎外と反逆の原型であり原因となる獣)の上に注がれるのです。(ダニエル 9 章 27 節)

獣はこの「契約」の「君」であり(ダニエル 11 章 22 節)、この「契約」はダニエルが言及した「聖なる契約」と混同してはいけませんが(ダニエル 11 章 28 節, 11 章 30 節, 11 章 32 節)、イスラエルと世界に対して自分をメシアとして表現する方針の一環として、反キリストがこの契約をエレミヤ書 31 章 31~33 節の「新約」の履行として描写することは明らかです。この獣は、イスラエル(および世界)で、二人の証人の働きに感銘を受けながらも、まだキリストに身を委ねることをためらっている人々を取り込むのに成功するでしょう。(ヨハネ 5 章 43 節を参照)。もちろん、実際には、これはイスラエルとの条約を擬似メシア的な装いで巧みに「包装」したものに過ぎません(政治とメディアの支配を通じて、神殿と神殿儀式の再確立を自分の手柄にしようとして試みます)。したがって、この条約は、反キリストが「征服者メシア」としてイスラエル(およびキリスト教)をマハディの南部同盟から守るといふ、自身に関するある種の虚像を政治的に強調するものとなるでしょう。(これは、背教と獣のエキュメニカルな宗教連合の進展を促進する上で重要な役割を果たすプロパガンダ戦略です)。ダニエル 9 章 27 節のモデルに基づいて、この聖句からさらに推測すると、反キリストはこれと同じ正式な連合プロセスによって、元の帝国の七カ国すべてを支配するようになるでしょう。これらの条約は、従属国の独立を明示しているかもしれませんが、実際には反対勢力を武装解除するための手段に過ぎません。この聖句が明確に詳述しているイスラエルの場合と同様に、他の六つの初期加盟国(より正確には連合国)に関しても、獣とその従者たちがサタンの世界帝国を強化するにつれて、当初の法にかなって与えられた権利や自由が(イスラエルの場合と同様に)事実上無効化されると思われます。この(したがってこれらの)契約は「有力者たち」(ヘブル語でラビームרביים, rabiym<「多くの」の意)と言われていることもまた、非常に参考になります。反キリストのバビロンと手を組むすべての連合は、まず強力な寡頭制によって支配されるようになり、獣と特別な関係を持つ「王」が統治するようになることを示しています。

また、この条約も他の条約も期限付きではないことにも注意が必要です(上記のダニエル 9 章 27 節の修正訳を参照)。しかし、獣とイスラエルとの関係は、ある点で特別です。偽メシアである獣にとって、イスラエルは地上支配の自然かつ究極的な中心地なのです。獣の頭の一つだけが致命傷を負っていることと、すべての角が頭の一つについていなければならないこと(ダニエル 7 章 8 節, 7 章 20 節参照)は、<獣が>七つの国の連合のうちの一つの国と緊密で「特別な」関係があることを示しています(黙示録 13 章 1-3 節, 17 章 1-11 節) その国とは、間違いなく、大艱難期に反キリストが居住するイスラエルとなることでしょう(ダニエル 11 章 45 節; 第二テサロニケ 2 章 4 節)。

## V. 第一次南部戦争

[復活したローマを征服した後、反キリストは]不意にその州の最も肥えた所に攻め入り、その父も、その父の父もしなかつた事をおこない、その奪った物、かすめた物および財宝を、人々の中に散らすでしょう。彼はまた計略をめぐらして、堅固な城(すなわち、南の同盟の三つの下位連合)を攻めるが、ただし、それは時の至るまでです。(ダニエル 11 章 24 節)

反キリストが復活したローマの七つの王国に権力を確立する正確な時間軸は与えられていません。しかし艱難期の前半という時間的枠から、獣が南の同盟に対して最初の進攻を行う可能性が高い時期について、十分な判断を下すことができます(先の図 1 参照)。獣がバビロンで台頭して権力を強化するのに約 1 年、復活したローマを確保するのにさらに 1 年かかるとすると、それは 2028 年の秋になります。中東での軍事作戦で、このように大規模で広範囲な侵略は、真夏の暑さと嵐が始まる前に主要な戦闘活動を終了しておくことが賢明です。したがって、この時点から始まり、2029 年の夏ごろに終わる 6 カ月間が、この最初の作戦に必要な軍の集結、戦場への移動、戦闘行為、成果の整理、部隊の帰還のための最も可能性の高いシナリオです。獣のすべての侵攻が、まさにこのような類まれな迅速さによって特徴づけられていることを考えると、この期間がさほど非現実的短さではありません(黙示録 13 章 2 節の翼を持つヒョウを参照)。この時間枠に、同じ長さの第二次戦闘期間の始まりが翌年(すなわち、2029 年の秋に始まる)と想定すると、その終了点(すなわち、2030 年の夏)が、聖書が預言しているように、大艱難期の開始と完全に一致します(特にダニエル 11 章 29～31 節を参照)。

その[四つの]角の一つから、一つの小さい角(すなわち、反キリスト)が出て、南に向かい、東に向かい、麗しい地(すなわち、イスラエル)に向かって、はなはだしく大きくなり、(ダニエル 8 章 9 節)

ダニエル 8 章 9 節は、シリアを勢力圏とするセレウコス王国の支配者アンティオコス・エピファネスの台頭を直接の対象として預言されているものです。しかし、これまで見てきたように、旧約聖書の預言の多くは、近い将来の出来事と遠い将来の出来事の両方に適用されており、艱難はその主要な適用対象です(近い将来の艱難期の比較対象を与えると同時に、究極の艱難期についての詳細を提供するためのものです)。<sup>56</sup> また、アンティオコス・エピファネスは、イスラエルに侵入し、自らを神であると宣言し(それゆえ「エピファネス< (神の) 権化 >」と呼ばれる)、神殿を冒瀆し、反キリストの将来の行動を予見させるような、反キリストの特に重要な代表的予型であることを先に見てきました。したがって、上記の聖句には、獣の軍備拡張の一般的なパターンとその背景にある動機の両方が読み取れるのです。反キリストはすでに北方(西方ではバビロン)を支配しているので、この時点では南方と東方とイスラエルだけが完全に支配されていないのです(彼はイスラエルの世俗的支配者を自分の陣営に取り込んでいますが、モーセとエリヤの働きもまだ続いており、絶頂期を迎えているでしょう)。ここで言及されている南への拡大は、ダニエル書第 11 章の二回に及ぶ侵攻による南部同盟の征服を意味し、東への拡大は、まだ獣の直接統治下でない世界の残りの四

---

<sup>56</sup> このシリーズのパート 1、IV.1.b.「主の日」パラダイム」を参照



分の一を徐々に占領し支配することを意味しています。ハルマゲドンの時には、東方も反キリストの支配下に置かれています(黙示録 16 章 12-14 節; 鉢の審判によって一時的に支配が中断されたことを参照。[ダニエル 11 章 44 節](#))。ダニエル 8 章 9 節のパターンには、世界支配の戦略だけでなく、真の神への礼拝を悪魔とその息子である反キリストへの礼拝に置き換え、それに伴って神の聖なる民であるイスラエルを滅ぼすという、その主目的も見て取れます。

したがって、南部同盟は、反キリストの世界支配を阻む最後の主要な軍事的障壁となります。バビロン、復活したローマ、そして獣の足元にドミノのように倒れる世界の国々の連合がもたらす経済力、政治力、軍事力の組み合わせは、艱難期の半ばまでに他のすべての主要な抵抗を取り除くこととなります。特に、南方に対する二つの作戦は、その規模、迅速さ、成功によって、獣に反対するのではなく、獣に加わるという時流に乗る氣勢が生じ、不信心な世界全体が一致して「だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか」と叫ぶようになります。(黙示録 13 章 4 節)。

(3) またオリブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとにきて言った、「どうぞお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか」。(4) そこでイエスは答えて言われた、「人に惑わされないように気をつけなさい。(5) 多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう。(6) また、戦争と戦争のうわさを聞くであろう。注意していなさい、あわててはいけない。それは起らねばならないが、まだ終りではない。(7) [その終わりの前に] **民は民に** (すなわち、一般論として、セム系汎国民に対するヤペテ系汎国民)、**国は国に敵対して立ち上がるであろう** (すなわち、バビロンと復活したローマに対する南部同盟;[ダニエル 11 章 25-30 節](#); [11 章 40 節](#) 参照)。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう。(8) しかし、すべてこれらは産みの苦しみ (すなわち、艱難期の前半) の初めである。(マタイ 24 章 3-8 節)

上記の主の言葉には、艱難期前半の事件の多くは南北の対立についてで、その深刻さが見て取れます(ここで平行して起こる「ききんと地震」は、これまで見てきたように、この時代を特徴づける神の警告である「裁きのラッパ」の略称です)。この時期に世俗世界の注目を集める「戦争と差し迫った戦争」は、主が特別に言及するほど重要です。したがって、この発言の組み合わせから、獣の連合とマハディの同盟という、地球上で最も重要な二つの「国」と「王国」の間の戦いの規模が巨大になることを読み取ることができます。

彼(=北の王、反キリスト)はその勢力と勇気とを奮い起し、**大軍を率いて南の王を攻めます。南の王もまたみずから奮い、はなはだ大いなる強力な軍勢をもって戦います。**(ダニエル 11 章 25 節前半)

戦争の歴史の中で、二つの連合が特定の対決のために、これほど例外的で比較にならないほど強力な軍隊を動員することは稀です。1914 年 8 月<に勃発した第一次世界大戦>がこの預言とおおまかに類似しているかもしれませんが、動員された人数、距離、利用可能な火力、紛争の動機となるイデオロギー的熱狂、そして全体的規模(すなわち、世界のほぼ二つの象限がこの巨大な闘いに従事していること)から見て、この戦闘は、後に続く戦闘(すなわち、[ダニエル 11 章 29-30 節](#); [11 章 40-43 節](#)の第二作戦とハルマゲド

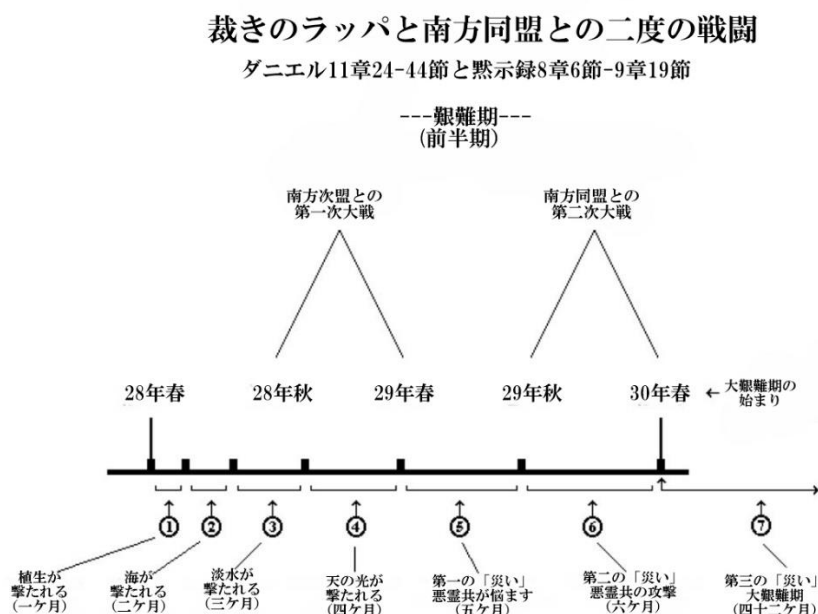


ン作戦)以外に凌ぐものはないと予想されます。

これらの戦闘に関連する他のすべての問題に加えて、両陣営は、これまで見てきたように、艱難期前半<三年半>の後半全期間中に行われるラッパの裁きと遭遇することになります。政治的な面では、反キリストが偽メシアとして、これらの裁きのラッパを、世界がイスラエルを支持しなかったことに対する神の不興(もちろん、彼自身もイスラエルの最終的な破壊を念頭に置いています)として不信者に「演出」し、彼の「聖戦」に人々の感情を揺さぶり、正当性を与えることは少なくとも予想可能です。自分の神を知る人々は、この間違っただけの解釈に惑わされることはなく、モーセとエリヤが 144,000 人と共に、真実を受け止めようとするすべての人々のために、真実を明らかにすることを確信することができます。実際面では、裁きのラッパの出来事は明らかに日常生活全般を混乱させ、軍事作戦はなおさらでしょう。

以下の図は、二つの戦闘と神の裁きの警告のタイムラインを比較したもので、裁きのラッパの第三と第四が最初の戦闘と、裁きのラッパの第六が二回目の戦闘と一致することを示しています。

<図 2: 裁きのラッパと南部同盟との二度の戦闘>



上の図から明らかなように、第一次大戦の初期段階は、小惑星「にがよもぎ」によって世界の淡水が破壊された後(世界はまだその影響に苦しんでいる最中)に行われ、その戦争のほぼ中盤に世界の天の光が撃たれます(その影響は戦争の残りの期間中続く)。ちょうどアハブ王が神の裁きによる水不足の時に、軍事資産を守るために多大な努力をし、苦しんでいる住民は犠牲にしたように(列王記上 18 章 2-6 節)、(多くの死者が出ると言われている: 黙示録 8 章 11 節) 第三のラッパの裁きによって地球の住民がどんな困難に遭遇しても、おそらく反キリストと南の同盟の指導者は、その膨大な軍隊に深刻な障害がかからないようにすることでしょう。ただでさえ人を寄せ付けない地形に、さらに新鮮な水を長距離輸送するという物流上の問題は別として、第三のラッパがこの戦争の動向に深刻な影響を与えることはないと思われます(実際、ダニエル書 11 章にはそのような兆候は見当たりません)。四つ目のラッパによる裁き、すなわち、この戦闘

の期間中、四ヶ月間にわたって起こる著しい光の減少は、実際には、この遠征が双方に課す前例のない行進の妨げとなり得る暑さを、確実に軽減する効果があるかもしれません。いずれにせよ、この戦争と獣の側での成功裏の終結に関する聖書の証言から、最悪の場合、これら二つの裁きの悪影響は両者に等しく影響し、いかなる場合でも、バビロンと復活したローマの軍による成功の終結を妨げることはない、と結論づけることができます。

南の三国同盟に対して、反キリストが放つ二つの戦略の主な違いの一つは、第二次大戦の戦略が圧倒的に優れた海軍(ヘブル語を参照:[民数記 24 章 23-24 節](#); [ダニエル 11 章 30 節](#), [11 章 40 節](#)以下に取り上げる)の決定的な介入によって特徴づけられるのに対して、この最初の遠征は明らかに、上記で示唆されたように完全な地上侵攻で行われるという点です。これにはいくつかの理由があります。第一に、まだ半独立状態にある世界の多くの地域は、この時点ではまだ反キリストの支配下に置かれつつある段階で、南半球の人口と権力が集中する世界の主要な海洋の沿岸地域を確保するために海軍力の大幅な投入が必要となるということです。バビロンと復活ローマの海軍と水陸両用軍はこの任務で頭がいっぱいで、この最初の作戦では大きな影響を与えられないと思われます。第二に、復活ローマと南部同盟の本質的な地理的条件を考慮すると、反キリストはこの任務を完了するために二回の作戦を必要とし、この最初の、主に地上作戦は、南方の軍隊の初期の戦力低下と、後続の作戦で打撃を与えるために必要となる基地の設置と資源の準備のための主要地勢の確保を戦略目的としている可能性も高いと思われます。また、第一次作戦を北から南への完全な陸上作戦として行うことで、第二次作戦の大規模な海軍作戦を予想外の展開とすることで、戦略的な奇襲の機会を作り出すこともできます。

しかし、彼(=南の王)に対して、陰謀をめぐらす者(=従属する南の三王)があるので、これ[北の王]に立ち向かうことができません。すなわち彼の食物を食べる者たち(=彼の側近)が、彼を滅ぼします。そして、その軍勢は押し流されて、多くの者が倒れ死ぬでしょう。このふたりの王(=反キリストとマハディ)は、害を与えようと心にはかり、ひとつ食卓(=和平会議)に共に食して、偽りを語るが、それは成功しません。[大艱難期の]終りはなお定まった時の来るまでこないからです。(ダニエル 11 章 25-27 節)

戦術的な考慮はさておき、上記の節は、この最初の対決で南が失敗し、北が勝利する主な理由は、反キリストの手先の南の指導者(すなわち、南の三人の従属王で、彼ら自身が十本の角の一部であり)によるマハディに対する裏切りがあることを明確に示しています。このことは、南軍が反キリストの数的に劣る軍(技術的には多少優れているかもしれないが)よりもかなり強く、もし戦いが同じ土俵で行われたなら、結果はかなり違っていただろうことを示唆しています。この三人の王の内輪が、この第一次大戦でマハディの希望をどのように損なうのか、具体的には語られていませんが、推測することは難しくありません。悪い助言(たとえば、北側で獣にとって後方支援の状況を容易にするような決定的な行動を促し、南側にとってはより困難にするような助言)の数々、士気の低下、誤った噂の流布、獣にマハディのすべての動きと計画を知らせ続けること、そして、必要な作戦を適切な勢いで意図的に実行しないことによって、この三人は獣に決定的な優位をもたらすといったことも考えられます。

この時点で留意すべきは、彼の戦略的撤退と南側との和平条約の結果、おそらくその時点ではイスラエルに獣の大規模な進軍は起こることはないだろうということです。(この展開は明らかに、反キリストが世界

本部をエルサレムに移す第二次作戦の終了を待つこととなります；[ダニエル 11 章 41 節](#)を参照）。開戦事由が比較的脆弱であることから、この最初の作戦におけるイスラエルの主な役割は、単に自国を守ることであり、おそらくはもっと南に位置する王国同盟(すなわちエジプトおよびその同盟国)の軍からの直接的介入を阻止する役割も果たすだろうと推測できます。しかし、だからといって、獣がこの機会を利用して、まだかなりの戦力が周辺にあるうちにイスラエルにとどめを刺し始める可能性がないとは言えません。この時期のイスラエル国内の政治情勢は、極めて緊迫したものになると思われます。一方では、世俗的なユダヤ人の多数派が非常に強力な指導者(実際、「十人の王」の一人)を権力の座に就かせることとなります。しかし、他方では、モーセとエリヤの働きと彼らが指揮する 144,000 人の世界的伝道が、この時点で頂点に達し、＜少数派であっても＞かなりの数の信者が生まれるでしょう。

南部同盟の敗北によって、「無価値な羊飼い」(すなわち、イスラエルの首相)の多くの熱烈な支持者たちでさえ、その獣と彼の帝国に対してやや熱意を失うことになるでしょう。同時に、反キリストもイスラエルとの対応において、より制約を感じなくなるでしょう。南の敗北は「お膳立て」されているので、全世界が彼の手完全に落ちるまであとわずか一歩となり、イスラエルを守るための「十字軍」などという大義名分の必要性は、まもなくなくなります。この時点で、獣はイスラエルに対して、その国家とユダヤ人に対する彼の究極の計画について客観的観察者にほとんど疑念を抱かせないような、予備的措置を取るための余裕を得ます。彼はイスラエルを保護する必要性に基づいて、世界的な政治運動を展開してきましたが、実際にはイスラエルを破壊することが、常に彼の父であるサタンの計画だったからです。

**彼(=反キリスト)は大なる財宝をもって、自分の国に帰るでしょう。しかし、彼の心は聖なる契約にそむき、ほしいままに事をなして、自分の国に帰ります。(ダニエル 11 章 28 節)**

ここで使われている「聖なる契約」という言葉は、モーセとエリヤと 144,000 人の回復の働きによるユダヤ人に対して、およびメッセージに応じるイスラエルにいる人々の心と手に対しての両方に施される神の恵みと真理を指しています([ダニエル 11 章 30 節](#)；[11 章 32 節](#))<sup>57</sup> この働き自体を妨げる反キリストの広範囲に及ぶ努力はすべて、この時点で失敗することがわかります(主が二人の証人に、直接的な脅威を退ける十分な能力を与えて下さるためです：[黙示録 11 章 5-6 節](#)；[列王記下 1 章 9-15 節](#))。しかし、この聖句は、第二次大戦が終了した後、猛烈な迫害が始まることを表しています。この時、獣と無価値な羊飼いが、真の信者に対してどのような威嚇をするかは想像するしかありません(おそらく、[ダニエル 8 章 10 節](#)、[8 章 23-25 節](#)、[11 章 32-35 節](#)で予告されているようなことも含まれるでしょう)が、救いのメッセージを率直に受け入れていないすべての人々に、特別な圧力がかかると考えることはできます。このような戦略には、「神を知る人々」と、神殿の復元された儀式にさまざまな程度の感情的な愛着を抱く人々との間に、溝を広げるという利点があります。後者は、イエス・キリストとの真の関係のために、この世での安定した生活を放棄することを望まないでしょう。しかし、[ダニエル 11 章 28 節](#)で言及されている反キリストの行為に伴う(特に南からの脅威が減少している時に起こる)人々の個人の自由の制限や伝統的儀式の変更・制限は、イスラエルの多くの人々に受け入れられず、次に述べるような影響を与えるでしょう。

---

<sup>57</sup> この表現について、M.F. Unger は次のように述べています。「真の神の知識と崇拝を奉ずるユダヤ民族の定め(すなわち「聖なる契約」)」、『Commentary on the Old Testament』第 2 巻(シカゴ、1981 年)1684 ページ。

## VI. 第二次対南部戦争

この研究の大部分は、ダニエル書 11 章に従って、艱難期の前半の世界の出来事を時系列に追ってきました。この時点で、上記の II.3 項で述べた同章の関連部分の要約を復習することにしましょう：

21 節：獣の経歴の概要その 1： 獣の台頭と謎のバビロンの掌握手段。

22 節：獣の経歴の概要その 2： ハルマゲドンへの動員およびハルマゲドンでの滅亡。反キリストが預言された「契約の君」であることの確認。

23 節：謎のバビロンを支配するための反キリストの手口が再び繰り返して述べられることによって、時系列に戻る。

24 節：七つの王国(復活したローマ)の掌握； 権力の強化と南部同盟への攻撃準備。

25-28 節：三国(南部同盟)に対する最初の侵攻。

29-30 節前半：南方に対する第二の侵攻。

30 節後半-35 節：反キリストの暗殺未遂、彼の蘇生が推定される、およびその結果としてのイスラエルへの迫害。

36-39 節：大艱難期における反キリストの治世。

40-43 節：艱難期前半の南部同盟に対する反キリストの勝利が再び述べられている第二次作戦の詳細な説明。

44 節：第五の鉢の裁きの後、自分の王国を確保するために、反キリストがイスラエルから離れる。

45 節：ハルマゲドンでの反キリストの敗北。

ここで特に重要なのは、第二次大戦が時系列的に 29-30 節 a で記述され、その後、40-43 節でより詳細な説明のため再度取り上げられていることです。これは聖書でよく見られる手法ですが(上記 II.3 項参照)、ここでこの手法が使われた理由は二つあります。一つは、[ダニエル 11 章 29-30 節 a](#) の簡潔な記述により、その後続く文脈が、艱難期の半ばにおける最も重要な展開(すなわち、二人の証人の務めの終了、「荒らす憎むべきもの」の設置、大迫害の開始、大艱難期の決定的な出来事)に注意を向けさせることです。同時に、後で、第二の侵攻についてのより詳細な記述が再び挿入される余地を残しています。[ダニエル書 11 章 40-43 節](#) に記されている特定の地理的詳細は、一見すると混乱を招く可能性もありますが、この後の文脈で、南の征服の結果生じる状況、特に獣の勝利の後に続く搾取、広大な領土征服からエドム、モアブ、



およびアンモンの一部が除外されるなどの状況(「荒らすものが設置される」時にイスラエルから逃れる信者の避難場所:[マタイ 24 章 15-20 節](#); [黙示録 12 章 13-17 節](#))という重要事項を説明することです。

(29)この期間中に、彼は戻って来て南を攻撃しますが、この[二度目の]作戦の状況は、最初の作戦のようなものではありません。(30a)キッテム(すなわち西側の「バビロン」)の船が、彼と共に攻撃するからです[それで彼は勝利する]。(英文直訳 [ダニエル 11 章 29-30a 節](#))

終りの時になって、南の王(すなわちマハディ)は彼(すなわち獣)と戦います。北の王は、戦車と騎兵と、多くの船をもって、つむじ風のように彼を攻め…([ダニエル 11 章 40 節 a](#))

これらの両方の箇所における反キリストの海軍力への言及は注目に値します。上記の最初の箇所では、「キッテム」は文字通りキプロス島の住民を意味しますが、聖書では「諸島」すなわち世界の西半球の国々を指す一般的な用語として最もよく使用されています。(イザヤ [23 章 1 節](#), [23 章 12 節](#); [エレミヤ 2 章 10 節](#); [エゼキエル 27 章 6 節](#) <口語訳では「クプロ」新改訳では「キテム」>; すなわち「異邦人の島々に分かれて」いるヤペテの西側の子孫を表わしています:[創世記 10 章 4-5 節](#))。つまり、この「キッテムの船」とは、バビロンとその西側の同盟国の船を指しています。したがって、ここで言及されているのは、獣の海軍であり、獣に敵対する外部勢力のことではありません(これはしばしば誤って解釈されています)<sup>58</sup>。この点を理解すれば、[ダニエル 11 章 30 節](#)において、これらの船が、この第二次作戦の「状況において異なる」点である理由が明白になります。この「彼<反キリスト>と共に」<南部同盟に>攻撃する海軍<キッテムの船>の優位性が、獣の勝利の決定的な要素となるのです。上記の二つ目の聖句は、この解釈と完全に一致しています。なぜなら、反キリストの水軍は、三重の戦闘兵器のリストに挙げられた究極の要素(その重要性を強調)であるばかりでなく、その数量において唯一例外的であることがわかります(つまり、確かに多数の「戦車と騎兵」に比べても、彼の船は「多い」のです)。この二つの聖句は、二つ目の戦いが反キリストの海軍力の即断的な軍事行動によって勝利することを確認しており、その武力が行使される正確な方法は、ベオルの子バラムの最後の託宣に示されています。

(23)彼[バラム]はまたこの託宣を述べた。「ああ、神が定められた以上、だれが[大艱難期を]生き延びることができよう。(24)キッテムの海岸から舟がきて、アシュルを攻めなやまし、エベルを攻めなやますであろう。そして彼[反キリスト]もまたついに滅び去るであろう」。(民数記 [24 章 23~24 節](#))

イスラエルを呪おうとしたバラムが、イスラエルの宿敵である反キリストによる迫害について、このように預言することになるのは意外なことではありませんが、バラムの最後の託宣([民数記 24 章 14-24 節](#))の文脈は、実は「来たるべき日<「終わりの日」新改訳/「後の日」口語訳>」([民数記 24 章 14 節](#))についての情報を伝えることを目的としています。この記述と、これらの預言の他の終末論的要素([民数記 24 章 17 節](#)の紛れもない救世主の「星」と「つえ」を参照)に加えて、上記の [23 節](#)で、将来の「エベルの苦難」の原因とな

<sup>58</sup> これらの船は、獣の勝利([エゼキエル書 30 章 9-12 節](#))にも重要であり、聖書の中で再臨の際に反キリストの海軍部隊が破壊されることが強調されていることは、この点を裏付けています([詩篇 48 章 4-7 節](#)、[イザヤ書 2 章 16 節](#)、[同 33 章 21-23 節](#)、[同 43 章 14 節](#)、参照:[詩篇 72 章 10 節](#))。

る「謎の男」(ve-gam hu'i: 「これこそが、その者だからです」)を特定するために使われたヘブル語の用法は、同様に反キリストを特定したダニエル書の重要な箇所で行われていることを想起させます(つまり、[ダニエル 11 章 22 節](#)後半, ve-gam naghidh berith. 「なぜなら、彼こそが、契約の君だからです。」: [ダニエル 9 章 27 節](#)参照)。これらの事実から、この<民数記 24 章 24 節の>「キツテムの船」とダニエル 11 章に登場する「キツテムの船」の間には、ほぼ確実なつながりがあることが分かります。バラムの預言はまた、この侵略の正確な場所、すなわち現在のレバノン、シリア、イスラエルを通るという重要な情報を提供しています。アシュルは、エベルがイスラエルの先祖であるように、アッシリアの先祖であり(それぞれ[創世記 10 章 22 節](#)と [11 章 10-31 節](#)参照)、地中海の東部海岸線全体がこの前例のない侵略の焦点となることは明らかです。

これらの聖句が示唆している大規模な水陸両用攻撃の目的は、上記の[ダニエル 11 章 40 節](#)前半に記述されている南の王の行動を考慮すれば、十分に明白です。この聖句では、南の王は北の王に対して南から北の方向に「突き進む」ことが述べられています。この作戦は、その領域の上部、つまり反キリストの王国との国境近くまで、軍の大部分(全部ではないにしても)を移動させることを必要とするものです。これは、最初の作戦開始以前から、反キリストの予想と計画であったと推測されます。この時までには、マハディは間違いなくさらに大きな軍隊を動員し、前回の作戦と、(地上に配置された軍隊のみを考慮した場合)さらに大きく有利になったはずの戦力比に基づいて勝利を確信しています。南の王が北に突き進んだ後、[ダニエル 11 章 40 節](#)は獣の反応を迅速かつ猛烈なもの(ヘブル語テキストによれば、つむじ風のような猛烈さ)としており、反キリストのすべての作戦を特徴づける豹変した迅速さが再び想起されます([黙示録 13 章 2 節](#))。南軍が畏におびき寄せられると、獣は史上最大の水陸両用侵攻を開始し、敵を背後から断ち切り、包囲して全滅させることを目的として、畏を掛けるのです。こうして、反キリストの直接の支配下でない最後の主要で独立した軍事力を一撃で消滅させるのです。

この海よりの侵攻はシリア、レバノン、イスラエルに向けられるので、この作戦の最終戦の一般的な場所は、イラク、シリア北部、トルコ、イラン南部のどこかである可能性が高いです。このことは、聖書の他の箇所とも一致しています。上に見たように、バビロンの王ネブカデネザルは、聖書的に反キリストの予型であり、預言されているバビロンの王です。イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書(特にイザヤ 19-20 章、エレミヤ 46 章、エゼキエル 29-32 章)の預言の中で、また、歴史上のネブカデネザルとエジプトのパロの対立が、終末の時代におけるバビロンの反キリストと(その政治的中心がエジプトの:[ダニエル 11 章 42 節](#)参照)南同盟のマハディとの対立を予言的に暗示していることも見て取れます。<sup>59</sup> したがって、マハディとその南部同盟に対する反キリストの作戦行動は、これらの預言に見られる聖書の描写と全体的に類似していると言えます。

エジプトはナイル川のようにわきあがり、その水(すなわち、南部同盟の軍)は川々のようにさかまく。そしてこれは言う、わたしは上って、地をおおい、町々とそのうちに住む者を滅ぼそ

---

<sup>59</sup> また、エゼキエル書第 31 章では、アッシリアを象徴する木が「諸国の支配者」(すなわちネブカデネザル=反キリスト)によって倒されるというたとえ話があり、それに続いてエジプトを象徴する木にも同様の運命が訪れるという内容があります。これは、反キリストが南同盟(エジプトを中心とする)を征服する前に、獣のバビロンによって復活したローマが征服されるという内容と並行しています。

う。(エレミヤ書 46 章 8 節)

エレミヤは南の王の「突撃」と北の王の「つむじ風」([ダニエル 11 章 40 節](#)参照)の結果として起こるであろう決戦を「ユーフラテス川のほとり」の南の同盟領の北部に位置づけ、上に述べたように、決戦の焦点は現在のシリア、イラク、トルコ南部近辺であることが最も有力です(参照:[エレミヤ 46 章 2 節](#), [46 章 10 節](#)参照)。

(3)「大盾と小盾とを備え、進んで戦え。(4)騎兵よ、馬を戦車につなぎ、馬に乗れ。かぶとをかぶって立て。ほこをみがき、よろいを着よ。(5)わたしは見たが、何ゆえか彼らは恐れて退き、その勇士たちは打ち敗られ、あわてて逃げて、うしろをふり向くこともしない、——恐れが彼らの周囲にあると主は言われる。(6)足早き者も逃げることができず、勇士ものがれることができない。**北の方、ユフラテ川のほとりで**彼らはつまずき倒れた。(エレミヤ 46 章 3-6 節)

こうした<南部同盟の>大敗北の状況下で、獣の軍勢がこの勝利を活かさなうことは考えられません。

(40b) …[獣は][南の同盟の]国々にはいって行って、みなぎりあふれ、通り過ぎるでしょう。(41)彼はまた美しい国(すなわち、イスラエル)にはいります。また彼によって、多くの者が滅ぼされます。しかし、エドム、モアブ、アンモンびとらのうちのおもな者(すなわち、エドムとモアブに隣接する歴史的アンモンの南半分)は、彼の手から救われましょう。(42)彼[反キリスト]は国々にその手を(南部同盟の土地に)伸ばし、エジプトの地も免れません。(43)彼は金銀の財宝と、エジプトのすべての宝物を支配し、(北アフリカを代表する)リビヤびと、エチオピアびと(=スーダン・エチオピア)は、[服従して]彼のあとに従います。(ダニエル 11 章 40b-43 節)

ここでエジプトが強調されているのは、南部同盟の柱となるものだからです。リビアは北アフリカ全体、クシュは東アフリカを表していると理解してもよいでしょう。南の三国の北、東、南東は名前こそ出てきませんが、41 節の「多くの者」<欽定訳では「many lands(多くの地/国)」>に該当し、ここに「三つの角」の崩壊の預言が成就されるのです。この点で、第一次大戦で獣の勝利に大きく貢献したこれらの副王国の三人の王は、獣がそれぞれの領域で力を強化する際に、獣にとって非常に有用であることも覚えておくべきでしょう。さらに、この印象的な軍隊の驚くべき敗北による「群衆心理効果」は、世界中に影響を及ぼすでしょう。特に反キリストが「エジプトの宝物」、すなわち南同盟の全領土の天然資源を手中に収めた後に起こるであろう、指数関数的な力の増大を考慮すると、対抗手段を少しでも考えていた人々の希望を打ち砕くことになるでしょう。エジプト、ひいてはマハディの指導の下にエジプトと手を組んだ三国同盟のすべての国々の敗北の余波は、聖書で多数取り上げられており、総合的に惨めな敗北の様子が描かれています。南部の人々の希望が大きく打ち砕かれることになり、間違いなく耐え難いものとなるでしょう(特にエゼキエル 30 章参照;イザヤ 19-20 章、エレミヤ 46 章、エゼキエル 29-32 章を参照)。

(2)「人の子よ、預言して言え、主なる神はこう言われる、嘆け、その日はわざわいだ。(3)その[さばきの]日は近い、主の日は近い。これは雲の日、異邦人の滅びの[さばきの]時である。(4)つるぎがエジプトに臨む。エジプトで殺される者の倒れる時、エチオピアには苦しみがあり、そ

の財宝は奪い去られ、その基は破られる。(5)エチオピヤ、プテ、ルデ、アラビヤ、リビヤおよび[エジプトの]同盟国(すなわち、南の王の同盟国すべて)の人々は、彼らと共につぎに倒れる。(エゼキエル 30 章 2-5 節) ([エゼキエル 20 章 45-48 節](#)参照)

獣の手によってエジプトが完全に打ち負かされることは、最終的に、一つの益をもたらします。それは、エジプト人と南の国の多くの人々が、現代の「パロ」であるマハディーが無力であることを知り([エレミヤ 46 章 17 節](#); [エゼキエル 32 章 2-15 節](#)参照)、代わりに主に助けを叫び求めることになり、その祈りは輝かしい主の帰還の際にも、またその後にも答えられることになるからです([イザヤ 19 章 4-25 節](#))。結局のところ、この第二の決戦における南の敗北は、三本の角の反逆と、獣が罫を仕掛けた後に起こる南の陣営の大規模な内紛に大きく起因するでしょう([ダニエル 11 章 26 節](#)を参照)。

(2)わたしはエジプトびとを奮いたたせて、エジプトびとに逆らわせる。彼らはおのその兄弟に敵して戦い、おのその隣に敵し、町は町を攻め、国は国を攻める(すなわち、三国同盟が分裂する)。(3)エジプトびとの魂は、彼らのうちにうせて、むなしくなる。わたしはその計りを破る。彼らは偶像および魔術師、巫子および魔法使に尋ね求める。(4)わたしはエジプトびとをきびしい主人(すなわち反キリスト)の手に渡す、荒々しい王([ダニエル 8 章 23 節](#)参照)が彼らを治めると、主、万軍の主は言われる。(イザヤ書 19 章 2-4 節)

最初の戦争のときとまったく同様に、この場合もラッパの裁きによって軍事行動に何らかの支障が生じる可能性があるでしょう。特に、この第二次大戦については、六番目の裁き、すなわち「第二の災い」が当てはまります(上の図 2 を参照)。<sup>60</sup> 荒らし回る悪霊どもの軍勢が世界にもたらす大混乱は、この戦争にも少なからず影響を与えるでしょう。しかし、第一次大戦の場合と同様に、獣の軍勢にとって最悪のシナリオであっても、おそらく敵である南同盟の軍隊と同等程度の混乱を被るというものでしょうが、彼の軍勢はこのような攻撃から、ほとんど影響を受けないのではないかという見方もできます(そうでなければ、事実上「サタンがサタンを追い出す」という事態になるからです。[マタイ 12 章 26 節](#)参照)。いずれにしても、第二次大戦の結果は反キリスト側の圧倒的な勝利となり、彼の世界支配の最後の最大の障害が除かれることとなります([エゼキエル書 31 章 16-18 節](#))。

(3b)…そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、(4)また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拝んで言った、「だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか」。(黙示録 13 章 3b-4 節)

## VII. 反キリストの暗殺と蘇生の様子

そして、彼は撃たれて[死んだかのようになるが]、回復します。それゆえ、彼は聖なる契約に憤

---

<sup>60</sup> この六番目のラッパの裁きについては、このシリーズのパート 3AIII.6 で取り上げています。



り、[はるか南方の地からイスラエルに]戻るときに[それに対して]行動を起こします(すなわち、モーセとエリヤを排除し、いけにえを終わらせます)。(英文直訳ダニエル 11 章 30b 節)

南軍に劇的な勝利を収めた直後、獣は暗殺計画の対象となり、「致命傷」を負いますが、奇跡的に「治療」されます(黙示録 13 章 3 節参照)。上の半節の重要語句はヘブル語の動詞形 nich'ah ニクサ(נִכָּה)です。この難しい形については、辞書編纂者や注釈者の間で様々な意見がありますが、ここでは時間とスペースの関係でנִכָּהを詳しく説明できませんが、ここにあるのは「打つ、叩く、叱る」という意味の動詞 cha'ah ケ-ア(כָּה)のニフアル態(すなわち受動態)完了形である可能性が高いです(「彼は撃たれる」という訳となります)<sup>61</sup>。

ゲセニウスのヘブル語辞典でも、同様にこの形が כָּה から派生していると述べていること、また、彼や他の注釈者(特に O. Zöckler や T. Lewis の『ランゲ・シリーズ』)も、この動詞のニフアル態が、ヨブ記 30 章 8 節の形「נִכָּהִים」(すなわち、「その地から追い立てられ、鞭打たれる」。ゲセニウスはこのダゲシュ・フォルテが音便であると理解しています。)で用いられていると述べています。この動詞を厳密に感情的な意味で解釈する訳(すなわち、反キリストが「落胆する」が、肉体的に傷つかないと解釈する)は、確固たる証拠なしに行われています。よく類似例として引き合いに出される二つの箇所、すなわち、詩篇 109 篇 16 節とエゼキエル 13 章 22 節には、いずれも「心」という区切りを示す言葉が含まれており、影響を受ける場所、つまり「打撃を受ける」場所を特定しています。そのため、<それらの場合>打撃の適用は物理的な領域から感情的な領域へと移ります。ダニエル 11 章 30 節には、同様の区切りを示す言葉は見当たりません。したがって、ほぼ同じ語根のנִכָּהの意味が、文字通り「打つ」「撃つ」という意味であり、関連する語根がしばしば同じ意味を持つというヘブル語のよく知られた現象を考えると、多数の証拠が、反キリストが文字通りの意味で打撃を受けるという解釈を支持しており、単なる心理的に挫折するという解釈とは対照的です<sup>62</sup>。

ダニエル 11 章 30 節に書かれている反キリストの傷と一見奇跡的な回復は、黙示録の 13 章と 17 章に書かれている同じような情報に対応するもので、旧約の並列した内容です。私たちは、(前に指摘した黙示録の一般的な年代順の進行に従って)これらの節を適切な場所で順次取り上げる方法を続けますが、ここで聖句の四つの関連箇所を検討することは有益でしょう。

その(すなわち獣の)頭の 하나가、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった。(黙示録 13 章 3 節 a)

そして、(獣の偽預言者は)先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拝ませた。(黙示録 13 章 12 節)

さらに、先の獣の前で行うのを許されたしるし(つまり、「しるし」)で、地に住む人々を惑わし、

<sup>61</sup> 聖書ヘブル語では、一連の将来の出来事の前に置かれる waw から未来についての表現が導かれることがよくありますが、ここでは 29 節から始まっています。(yashubh ubha'イシューバ、וּבֹא יִשׁוּב <彼は、またやって来る>)。

<sup>62</sup> ウルガタ聖書の訳文:percutietur(撃つ)参照。

かつ、つるぎの傷を受けてもなお生きている先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた。(黙示録 13 章 14 節)

あなたの見た獣は、昔はいた(すなわち、「存在していた」)が、今はおらず(すなわち、「存在しない」ようになった)、そして、やがて底知れぬ所から上ってきて(すなわち、一方ではローマが復活し、他方では反キリストの明白な復活があって)、ついには滅びに至るものである。地に住む者のうち、世の初めからいのちの書に名をしるされていない者たちは、この獣が、昔はいた(すなわち「存在していた」)が今はおらず(すなわち「存在しなくなり」)、やがて来るのを見て(すなわち、反キリストについては復活し、帝国について再興されるように見えて)、驚きあやしむであろう。(黙示録 17 章 8 節)

これらの聖句をどう解釈しようとも、反キリストがここで「復活」していないことは確かです。復活した主だけが現在永遠の肉体を持っており、主の再臨の時に教会が復活するまでは、他の誰もそうではありません(その時、獣は火の池に入れます：[黙示録 19 章 20 節](#))。「蘇生」の問題は、もっと難しい問題です。一方では、悪魔が自分の息子を一時的にでも生き返らせるような前例のないこと、つまり真の「蘇生」を行うことは、神の許可なしには不可能です。<sup>63</sup> 一方、上に引用したヨハネの黙示録の四つの箇所は、少なくとも極度に異常な物理的復活を示唆しており、最後の箇所である[黙示録 17 章 8 節](#)は、説明するのが最も難しいケースです。なぜなら、この聖句は復活したローマに第一義的に適用され、その延長として獣にも適用されるのですが(黙示録 13 章では、第一義的適用と第二義的適用の関係が逆転しています)、一方に当てはまることは他方にも当てはまるはずで、「あった(すなわち、「存在した」)、そして、いない(すなわち、「存在しなかった」)、そして再びその場に「存在するようになる」という言葉は、最も強調されており、文字通りの死からの復活(すなわち、霊が体から明確に離脱し、また戻ること)として解釈する以外にないほどです。

この暗殺計画の結果、反キリストが実際に死亡するか、あるいは、実際の死と蘇生とほとんど区別がつかないほど劇的でトラウマ的な臨死体験をするかは別として、この「致命傷」から獣が回復したことに対する一般市民の反応から、彼の死の正真性と彼の生還の奇跡的な性質が、不信心な世界によって真実かつ事実として受け止められることは明らかです(世界の驚きとその結果として拝むようになります：[黙示録 13 章 3 節 b-4 節](#)参照)。また、普通の人間であれば、疑いなく致命的な外傷が、獣にとっては必ずしもそうではないことも、比較的容易に理解することができます - 彼は結局、完全な人間ではないのですから。反キリストは天使の父を持つので、人間なら必ず倒れるような傷にも耐えることができます。私たちはネピリムの研究から、そのような生物には驚異的な身体的特性があることを知っています。そして、普通の人間なら死んでしまうような状況でも耐えられるという彼らの能力が、神が大洪水を引き起こし、地球をあんなに深く、あんなに長い間覆った理由の少なくとも一部であると思われます。<sup>64</sup> ですから、世間では反キリストが避けがたい致命的な傷を負い、「死に至るまで打たれた」ように見えるかもしれませんが、他のすべての場合では致命的なこの傷も、彼の場合は致命的に近いものでしかない可能性が確かにあるのです。

---

<sup>63</sup> この点についてコメントをいただいたバーニー・ブランケンシップ氏に感謝いたします。

<sup>64</sup> サタンの変遷シリーズの第 5 部「裁き、回復、そして置き換え」III.1「サタンの大洪水以前の人間システムの純粋さに対する攻撃(ネピリム)」参照

ダニエル書と黙示録の次の文脈から、獣がこの傷の慢性的な後遺症に苦しむという証拠はありません(獣を打つ剣の一撃によって頭に残る傷跡以外には)。それどころかこの事件は、獣にとっては後退というより、むしろ好都合なのです。なぜなら、反論の余地がないように見える方法で「死からよみがえった」獣は、本当に「真のキリスト」であるという考えを助長することになるからです。したがって、この事件の後、反キリストの新しい宗教が悪魔崇拝に変容し、急速に世界を支配するようになるのは偶然ではありません([黙示録 13 章 3-17 節](#)参照)。世界中の不信心者は、この「復活」を本物であり、獣がメシアであることの正当な証拠であると考えてでしょう。しかし、神を知り、イエスの証に固執し続ける信者は、どんなに説得力があっても、このような偽りのしるしに警戒し、本当に復活された主の再臨のときに、自分自身が復活するのを待つようにという主の警告を覚えているのです。

(23)そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、また、『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。(24)にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。(25)見よ、あなたがたに前もって言うておく。(26)だから、人々が『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、へやの中にいる(すなわち、都に隠れている)』と言っても、信じるな。(27)ちょうど、いなくが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう(すなわち、再臨)。(28)死体(すなわち、主)のあるところには、はげたか(すなわち、復活した信者)が集まるものである。(マタイ 24 章 23~28 節)

ダニエル書と黙示録から得た詳細に加えて、この重要な出来事について、さらにいくつかのことが言えます。南の王を征服した獣は、その力の頂点に達し、バビロン、復活したローマ、そして現在占領され協力している南の王国の領土を合わせた力に抵抗でき、地上の残りの独立した勢力の同盟はあり得なくなります。この時点で、現実的には世界が彼の足元にひれ伏しているのです、反キリストの計画はまもなく成功し、エルサレムに本部を移し、そこから神のように世界を支配するつもりなのです([第二テサロニケ 2 章 4 節](#)参照)。

さらに、彼のユダヤ人に対する処遇について、注目すべきことがあります。それは、最初の侵攻作戦の終了時にすでに取られていた「契約にそむき」([ダニエル 11 章 28 節](#))、二回目の侵攻作戦では、イスラエルの地は非常に荒々しく扱われ、侵攻する水陸両用部隊は、イスラエルとその住民を同盟国とは見なさない、という扱いをします(すなわち、「彼らはエベルを苦しめる」)のです：[民数記 24 章 24 節](#);[イザヤ書 33 章 1-8 節](#)：特に [8 節](#)；[哀歌 1 章 2 節](#)，[10 節](#)，[19 節](#)，[21 節](#)参照)。獣の恐ろしい計画、すなわち、イスラエル国との協定を完全に無効にし、神殿儀式の復活を徹底的に廃止するという計画は、おそらく事前に(少なくとも、その側近には知れ渡っているでしょう(その側近の中には、復活したローマの七つの王国の一つであるイスラエルの代表者が含まれているでしょう))。したがって、この暗殺未遂の実行犯はユダヤ人である可能性が高いでしょう(もちろん、この事件全体が反キリストの巧妙な策略でないと仮定しての話です。下記参照)。これは、[ダニエル 11 章 30 節](#)に示されている、反キリストの「打倒」と、その直後にエルサレムで合法的に復活した神礼拝とその関係者に対して放たれる、怒りの間の最も良い説明になると思われます。

そして、彼は撃たれて[死んだかのようになるが]、回復します。それゆえ、彼は聖なる契約に憤り、[はるか南方の地からイスラエルに]戻るときに[それに対して]行動を起こします(すなわち、モーセとエリヤを排除し、いけにえを終わらせます)。(英文直訳ダニエル 11 章 30b 節)



ここで注意すべきことは、この「憤り」と報復は反キリストの中核をなす反ユダヤ主義の表れであり、正当な理由の無い報復であるということです。モーセとエリヤ、そして 144,000 人の働きかけに応じて真にイエス・キリストに従う人々は、神の解決策に焦点を当て、このような暴力行為が、いかに正当化できるように見えても、来たる大艱難期を回避する手段になるなどとは決して考えないでしょう。この時期、イスラエルでは、政治体制は本質的に三つの主要な派閥に分裂することになります。1)反キリストの熱心な信奉者、2)私たちの主の熱心な信奉者、3)愛国者(または「熱狂的信奉者」)で、そのほとんどが、マハディとその軍勢に対抗する、唯一の現世の希望であると思っていた獣を熱烈に支持していた人々です。艱難期が進行するにつれ、第一のグループから第三のグループへの移行がますます多く見られるようになるでしょう([ゼカリヤ書 12 章 3-8 節](#)と[ゼカリヤ書 12 章 10 節](#)を参照)。また、神を心から知る人々は、反キリストが自分に対するこの攻撃への仕打ちとして(しかし、彼の計画は当初からこの行動を取ることでした)「荒らす憎むべきもの」を立てたと同時に、主の命令に従って荒野へと逃げます。したがって、この暗殺未遂は、彼が真の「メシア」であるという主張を裏付けるようなものとなるだけでなく、獣がイスラエルに対して行うことになる厳しい処遇、特にモーセとエリヤに対する戦い、そして復活した神殿礼拝の廃止(ラッパの裁きが向けられる対象ゆえに、ある程度世界的人気を博する行動となるでしょう:[黙示録 11 章 7-13 節](#))を正当化する根拠にもなるでしょう。反キリストは機に乗じて、偽りながら、このような行為を彼らの前で演じるでしょう。最後に、この暗殺未遂事件は、反キリストがマハディの勢力の中核であるエジプトの略奪を指揮している間に起こる可能性が高いでしょう([エゼキエル書 30 章 9 節](#)と[ダニエル書 11 章 30 節 a](#)を参照)。というのは、この事件の後、反キリストは「契約に対する」憤りをもってイスラエルに「戻ってくる」と言われているからです。

## VIII. 「荒らす憎むべきもの」と反キリストの「着座」

南の制圧と暗殺未遂からの回復を経てイスラエルに戻った後、反キリストはイスラエルとの条約を無効にするために迅速に行動します。( [イザヤ 33 章 7-8 節](#) 参照)。獣は、自分を襲ったことを口実に、モーセとエリヤの働きに従う真の信者と 14 万 4 千人に濡れ衣を着せ、二人の預言者に対する「戦争」を始め、新たに復活した真の神への礼拝を止めさせ、悪魔と自分への露骨な礼拝に取って替えようとします([黙示録 11 章 7-13 節](#))。

彼(すなわち、反キリスト)は一週の間(すなわち、第七十週目:艱難期の間)多くの[イスラエルの有力な]者と、堅く契約(ベリート ברית, beriyth)を結ぶでしょう。そして**彼は**その週の半ば(すなわち、艱難期の半ばの直前)に、**犠牲と供え物とを廃する**でしょう(すなわち、モーセとエリヤを排除し、神殿の儀式を中断させます)。また荒す者が憎むべき者の翼に乗って来るでしょう。こうしてついにその定まった終りが、その荒す者の上に注がれるのです」。(ダニエル 9 章 27 節前半)

そして、彼は撃たれて[死んだかのようになるが]、回復します。それゆえ、**彼は聖なる契約に憤り**、[はるか南方の地からイスラエルに]戻るときに **[それに対して] 行動を起こします**(すなわち、モーセとエリヤを排除し、いけにえを終わらせます)。そして**彼は、聖なる契約を捨てた者**



## たちを支持します。(英文直訳ダニエル 11 章 30 節 bc)

このシリーズで前回、モーセとエリヤの働きを取り上げましたが、この二人の預言者に対する反キリストの攻撃は、神がそれを許されるからこそ成功するのです。二人の証人は殺されてから三日半後に生き返り、敵や不信仰な世の人々の目の前で天に召されるのですから、獣による二人の証人の殺害さえも、神が許容された御心の一部であることが分かります。しかし、モーセとエリヤが去ったことでイスラエルでは、獣の熱烈な信奉者と、それまで間違った愛国心から獣を支持していた人々との間の緊張した休戦状態が終わりを告げます。奇跡的な力を持つ二人の預言者が取り除かれると、反キリストは、(上記の聖句が示すように)神殿の山における神への礼拝の儀式をすべて終わらせるのに、時間を無駄にすることはないでしょう。さらに悪いことに、彼は神への崇拜を、父である悪魔への崇拜と、自分自身への崇拜に置き換える計画を実行に移すでしょう。その最初の明白なしるしは、聖書の中で「荒らす憎むべきもの」として知られる忌まわしい偶像が神殿の前に設置されることです。

1. 荒らす憎むべきもの: 反キリストがこの偶像を立てることは聖書に詳細に記されており、ダニエルと主が、獣を特定するための重要な出来事の一つとして言及しています(マタイ 24 章 15-18 節; マルコ 13 章 14-16 節)。

**彼から**(すなわち、来たるべき悪しき者から)軍勢が起って、神殿と城郭を汚し(モーセとエリヤの働きを終わらせ)、常供の燔祭を取り除き、**荒らす憎むべきものを立てる**でしょう。(ダニエル 11 章 31 節)

ダニエルは、聖所を汚すことと神への燔祭を止めさせることをこの偶像の設置と結びつけていますが、これは、その設置場所が実際に神殿の中庭であることを示しています。

**荒らす憎むべきものが、立ってはならぬ所に立つのを見たならば**(読者よ、悟れ)、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。(マルコ 13 章 14 節)

マタイはさらに進んで、この偶像をダニエル書(すなわち、ダニエル 11 章 31 節と 12 章 11 節)で言及された「憎むべきもの」と明示し、これらの預言の明確な識別について疑いを残さないようにしています。ダニエルの言葉から、主の言葉、そして黙示録 13 章の偶像の記述まで、これらすべての箇所は明らかに一つの同じものを指しています。それは艱難期半ばに神殿の内庭に設置される反キリストの偶像のことなのです。

(15)預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべきものが、聖なる場所に立つのを見たならば(読者よ、悟れ)、(16)そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。(マタイ 24 章 15-16 節)

マタイ 24 章 15 節のギリシャ語テキストでは、「聖なる場所」という言葉の前に定冠詞がないので、このフレーズを「聖所」と表現する翻訳は厳密には正しくありません。これは重要です。なぜなら、「聖所」という言葉は、通常、神殿の二つの空間のうち、外側に位置する場所を指し、そこには供えのパンの机、金の香炉、金の燭台(メノラー)のある場所を指しているからです(七十人訳では、出エジプト 26 章 33 節; 28 章 29 節;

[レビ記 16 章 2 節](#)など：[ヘブル 9 章 1-5 節](#)も参照；これらの場合、すべてのギリシャ語で、さらに「場所」という言葉が省かれます。このように定冠詞の省略は、「聖なる場所」という言葉が神殿を指すのではなく、むしろ内庭や「祭司の中庭」([ダニエル 8 章 11 節](#)；[黙示録 11 章 2 節](#)；[使徒行伝 6 章 13 節](#)，[21 章 28 節](#)参照)を指すことを強調する印となっているのです。偶像を見るために神殿に入る必要はないので、エルサレムに住むすべての人が見ることができます。実際、反キリストがエルサレムを支配している 42 ヶ月の間、全世界の人々は獣の像に服従するために神殿の山へ巡礼し、外庭に群がり、そこから、神殿の前の内庭にあるおそらく巨大な偶像が見えるようになります([エゼキエル 8 章 3-5 節](#)を参照)。

(13)また、大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえした。(14)さらに、先の獣の前で行うのを許されたしるしで、地に住む人々を惑わし、かつ、つるぎの傷を受けてもなお生きている先の**獣の像**を造ることを、地に住む人々に命じた。(15)それから、その**獣の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言う**ことさえできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。(黙示録 13 章 13-15 節)

この記述から明らかなように、この偶像は、それを見て、それを拝みに来る不信心者にとって最も印象的なものとなるでしょう。懐疑的で世俗的な現代において、このことは非常に大きなことです。したがって、この偶像は、その寸法において巨大であり、その機能において信じられないほど説得力があり、その言葉において畏敬の念を抱かせるものであることが予想されます。獣を崇拝するためにエルサレムにやって来る、不信心者の頑なな心に恐怖と畏敬の念を抱かせ、獣に対する彼らの信頼を確信させ、獣に対する彼らの忠誠を強めるでしょう。この偶像が与える印象は、偽預言者による奇跡と、獣が世界を征服したと相まって、唯一の真の神を拒絶したすべての人々にとって、悪魔の息子の神性を確信させるのに十分すぎるでしょう。

この偶像の名称である「荒らす憎むべきもの」は、[マタイ 24 章 15 節](#)と[マルコ 13 章 14 節](#)にある私たちの主の言われた言葉のギリシャ語訳 (to bdelugma tes eremoseos; τὸ βδέλυγμα τῆς ἐρημώσεως トウ・ブディグマ・テス・エレモセオス)から直接来ています。その言葉は[ダニエル 11 章 31 節](#)のヘブル語(hashiqutz meshomem; ハシヤコーム חֲשִׁיטִּיץ מְשֹׁמֵם)をそのまま翻訳したものです。この訳は理解できますが、少し誤解を招くもので、ヘブル語の原文のギリシャ語訳でも、「荒廢」は動名詞で、むしろ「荒廢の過程」のような意味になるはずです。これは、[ダニエル 11 章 31 節](#)と [12 章 11 節](#)の分詞の場合は、さらに無視できない事実です。これらの言葉はすべて「憎むべきもの」(すなわち偶像)が引き起こす作用に注意を促しているので、このフレーズは「荒廢をもたらす憎むべきもの」と訳されていた方がよかったです。 [ダニエル 9 章 27 節](#)は、反キリスト自身に全く同じ用語を適用して、「憎むべき」偶像が靈的な意味で「荒廢」をもたらす能力に関して、この言葉の正確な意味を明らかにしています。つまり、恐ろしい偶像崇拜から生じる神からのひどい孤立と分離、その結果、靈的にも物質的にも荒廢をもたらすのです<sup>65</sup>。

そして、彼(反キリスト)は、その憎むべき行いが極めて悪質で、荒廢(すなわち、神からの離反

---

<sup>65</sup> この肉体的・精神的な生活の荒廢こそが、ヘブル語の語根である shamam; שָׁמַם <荒廢をもたらす>の真髓なのです。特に、Jenni と Westermann 著『T.H.A.T.』s.v.、第 2 巻、971 ページのコラムを参照してください。「vom Leben abgeschnitten sein」

と疎外)を引き起こし続けるでしょう。そして最後には、定められたことが、[この]荒廃を特徴とするもの(すなわち、神からの疎外と、反逆をもたらしていた獣)の上に注がれるでしょう。(英文直訳 ダニエル 9 章 27 節 b)

残念ながら、主なる神の御前で偶像を立てることは、イスラエルの歴史の中で前例のないことではありません(列王記下 23 章 6 節参照; [エゼキエル 8 章 3-5 節](#)も参照)。この特別な「憎むべきもの」の特徴は、単なる背教の症状ではなく、この偶像がイスラエル国内の霊的「荒廃」につながり、それが全世界に広がることです([ダニエル 8 章 13 節](#)参照、ここでは背教や「反逆」が「荒廃」につながるとされています)。この偶像に服従することが、艱難期の半ばに反キリストが設立する、獣とサタンの新宗教の核となり、この崇拝への沈黙の容認と自発的な参加が、その後の大迫害をさらに激化させると同時に、世界全体と特にイスラエルを大艱難期そのものである「荒廃の恐怖」(主の再臨に先立って起こる最後の激しい裁きの時期)に陥れることになるのです。

エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡<荒廃-エレモセオス>が近づいたとさとりなさい。(ルカ 21 章 20 節)

ルカによる上記の主の言葉には、「憎むべきもの」の印に加えて、エルサレムから脱出するようこの警告として、第二の印(すなわち、南の敗北に続いて獣の軍隊がイスラエルに集結すること)が与えられています。ここで用いられているギリシャ語「エレモセオス」(ἐρ η μ ω σ ε ω ς)は、[マタイ 24 章 15 節](#)や[マルコ 13 章 14 節](#)で偶像に用いられている「荒廃」という言葉と正確に同じものです。このようにルカの場合にも、反キリストとそれを象徴する偶像への礼拝を中心とする世界的な偶像崇拝のシステムが、エルサレムの中心部に確立されることによって生じる「荒廃」を見ることができるのです。

2. 神の神殿における反キリストの着座: モーセとエリヤの排除と、それに続く偶像崇拝による聖域への冒瀆は、反キリストの無慈悲で人間味の無い本心に則った目的のための準備段階です。すなわち、神の宮に自分の座を設け、自らを真の神であり真の救世主であると世界に向かって冒瀆的に宣言することです。(ダニエル 8 章 11-14 節参照)。

(3)まず背教のことが起り、不法の者[反キリスト]、すなわち、滅びの子(ユダについて記されている[ヨハネ 17 章 12 節](#)参照)が現れるにちがいない。(4)彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する。(第二テサロニケ 2 章 3 節 b-4 節)

この偽りの「着座」の様子と期間は、ダニエルによっても論じられています。

(10)それ[小さな角](すなわち、悪魔の予型でありその化身としての反キリスト)は大きくなって天の軍勢(すなわち、神の家族である人間と天使の両方)に達し、天の軍勢<のいくつか>(すなわち、反キリストが誘惑して背教させることになる信者)と、星のいくつか(サタンが誘惑して反乱させる天使たち)を地に落として、これを踏みつけ(すなわち、悪と結びつく背教や反乱をさせ、そして破滅に至らせる:[ダニエル 7 章 7 節](#), [7 章 19 節](#); [黙示録 11 章 2 節](#)参照)、(11)軍の長(すな

わち、キリスト)に並ぶほどになり、彼から常供のささげ物を取り上げた。こうして、その聖所の基はくつがえされた(すなわち内庭を汚しました)。(12)背きの行いにより、軍勢(すなわち信者)は常供のささげ物とともにその角に引き渡された(すなわち大背教が起こる)。その角は真理を地に投げ捨て、事を行って成功した。(13)わたしは一人の聖なる者が語っているのを聞いた。すると、もう一人の聖なる者が、その語っている者に言った。「常供のささげ物や、あの荒らす者の背き、そして聖所(すなわち、内庭)と軍勢が踏みにじられるという幻は、いつまでのことか。」(14)すると彼は答えて言った、「二千三百の夕と朝が過ぎるまで。そのとき聖所の正しさが確認される[聖なる場所は清められる]」。(新改訳IV ダニエル 8 章 10-14 節)

こうして獣は大艱難期の大部分の間、神の神殿を占領することになります。再臨に先立つ出来事が、それを必要とする時になった時だけ、エルサレムから離れます(ダニエル 11 章 44-45 節;このシリーズの第 5 部を参照)。実際、この反キリストの長期にわたる「着座」は、千年の統治期間中、主イエス・キリストが神殿に住まわれるという、現在の天における、そして来たるべき地上における真の「着座」を模倣しようとする意図的な試みです。神を知る信者たちは、獣が仕組んだ偽りの類似性(すなわち、偽りのメシアが偽りの「王国」を統治する偽りの「新エルサレム」に君臨すること)に欺かれることはありません。イエス・キリストの予型である神の箱が、「ダビデの子」であるソロモンが建てた栄光に満ちた新しい家(すなわち、第一神殿)にて初めて安住の場所を得たように(歴代誌上 17 章 1-6 節)、主こそ、その建設者と居住者の真の神聖な栄光について、誤解の余地を一切残さない方法と過程を経て「第三神殿を再建」する方なのです(ゼカリヤ 6 章 12-15 節参照)。一方、その父である悪魔が神の聖なる山を冒瀆したように(エゼキエル 28 章 18 節)、大艱難期の四十二か月が終わり、主の栄光に満ちた再臨の日が近づくまで、反キリストも聖所を冒瀆し汚すでしょう。

3. 反キリストの出現: (モーセとエリヤが指示し、144,000 人が実行する) 艱難期の前半の警告の働きが終わり、荒廃をもたらす憎むべきものが設置され、まさに神の神殿で反キリストが自らを神として神を冒瀆する着座が行われると、疑い深い人や無知な人でも、この人物が聖書に予言されている獣だとわかることでしょう。これらの出来事によって、反キリストは完全に「露わに」され(第二テサロニケ 2 章 3-8 節)、彼とその父である悪魔の新しい宗教の核となる崇拝に伴う「その名の数」(黙示録 13 章 16-18 節;このシリーズの次の回で取り上げます)は、彼が神の子ではなく、むしろサタンの子であることの最後の、そして揺るがない証拠となることでしょう。この時点から、反キリストは実質的に世界の支配者となり(黙示録 13 章 3-10 節)、エルサレムの神殿山上に新しい本部を置いて、「入信するか死ぬか」という基本教義を持つ世界規模の宗教を設立して、その支配を確固たるものにしようとします。命の書に記されていない人は皆、この要求に屈するでしょう。しかし、何があっても主イエス・キリストに忠実であろうとする人々には、世界の始まり以来、前例のない迫害の時代、大艱難期が始まることになります。

万軍の主はこう仰せられる、見よ、国から国へ災が出て行く。大きなあらしが地の果からおこる。(エレミヤ25章32節)

--「来たる艱難期 第四部: 大艱難期」に続く



## 脚注

1. 来たるべき試練を参照。Part 2B: The Heavenly Prelude to the Tribulation, section III, "The Restraining Ministry of the Holy Spirit" (「聖霊の抑制の働き」)。
2. 来たるべき苦難を参照。第3部A: 艱難の始まり、第二節「大いなる背教」をご覧ください。
3. 3. 聖書の型と反型の理論と適用については、「来たるべき苦難」をご覧ください。Part 1: Introduction, Section IV.1.d, "Typology and Sequence in Old Testament Prophecy" (旧約聖書の預言の類型と順序)を参照。
4. 悪魔の反乱」を参照。第5部「審判、回復、交換」III.2 節「人間の自由に対するサタンのポストディルヴィア攻撃(バベルの塔)」参照。
5. 来るべき苦難を参照。第3部A「艱難が始まる。第七の封印から二人の証人まで」II.3.a 項「無法の謎」の解き放ち」。
6. 6. 大迫害は、艱難時代の後半に起こり、このシリーズの第4部で扱われています。
7. 出エジプト記14章:ファラオの心を硬くする」の2章を参照してください。
8. 8. 「来たるべき苦難」を参照。第1部:序論、IV.1.b 項「『主の日』パラダイム」、IV.2.a 項「終末に関する聖書の出典」を参照してください。旧約聖書。イザヤ書」。
9. 解説については、特に Bevan, E.R., "A Note on Antiochus Epiphanes", JHS 20 (1900) 26-30, and Morkholm, O. Antiochus IV of Syria (Copenhagen 1966)を参照せよ。アンティオコスに関する古代の資料としては、ポリュビオスの『歴史』第24巻、(アポクリファの)第1・2 マカベア記が最も豊富である。
10. 10. ジェロームはダニエル書の注解で、同様にダン 11:21 から始まるアンティオコスに関する議論を反キリストに当てはめるとした。
11. 11. The Interpreter's Dictionary of the Bible (Nashville 1962)の sub voce "Antiochus" を参照。
12. 12. "サタンの種"はサタンに従うすべての人を意味しますが(ヨハネ 8:44 参照)、この箇所は反キリストという人物の中に究極的な成就を見出します。
13. L.S.チェーフアーの C.ラーキン著「霊界」の考察を参照してください。Systematic Theology v.2 (Dallas 1947) 114-117 を参照してください。

14. 悪魔の反乱」を参照。第 5 部「審判、回復、交換」、第 III.1 節、「人間の血統(ネフィリム)の純潔性に対するサタンの先天性攻撃」。
15. 悪魔が神に取って代わろうとする根拠については、「悪魔の反乱」を参照。第 1 部「サタンの反乱と墮落」、特に IV.3「サタンの墮落」節を参照。
16. 海の象徴については、上記のほか、『悪魔の叛乱』も参照。第 2 部「創世記のギャップ」、II.3 節「海」。
17. 悪魔の反乱」を参照。第 5 部「審判、回復、交換」、II.9 節「人類史の七日間の具体的な年表」参照。
18. この二点については、『悪魔の叛乱』(The Satanic Rebellion: 第 5 部「審判、回復、交換」、II.9 項「人類史の 7 日間の具体的な年表」を参照。
19. 来たるべき苦難」を参照。第 1 部:序論、I.2.h「(艱難に言及する)その他の箇所」参照。
20. 20. shiphiphon の原語を確定することは不可能ですが、この言葉の音と感触は、特に文脈の類似性を考えると、注意深い読者に創世記 3:15 の動詞を思い出させることは間違いないでしょう。
21. 21. 反キリストはユダのライオンであると主張しますが、実際は、その父である悪魔(1 ペテロ 5:8)と同様に、正しい者を滅ぼそうとする「カラスのライオン」であり、また光の天使(2 コリ 11:13-15)を装う習慣があります。
22. 22. 実際、イレナイオスはこの二つの聖句のうち後者を、反キリストがダン族から生じるという卓越した証拠としました: "Hieremias . Hieremias ... et tribum exa veniet [Antichristus] manifestavit dicens: ex Dan audiemus vocecem velocitatis equorum eius (Jer.8:16) ... et propter this numatur tribus haec in Apocalypsi cum his quae salvantur" (Adv.Haer. 5.30.2).
23. 歴史的バビロンに関する近い将来の成就と、ここで論じた終末論的な前向き適用に加えて、この預言は、獣の父、指導者、型であるサタンの有史以前の墮落にも関連している。「サタンの反乱」を参照。第 1 部「サタンの反乱」、第 4 節「サタンの性格、罪、墮落」。一般的な聖書予言の多重適用と、特にこの箇所については、このシリーズの第 1 部、第 IV 節「患難の歴史に関する聖書の資料」をご覧ください。
24. この箇所の歴史的なバビロンとサタンの先史時代の反乱への適用については、前記の注釈を参照してください。
25. この暗号と前の暗号は両方とも、「アスバッシュ」と呼ばれるアルファベット暗号によって導き出されたもので、暗号化された文字が、アルファベットの同じ数列の文字を逆に読んで表している(すなわち、アルファベットの端から最初に読むタウは、通常順序で最初のアレフを表し、端から 2 番目のシンは前から 2 番目のベス等を表している)。- それゆえ、a=th-ba=sh、א=ת - כ=שという名前がある)。

26. 26. ヨハネが主の千年の統治の終わりに千年王国エルサレムを包囲する軍隊とその指導者を「ゴグとマゴグ」と表現するのは、まさにこの理由からである(啓示 20:8)–エゼキエル 38-39 章がその時にその主要適用があるからではない(例えば、エゼキエル 38 章から 39 章はその時に主に適用されるからではなく(例えば、もし永遠の状態がすぐに来るなら、これらの軍隊の残骸を略奪する 7 年間の時間や必要性や可能性はありません:エゼキ 39:9-10 参照)、その例でも、サタンが裏で指示する一人の反神支配者によって導かれた世界的連合軍(ちょうど反キリストとその連合の場合のように)だからなのです。

27. 27. 別のアルファベットコードでは、ヘブライ語のアルファベットの前の文字を 3 つの子音に使うマゴグを解読し、単語を左から右ではなく右から左に読むと、ヘブライ語でバビロンを意味する「バベル」という結果になる(すなわち、m-g-g [מ-ג-ג]を逆にしたもの=g-g-m [מ-ג-מ]、そして各子音を前のアルファベットに置き換えると、b-b-l [ב-ב-ל]となります)。また、「ゴグ」という名前には、ヘブライ語で異邦人を意味する「ゴイ」が二重になったものを見ることができます。これは、反キリストを究極の不敬な異邦人の支配者として識別することになります。

28. 28. ヘブライ語の接頭辞 m- [מ]は、名詞的な表現でよく見られるように、位置的な意味を持ちます。

29. 29. 主の誕生日を決定する際の年代的な問題については、「悪魔の反乱」を参照してください。第 5 部「裁き、回復、交替」、II.9.a.1 項「キリストの誕生」を参照。

30. ギリシャ語テキスト(ms.  $\alpha$ 参照)では、「この[1]は 8 番目」という表現は男性的であり、獣そのものではなく、王たち(ギリシャ語で中性)、頭の一つ(ギリシャ語で中性)、山の一つ(ギリシャ語で女性)に言及しなければならないということである。同じことが、「他の」、すなわち七つの列の「最後の」列にも言えるので、どちらの場合も、その十王国というよりも、反キリストに言及しているのです。

31. 31. 「悪魔の反乱」を参照。第 5 部「審判、回復、交替」、第 III.2 節「サタンによる人間の自由に対するポストディルヴィアの攻撃(バベルの塔)」。

32. 神の計画に反対するサタンの立場から、世界の中心としてのユーフラテス川とバビロンに関する前編 3A のコメントも参照:第 III.6 節「第二の災い」。悪魔の滅亡(9:13-19)参照。

33. 第 1 部「終末の時代の聖書の資料:旧約聖書」IV.2.a 節参照。

34. M.F. Unger, Commentary on the Old Testament in. loc.

35. 来たるべき苦難」の中の聖書的な地球の四分の一に関する考察を参照。第 2 部 B: The Heavenly Prelude to the Tribulation, Section IV.4b, "Summary of the Four Horsemen" ("四つの騎手"のまとめ)を参照。

36. 聖書の 7 千年時代の日の解釈による艱難の開始の可能性については、「悪魔の反逆」シリーズの第 5 部、II.9 節、「人類史の 7 日間の具体的な年表」を参照してください。

37. 聖霊の抑制の働きの除去については、このシリーズの第 2 部 B、セクション III を参照してください。
38. 古代イスラエルでは、後に背教となった多くの復活があったことを参照してください(例: Judg.2:10-15)。アッシリアの滅亡がヨナによって始まったリバイバルの後に、この教会の最後の時代、すなわち、ぬるま湯が頭打ちになるラオディキアの時代にはほぼ同じ年数が割り当てられていることは、何よりも興味深いことです。
39. ネ.13:6 で、ニシュアルが「自分のために頼む」という意味のシャアアルのニパルを参照してください。
40. この事実が、黙示録 13:18 で与えられている「ゲマトリア」装置の完全な解釈を提供すると言っているのではありません。666 の完全な解決は、反キリストの名前の数値を計算するときのみ可能です(最初に確認する正式な名前がない限り、事実上不可能です)。完全な議論はこのシリーズの第 4 部を参照してください。
41. 悪魔の反乱」を参照。第 5 部「裁き、回復、入れ替え」、第 III.1 節「人間の血統の純潔に対するサタン」の先天性攻撃(ネフィリム)」。
42. ダニエル書のヘブライ語は、特に、独特に省略され、簡潔であり、しばしば、事前に詳細かつ具体的に手元の解釈を理解していなければ、不明瞭なほどである(これは、11 章以上に明白なことである)。
43. 来たるべき苦難」を参照。第 1 部:序論、I.2.h 項、「(艱難に言及する)他の箇所」。
44. 44. 反キリストの描写が 21 節から始まることを、ジェロームが最も早く理解したようである。
45. 次の注を参照。
46. ここと 23 節に見られるように、最初の説明の後に、より詳細な説明や「フラッシュバック」的な説明が続く現象は、聖書ではよく見られることです。創世記 2:4 で述べられた 7 日間の再創造の概要と、その後続くアダムとエバの創造に関するより詳細な記述を比べてみてください。悪魔の反乱」をご覧ください。第 2 部:「創世記のギャップ」、第 III.2 節、「創世記 2:4 の要約」。
47. 獣の父が、主に反抗して自分に従うように[墮落した]天使たちを服従させる際に用いた、同様の「人身売買」の方法論を比較してください。悪魔の反乱」を参照。第 1 部「サタンの反乱と墮落」の IV.3 節を参照。
48. 悪魔の反乱」参照。第 5 部「裁き、回復、交替」、II.7-9 節、「人類史の七日間」。
49. 反キリストの宗教運動の具体的な内容については、『来るべき患難』を参照。第 3 部 A: 艱難が始まる」の II.3.c.2 項「艱難の偽宗教の説得力」、このシリーズの第 4 部では、VI.1 項「反キリスト教の宗教とその世



界的拡大」。

50. 来るべき艱難」を参照。第 3 部 A「艱難が始まる。第七の封印から二人の証人まで」II.3.a 節、「『無法の謎』の解き放たれ」を参照。

51. 悪魔の反乱」の第 1 部、第 3 部をそれぞれ参照。

52. 例えば、ヘロドトス(Hist. 3.94; 7:78)やアッシリアの記録など。Unger's Bible Dictionary、The Interpreter's Dictionary of the Bible, s.v. "Meshech" and "Tubhal"を参照。

53. この頭部は、上記の II.1.c.3 節で見たように、二重の解釈があります。獣が「七つのうちの一つ」(すなわち、[復活]ローマの究極の皇帝)であると同時に「八番目のもの」(すなわち、復活したローマとは別の王国[バビロン]の王)であると言われるのは、このためである。これは、ダニエル書第 7 章の小角の場合と類似しており、同様に角として記述されているが、他の 10 個とは別個のものである。

54. この句は、少なくとも部分的には、版で一般に誤解されている。ヘブライ語の形容詞ミシュマン(משמנים、語源はシャマンמש)は文字通り「太った」という意味ですが、しばしば富と同様に力の意味で用いられ、それはここでの意味です(参照:イサ 10:16、「たくましい戦士たち」)。この言葉はアラム語の借用語で、ヘブライ語では地方を意味しますが、主にバビロニアとペルシャの帝国の地方であったユダに適用されています。この単語が「都市」を意味するという証拠があり、ここでは定冠詞なしで出現するので、固有名詞、つまり「都市」ではなく「市」、すなわち帝国の首都、ひいては帝国そのものと見なされなければなりません(これは基本的に、ターガムでローマとコンスタンティノープルに使われている名詞と同じです)。この点については、NASB が「領域の最も豊かな場所」という表現で、すべての版の中で最も正確な意味を捉えている。

55. 「陶工に投げなさい」という表現は、「陶工の畑」(cf. Matt.26:14-15; 27:3-10) を購入することを意味し、主要な町では、陶器用の粘土が切り出される場所でした。そのような畑は、時間が経つと大小の穴があいたようになり、卑しい埋葬以外には何の役にも立たなくなります。

56. このシリーズの第一部、IV.1.b.「『主の日』パラダイム」参照。

57. この語句について、M.F.アンガーは次のように述べています:「真の神の知識と崇拝を包含するユダヤ民族の呼称(すなわち「聖なる契約」)」、『旧約聖書注解』第 2 巻(シカゴ 1981)p.1684.

58. これらの船はまた獣の勝利を利用するのに役立ち(エゼキ.30:9-12)、再臨の時に反キリストのこれらの海軍力の破壊を聖書で強調することはこの点を強調しています(詩.48:4-7、Is. 2:16; 33:21-23; 43:14; cf. Ps.72:10)。

59. また、エゼキエル書 31 章には、アッシリアを表す木が「諸国の支配者」(すなわち、ネブカドネザル=反キリスト)によって倒され、その後、エジプトを表す木に同様の運命が訪れるというたとえがありますが、これは反キリストによる南部同盟(エジプトが中心)の征服の前に、復活したローマが獣のバビロンの手によ

り滅びることと平行するものであります。

60. この第六のラッパの裁きについては、本シリーズのパート 3A、III.6 節で取り上げています。

61. 61.未来の意味は、聖書ヘブライ語では頻繁にあるように、29 節で始まった未来の連続の中で先行するワウからここで派生しています(yashubh ubha', ישוב ובה)。

62. ヴルガタ語の表記を参照: percutietur.

63. この点については、バーニー・ブランケンシップ氏のコメントに感謝する。

64. 悪魔の反逆シリーズ第五部「裁き、回復、入れ替え」、第三章一節「人間の血統の純潔に対するサタンの先天性攻撃(ネフィリム)」参照。

65. この肉体的・霊的生命の荒廃こそが、ここでのヘブライ語の語源、shamam; שָׁמַםの真の核心である。特に Jenni and Westermann, T.H.A.T., s.v., v.2 col.971 を参照。「vom Leben abgeschnitten sein」を参照。

イクシスホーム